



大原海水浴場

づ中央の線を行く。土氣など、いふ停車場がある。大綱近くなると、左に弓弦を張つたやうな九十九里の濱を見る。波の音が遠く微かにきこえて来る。大綱からは、左に東金を経て銚子線の成東に合する汽車の線が左にわかれて行つてゐた。大綱の次は一の宮、こゝは上總の大磯と言はれたところで、別荘が非常に多い。それに海水浴の旅館も多い。青松館一の宮館などは、中でもきこえた方で、夏は逗留客がかなりに多い。そこには一の宮神社がある。それから、一の宮川は潟湖になりかけてゐるやうな形を示してゐるので、地理學上面白い川として知られてゐた。

大東の海水浴場は、中々景色が好い。此處は丁度、下總の犬吠岬と相對して、九十九里濱を包んだ大東

岬のある處で、岩も多い、波も高く、風景もまた雄大だ。磯にある松のさまもおもしろい。旅館は大東館、附近に、釣岬、東浪見寺、音信山などの勝がある。

大原の海水浴場は、停車場から八町、小濱といふ處にあつた。帆萬千館、大原館などといふ海水旅館があつた。海の景色は大東に劣らない。またこゝから、右に、夷隅川の谷に入ると、二里ほどで大多喜町があつた。

勝浦にも、海水浴場があつた。旅館は浪花館、特色のある、いかにも漁市らしい町で、生魚なども多い。

概して、この海岸の海水浴場は、ひらけたのが割合に新しいので、他に比しては、やや低廉だ。相模の海岸のやうな整つた設備は求めることが出来ないが、海の雄大な景色と、粗野な漁村らしい感じとは、却つて彼になくして此にあるのを見る。

勝浦から、都合で、小湊の方へ行つて、前に書いた安房の諸勝を逆に廻つて見るのも好い。

再び千葉に戻つて、三つにわかれた線路の右の線——即ち佐倉、銚子線を今度は辿つて行つて見ることにする。千葉を出ると、地形は今までは違つて、全く上總丘陵の中

に入つて行つて了ふ。林があり、森があり、山があるといふ風であつた。四街道驛は、附近に陸軍の下志津原を控へてゐるので、や、賑がで、特色に富んでゐた。

その次は佐倉だ。此處で成田行の汽車は右にわかれた。佐倉では、兵營と、將門山の名の残つてゐる城址と、佐倉宗吾の刑に處せられた跡と、先づ普通ではその位のものだ。佐倉宗吾の社は、酒々井の停車場から近い。堂はかなり立派で、參詣者が常に絶えない。こゝと成田との間には、成宗電車があつて、頗る便だ。

佐倉の次ぎは、八街、さびしい驛だ。しかし、此處から三里塚の方へ行く汽車が新にわかれた。

やがて丘陵の中を出ると、汽車は成東に着く。こゝには、鑛泉がある。胃病に好いと云ふことである。そのすぐ傍に波切不動といふのがある。昔は、九十九里の濱の波は、此の崖の下まで押寄せて來てゐたといふことであつた。

成東からは、全く海岸平野で、銚子まで行く間に、松尾、横芝、八日市場、干潟、旭町、飯岡、猿田、松岸の八驛があつた。此間は絶えず右に海濱を豫想したやうな感じの好いところであつた。中で、八日市場は一番賑やかな町だ。それに、此間で旅客の留意

佐倉
宗吾社

成東鑛泉

干潟

松岸

銚子町

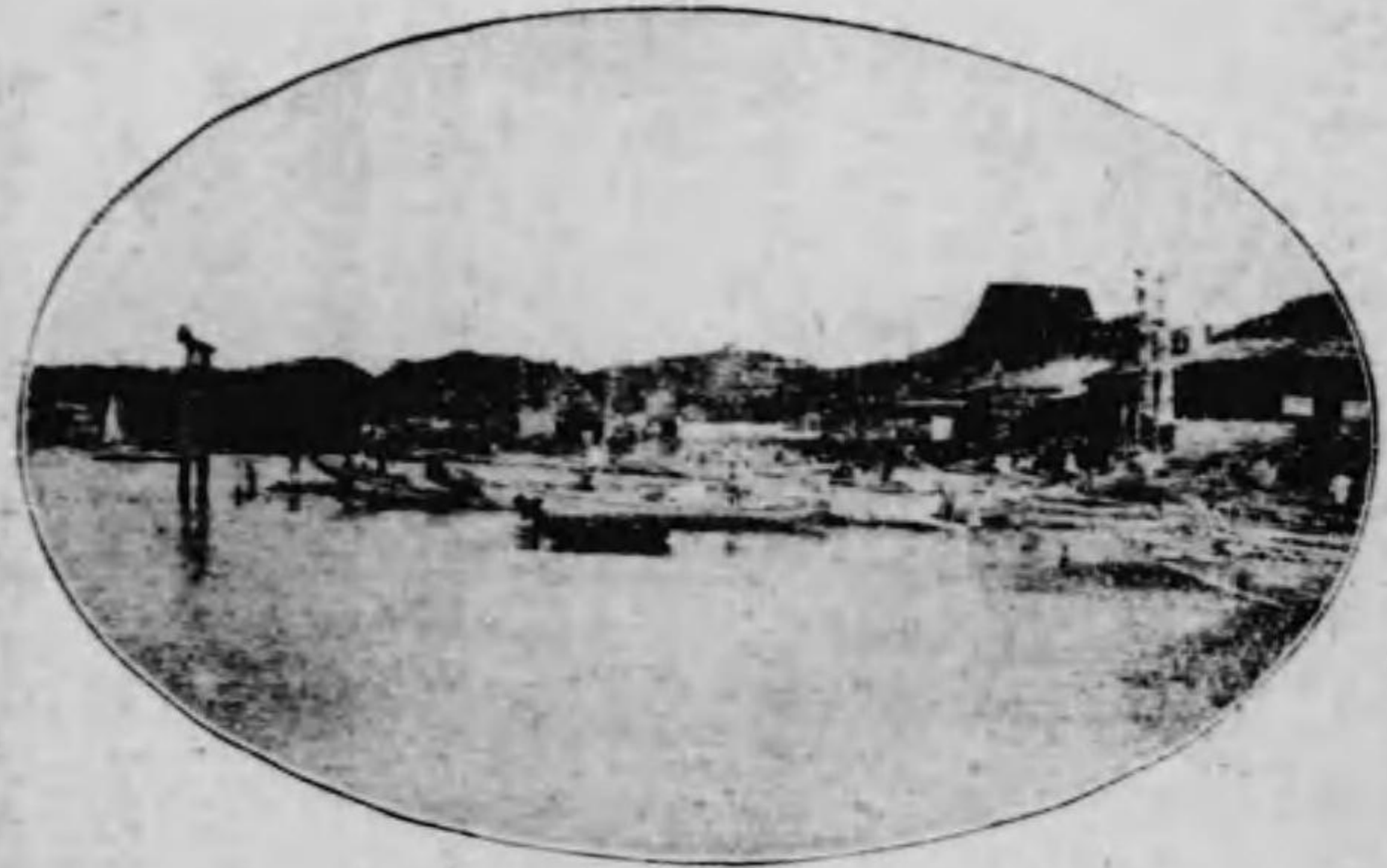
利根川

しなければならぬのは、干潟驛附近の地形であつた。この附近は、歴史上かなり新しい時代まで、一面の入江乃至湖水であつた。平忠常が叛した椿湖は、實にこの附近にあつたのであつた。今でもそのあたりの村の名は、椿海村と呼ばれてゐた。

猿田驛には猿田彦神社があつた。飯岡の海水浴は、停車場から一里ほど離れてゐるが、宿料も低廉に、風景も雄大で、ちよつと行つて見て感じの好い處だ。松岸の停車場あたり來ると、松林のさまが段々面白くなつて來た。利根川はすぐその左方を流れてゐるのであつた。松岸には、名高い大きな遊廓があつた。

そこから少し行くと、松林を透して、利根の大河は見えて來た。ついで、銚子の町が川に臨んで鬘氣樓か何かのやうに現はれ出して來た。好い感じだ。

やがて汽車は停車場に着く。こゝからは、更に改めて、銚子遊覽軌道の小さな汽車が犬吠の方へ向つて出て行つた。何遍も行つて、銚子町を知つてゐる人は、すぐそれに乗つて、犬吠の方へ行く方が好いが、初めての旅客は、先づ其處で下りて、銚子の町を一わたり歩いて見る方が好い。流石に昔から榮えた町だけあつて、家竝も揃つてゐれば、感じもわるくない。町の通には、例の山十の醬油屋などもあつた。で、これを眞直に向



銚子町

ふに突當ると、飯沼の觀音堂だ。丁度、田舎の淺草觀音と言つた風で、鳩がるたり、露肆があつたり、ぬれ佛があつたりした。裏に活動寫眞の小屋のあるのもよく似てゐた。

こゝを裏へ出て、少し上ると、軌道の本銚子の停留場があつた。そこで、旅客は犬吠の方へ行く小さな汽車に乗る。

しかし此處から大吠までの間は、一里半位で、歩いて見ても面白かつた。高原といふ感じ、三面海を豫想した感じ、利根の河口を一目に見た感じ、すべて好かつた。それに、此處等は、本州島の最も東に位置したところなので、氣候が暖かで、菜種の花は四月頃にはもう咲き出してゐた。東京とはかれは二十日位氣候が早かつた。

軌道で行くと、本銚子の次ぎが海瀨島、その次が犬吠だ。海瀨島は、海上に同じ名の島があつて、そこには、もとは海瀨がよく來たといふ。つまり樺太の海瀨島に行く途中、此處に、その群の一部がちよつと休んで寄つて行つたものと見える。そこにも、近頃海水旅館が出来た筈だ。

犬吠の停車場を下ると、松を隔て、海の碧い色が見えた。例の白色の高い燈臺も見えた。そこには、曉鷄館、御風館などといふ海水旅館があつた。私はいつも曉鷄館に泊つた。

銚子は私は好きだ。東京附近の海水浴場では、何處よりも此處が好いやうに私は思ふ。海の眺めが雄大で、松原が好くて、入日の深紫の波が好い。曉鷄館の海に臨んだ室も好い。燈臺に行く石切場も好い。

昔は銚子の磯づたひと言つて、銚子の町から河口の明神にお参りして、それから黒生、海瀨島、君ヶ濱、西明、長崎、外川、犬若、名洗と言ふ風に、磯づたひに、貝を拾つたり波に足を洗はせたりして遊んだものだが——『利根川圖志』などを見ると、さういふさまが挿畫になつて残つてゐるが、今日でも、それをやる人はかなりにある。

燈臺に行く間の石切場の谷は、かうも深く掘つたかと思はれるほどだ。燈臺の裏に廻つて二三町下ると、奇岩が二三あつて、胎内くまりと呼ばれてゐた。しかし、犬吠に遊んだ人は、是非とも、旅館の裏にある、畑の向ふの、松やら雑木やらの生えた愛宕山に登つて見なければならぬ。それは低い百米内外の山だから、女子供にも、下駄はきで樂に上つて行かれた。それに、細い路ではあるが、辿つて行けばひとり手に山の上に達する路がついてゐた。その頂上には石の小さな宮があるが、そこから見たした眺望は素的だ。一方には利根の大河が溶々として流れて海に落ちてゐる。一方には燈臺が松を隔て、高く聳えてゐる。一方には、飯岡の鼻に達する徒崖が屏風を建てたやうに連つて見えてゐる。實際、奇觀だ。ちよつと、他に、かういふ眺望は澤山ない。

で、そこから下りて、小學校の傍を通つて、外川へと行く。そこは海に向つてひらけた特色のある漁村で、相模の海岸などには見られない自然な素樸な趣がある。外川から犬若まではいくらもない。そこには仙ヶ窟と言ふ島があつたり、義經の遺蹟と稱するものがあつたりした。其處にも海水浴旅館が二三軒あつた。夏は東京から間借をして避暑

に行つてゐるものが多い。

銚子から利根川の汽船を利用すると、あちこちへ行ける。その汽船の出るところは、飯沼の觀音堂から少し東に行つたところで、潮來から鹿島の方へ出る船もあれば、霞ヶ浦を横断して常陸の土浦の方へ出て行く船もある。利根川を真直に溯つて、佐原に行つて、そこで香取神宮にお参して、成田から我孫子の方に出て来る汽車もある。至極便利だ。旅行の都合で、土浦、高濱から霞ヶ浦を見て、銚子の方へ出て行つて見るも好いし、成田から香取、佐原それから汽船で銚子の方へ下つて行くのも好い。

房總半島の頸部に當つて、もう少し書かなければならぬところがあつた。それは、利根川を昇りて南の地點で、常盤線の我孫子からわかれて、成田に行つて、それから佐原へと出て行く汽車の線の駛走してゐるところである。つまり成田から香取附近である。この汽車は主として成田鐵道線と呼ばれてゐた。

我孫子の次が湖北、つまり手賀沼の北といふ意味である。次が布佐、これは利根川を隔てて茨城の布川町と相對した繪のやうな町で、風景が頗る好い。布川町には、徳満寺といふ大きな寺がある。それに、布佐町から十二三町隔て、まだ汽車の出来ない、江

戸地方と銚子地方との交通が全く船に由つた時分に、河港として著しく榮えた木下の町があつた。此處からは、一條の陸路が印幡沼の後を掠めて、八幡、市川の方へと出て行つてゐた。

成田は關東でも最も流行る流行佛だ。参詣者の多いのは、他にその類がないと言つても好い位である。その成田の不動は、成田の停車場からその門前まで十四五町、車に乗つても十錢位、電車は往復わづかに五錢にすぎない。寺は神護山新勝寺と言つて、將門の亂の時に、怨敵退散の祈禱に初めて効驗をあらはした不動がそこに安置されてあつた。行つて見ると、成ほど盛んなものだと思はれるほど、堂宇も立派だし、門前町も繁華だし、寄進したものなどが多い。三重塔、護摩堂、斷食堂、節分の時などには、東京から行つてお籠りをするものが二三萬もあるといふことである。多い寺寶の中には、天國の寶劍と言ふのがあつて、年に一度つ、開張する。旅館は大きいのが非常に多い。中でも、貞松館、若松屋、大野屋、梅屋がきこえてゐる。

境内には、パノラマ館、圖書館、少し離れて幼稚園などがある。成田から酒々井にある宗吾齋堂まで、電車があつて、片道十五分、賃金十一錢あれば

行ける。是非寄つて行つて見る方が好い。

それから成田から先の滑川驛には、藤原將監を祀つた小御門神社、阪東二十八番の滑川寺などがある。少し離れて、字大須賀に、日本三三井寺の一つと言ふ東三井寺があつて、そこには、將門の妾桔梗の前の持つた鏡と懐劍とが寶物になつてゐた。やがて佐原に着く。そこは丁度利根川の南岸に當つてゐて、停車場を下りると、向ふに筑波の翠微が見えたりして、感じが好い。關東では酒の出来るところとしてかなりに名高い。

香取神宮は、常陸の鹿島神宮と共に、日本では古い社としてきこえてゐる。香取、鹿島詣と言へば、利根の水運を利用して、昔から江戸人のよく参詣に遊びに出かけて行つたところである。佐原の停車場から一里、祭神は經津主神、武甕槌神、魂神の三神で、鎮座したのが、神武天皇の十八年であつたといふ。社殿も壯麗、境内は幽邃で、細かに探ると、古蹟が澤山にある。

こゝから鹿島へ行かうとする人は、北へ半里、津の宮へ出て、利根の汽船に乗るのが好い。その汽船の發着所は、香取神社の一の華表の水中にあるところで、ちよつと景

息柄

色が好い。津の宮には、津の宮神社があつた。汽船の時間の都合で、ちよつとお参りして来るのも好い。

で、汽船は利根を下つて、小見川などといふところを通つて、息柄に着く。そこに、利根川に面して、息柄神社がある。これも次手に是非お詣りすることが肝心だ。こゝからは、銚子に行つても好ければ、鹿島の方へ行つても好い。

二十 霞ヶ浦と筑波方面

▲取手 から岐れる常磐線には見るところが多い。筑波も、霞ヶ浦も、土浦まで、常磐線の汽車、上野土浦間四一哩三等六十八銭。

- ▲土浦 から玉造、麻生、大船津、佐原、銚子方面へ汽船(本文参照)
- ▲土浦 から北條町までは、乗合馬車、それから筑波町へは徒歩。

霞ヶ浦方面

常磐線

利根川と江戸川
 小利根 松戸 利根
 利根川と江戸川
 小利根 松戸 利根

我孫子驛

平将門の遺址

この方面に行くには、主として常磐線の線路に由る。

常磐線の沿線は、最初は別に見るものもない。で、東京から南千住、北千住を経て、利根川を渡つて松戸に着く。松戸は小利根に臨んでちよつと好い處だ。こゝから味噌の出来る流山町まで、大抵、小利根の流れに添つて三里半ほどある。

馬橋、北小金、柏、柏驛からは、醬油の出来る野田町へわかれて行く軌道がある。やがて我孫子驛、そこで成田鐵道がわかれて行く。やがてまた大きな鐵橋をわたる。これは大利根の流れである。その向ふに取手驛があつて、そこから筑波の東麓を迂廻して下館に達する汽車の線路が左にわかれて行つた。

平将門の遺址は、取手から二三里東の守谷にあつた。もとは其處に行くには、取手

霞ヶ浦と筑波方面

で下りて歩いて行つたものだが、今では、下館線が出来て、その守谷驛で下車すれば、五六町でその遺址に達することが出来た。(これはあとで書く)

霞ヶ浦に行くには、土浦で下りるのが普通だ。

霞ヶ浦は東西七里、南北六里、周圍三十四里といふ大きな入江で、これを詳しく探ると、風景の好いところや、風俗の面白いところが澤山にあるといふことだ。ことに、初夏の新緑の候と、秋の蘆荻の花の咲く頃とが好いといふ。

この霞ヶ浦と大和根との間を航行する汽船は、土浦、鹿島、佐原、銚子間と、江戸崎、土浦、鹿島間との二つがあつた。

前者は午前五時、同九時半と、午後二時とに土浦を出發した。そして最後の二時のは、鹿島どまり、その前のは、土浦から麻生、牛堀、潮來を経て、鹿島に達し、それから眞直に佐原に出て、そして銚子へと行つてゐた。そしてこの汽船が翌日銚子から土浦の方へと引かへして來た。

後者の江戸崎、土浦、鹿島間は、江戸崎を午前の六時に出て、麻生に十時、潮來に十時五十分、鹿島に十一時三十分に着き、そして引返して、矢張、潮來、麻生を経て、午

後四時に土浦に行き、そこで一時間休んで、五時に出帆して、今度は眞直に江戸崎へと直航して來ることになつてゐた。

土浦は九萬五千石の城下だけあつて、町も綺麗に、家並も揃つてゐた。旅館は松庄、江戸崎屋、櫻井、笹本などといふのがあつた。この町の附近で見物するやうなところは、西子岡公園と、字明神にある平將門の叔父國香の墓と先その位のものだ。

霞ヶ浦は、麻生、牛堀あたりが一番景色がすぐれてゐるといふことだ。牛堀には、貴顯紳士の別荘などがあつた。それから、一畔の下に湖山の勝を見わたすといふ千歳樓といふ旅館があつた。

潮來は昔から人口に膾炙した。例の式亭三馬の筆などにも、その遊廓のさまは面白く描かれてある。例の菖蒲踊などをそこに行つて見るのも好い。そこは霞ヶ浦と北浦と相連つたところにあつて、ひろい眺めはないが、いかにも水郷らしい感じを持つた好いところであつた。稻荷山、汐浪の里、硯の宮、地藏河岸、烏帽子松、中でも例の十六橋が旅客の眼を惹くに足りる。

鹿島は大船津で汽船を下りる。それから官幣大社鹿島神宮のあるところまでは、また

十町ほどあつた。祭神は武甕槌神で、日本でも名高い古祠の一つである。境内、古松、老杉枝を垂れて、いかにも神さびた神々しい心持がする。そこには、七井、七不思議などといふ名所がある。七井とは染井、成井、幸柄井、清水井、保太井、寸府井、波左間井で、七不思議と言ふのは、要石、御手洗川、末無川、御藤、海の音、根上り松、松の箸である。この中で、要石は本社の東南一町、御手洗池は、二丁のところにある。神宮の裏の山を御笠山といふ。武甕槌命の兜を埋めたところだと言はれてゐる。神宮を東に海岸に出ると、鹿島明神が悪鬼の來襲を防いだといふ高天ヶ原だの、推古天皇時代に建立されたといふ根本寺だの、中臣鎌足の館址と稱するものなどがある。ある時、私はその根本寺の住職から、中臣鎌足の其處に生れたといふ事蹟を詳しく聞いたことがあつた。

この他、霞ヶ浦の勝を探らうとする旅客は、江戸崎の方へも行つて見る方が好い。江戸崎は餘り人は言はないけれど、ちよつと世にかけ離れたやうなところがあつて、感じが好い。眺望もすぐれてゐた。霞ヶ浦と銚子と佐原と香取と、この方面はむしろ一旅行として廻つて見るやうな地形

になつてゐた。旅客は房總半島の部を参照して貰ひたい。筑波は兎に角に關東地方の名山だ。標高は僅かに千米にすぎないけれど、平野の中に特立してゐるので、到る處からその雌雄兩様の姿を望むことが出来た。それに、山上の眺望もまた頗る廣濶である。此處から見た富士山は、殊にすぐれてゐると俳人宗長なども言つてゐた。

筑波に行くには、大抵土浦からするのが順路だ。この間五里、途中には、名所が二三ある。藤津にある藤原藤房の遺笠塔、高岡の法雲寺、小田にある小田治久の城址、北條町にある多氣の城址、泉觀音、田井には蠶の守り神だと言つて、養蠶家のよく参詣する蠶影神社などがあつた。

筑波の町は、丁度山の半腹にあつた。町には、江戸屋、渚東屋、大越屋などといふ旅館があつた。それに、此處には遊廓があつて、登山したものは、旅館よりもむしろ娼家の家に眠るものが多い。これと言ふのも、この山は、商賣繁昌といふ商人向の神にされてゐるので、商人があちこちから多く登つて來るためであらう。町から絶頂まで一里二十町、峰が二つにわかれて、東が女體、西が男體、男體には伊

四〇〇
辨尊を祀つてゐる。御幸原、連歌裾、大黒石、胎内くゞり、高天原、石門、みな川の
などといふ名勝がある。

筑波の北には、加波山の脈が長く連つてゐる。例の加波山事件のあつたところとして
世人に知られてゐる。

筑波から眞壁の方へ下りて行つて、小山の方へ出て来るのも好いし、下館の方へ下り
て下館、取手間の汽車で戻つて来るのも好い。水海道から、境の方へ出て、汽船を利用
するのも便だ。

取手、下館間の汽車は、つい昨年あたり出来たばかりだ。此間には守谷驛に、例の平
将門の内裏の址がある。今日、城壘暫濠のあとが猶残つてゐるけれども、その規模はさ
う大して大きくない。それに、その址は後人の偽造で、磐井にある方が本當だといふ説
もある。この沿線では、水海道の古驛、大寶沼、北畠親房が重圍の中にありながら神皇
正統記を書いた大寶城址などがある。ちよつと行つて見るに好いところだ。

二十一 常磐海岸

- 我孫子にて成田鐵道分岐、
- ▲取手にて常磐鐵道分岐。取手から守谷、水海道、下妻を経て下館に至る。三十一哩九、三等六十四錢。
- ▲龍崎へは佐貫驛にて乗替、
- ▲勝田驛より湊へ支線分岐。

常磐線の汽車の駛走してゐるところである。この線は東北地方に向つて旅行する東北
本線と相並んで南から北へと行つてゐるやうな形で、仙臺とか松島とかに行くのには、

行きは本線で行き、歸りは此線で來るといふ方が變化があつて面白い。

それに、本線は白河以北、野と山とばかりで、多く見るもの、ないのに比して、此線は、海あり川あり山あり、餘程變化に富んでゐるから、旅客も行きに單調に倦んだ眼を此線で醫やすことが出来る。

本線に比して、この線は哩數はや、多く、賃金は少し高いが、それを償ふだけのことは十分にある。

で、この線を陸前の岩沼まで辿つて行つて見ることにする。

取手驛には、停車場附近に、本多鬼作佐の墓がある。藤代驛からは、二里隔つた眞王山延命寺に、平將門の墓がある。大花羽字生には、累の墓、それから少し離れて、鬼怒川の岸に累ヶ淵といふ處があつた。

佐貫驛の女化ヶ原、女化稻荷、牛久沼、牛久驛の近所にある大規模の葡萄酒醸造地、荒川沖などといふ海の中の名でもありさうな停車場などもあつて、いかにもさびしい高原があつた。

この高原を下に下ると土浦町、つゞいて高濱驛、石岡は昔常陸の國府のあつたところ

で、いかにも古くからひらけたらしいのび／＼した氣分のするところ、こゝあたりから見た筑波山は中々好い。

友部驛では、小山から來る汽車の線がこゝで合してゐた。

水戸に入らうとする少し手前で、汚い沼が右に見えた。それが例の常磐公園のある仙波湖であつた。

水戸は徳川御三家の城下だが、名古屋、和歌山に比べては、此處が一番劣つて見られた。上市と下市と、二つにわかれた形も散漫でさびしかつた。それと言ふのも、商業市としての價値が乏しいからで、兵營があるために、僅かに昔の市街の繁華を保つてゐるといふやうな形だ。町も一本筋で、裏町は至つて淺い。

水戸では、例の梅が名物だ。春先になると、割引汽車がよく東京から出て行つた。この梅は、常磐公園と城址と兩方にある。常磐公園は停車場から眞直に大道を十四五町も行つたところを左に少し折れたところにあつて、烈公を祀つた常磐神社に賽して、それから公園へと入つて行く。後樂園と名に呼ばれたところだけあつて、庭はかなりに立派だ。泉石の布置にも俗でないところがある。好文亭あたりから望んだ仙波湖は、汽車の



常盤公園

中で見たのは違つて、いくらか感じが好い。常盤公園は第一公園で、第二公園は城址で、停車場のすぐ上のところにある。こゝにも梅がかなりにある。例の大日本史を選するために天下の儒者を集めた弘道館のあとが今でも残つてゐる。

孔子廟などもある。

この他、市の附近では、常盤村の藤田東湖の墓、瀧阪にある曝井位のものだ。別にこれと言つて見物するやうなところはない。だから旅客は、此處で下りた次手に、大洗に行つておあらひ節の本場の唄でもきくか、でなければ、太田まで汽車で行つて、義公の西山の墓地でも見る方が好い。太田まで

は、五里あるけれども、汽車があるからわけはない。半日あれば樂に行つて見物して来られる。西山の墓は、水戸侯の經營だけあつて、頗る古式で、感じが違つてゐる。それに、太田の町がちよつと變つてゐる。

太田には行かなくつても、水戸に來た人は、大洗には屹度行く。そこに行くには、車でも好いが、それよりは、那珂川を汽船で下る方が好い。その汽船の發着所は第二公園の裏の方になつてゐて、長い阪をだらんと下りて行つたやうなところにあつた。汽船は一時間おき位に出た。それに、この汽船の途中の那珂川の景色が穩かで、ちよつと心持が好い。海近くなればなるほど、感じがのんびりして來る。その間を汽船は靜かな音を立て、次第に下流へと下つて行く。

湊町と祝町とは、この那珂川に架けた海門橋で右と左にわかれてゐた。汽船のつくところは、橋の畔で、湊町に屬してゐた。湊町も賑やかな漁市で、旅館や海水浴場などがあつた。

で、橋をわたつて、祝町の娼家の軒を並べたところを通つて、松の間を七八町行くと、其處が大洗で、後には丘、前には荒海といふ雄大な風景がやがてその前に展けた。



常陸海岸大洗

波濤の荒さ加減は、銚子犬吠位で、土地はや、狭いが、松林の具合は、中々風情に富んでゐた。そしてそこには、大己貴命、少彦名命を祀つた磯前神社といふ瀟洒な社があつた。丘上の眺望はかなりにすぐれてゐた。湊、平磯の方面を望んだ形は殊に好かつた。海水旅館には、金波樓、魚來庵、大洗ホテルなどといふのがあつた。こゝで、磯節をきくのは興味が饒い。それに、此處に、按摩で、いそ節の上手なものがゐるた筈だ。

海水旅館としての設備は、まア銚子あたりと似たり寄つたりだ。生魚もかなり多く、調理もあまり拙い方ではなかつた。しかし、地が狭いので、さう長く逗留してゐるやうといふやうな心持がしな

しかし、この海岸には、海水浴場が到る處にあつた、磯濱にもあれば、湊にもある。平磯にもあつた。宿料なども割合に輕便でゐられた。

そればかりではない。この弓弦を張つたやうな常陸の長い海岸、つまり大洗あたりから川尻の鼻あたりまでの間の海岸は、全く平滑な砂濱で、漁も多く、漁村も多く、海水浴場も至る處にあつた。中で、河原子が一番好い。助川も好いには好いけれども——一

時常磐線の大磯などと言はれた時とは、土地もさびれ、旅館もさびれて、従つて設備などもさう大して好いとは思はれない。むしろ河原子などの方が好い。

河原子へ行くには、下孫驛で下車するのが一番便利だ。またこの附近に鮎川の海水浴場があつた。この下孫まで行く前に、大磯驛で下りると、その近くに、泉ヶ森の辨天、大磯神社の奇岩怪石があつた。この岩石を鐵鎖にすがつて上ると、常陸、磐城の海岸が一目に見わたされて、眺望が甚だ好い。それに、國道上の石無阪から見た海も、ちよつと他に見ることの出来ない好眺望であつた。

この沿岸はかなりに生魚が多い。秋は松魚などが盛んにとれた。助川は松の下孫驛から一里ほど隔つた眞尺山は、寒水石の産地としてきこえてゐた。

眺めはや、好い。旅館には、東曉館といふのがある。宿料一圓内外。附近に、水車の瀧、八幡清水などがある。八幡清水は、源義家の弓の筈で岩を突いて清泉を得たところだと言ひ傳へられてある。

川尻は風景の好いところだ。助川よりも此方の方が或は海水浴場としてもすぐれてゐるかも知れない。町のあるところも、すぐ海に臨んでゐて、向ふに一帶の徒崖を望むといふ形になつてゐた。海月樓、豊鶴館、本叶などといふ旅館があつて、助川よりも安い。八十錢位で一日樂にゐられる。附近に養蠶の祖稚彦雲命を祀つた養蠶神社、碁石の出る碁石の瀧、伴部楯形の城址など、退屈したら、行つて見るところがかなり多い。高萩の町は、町に楊柳が並樹になつてゐて、ちよつと感じが變つてゐた。附近に、高戸の瀧、滑ヶ瀧などといふ勝がある。旅館は松月館、白木屋、松陽館など。磯原も風景が好い。海水浴場もある。前に天妃山がこんもりとして海中に浮んでゐる。さまは、繪か何ぞのやうである。そこには辨天が祀つてあつて、何處か江の島のやうな氣のするところだ。山腹に、旅館、山海館がある。一夜を靜かにそこにすごすのも興味が饒い。少し行くと二つ島が見える。夫婦島一つは波に奪はれてのこる一つのかげのさ



常磐海岸

常陸磯原

「びしさ」かう私は詠んだことがあつた。二つ島は、今は一つの島になつてゐた。大津にも海水浴場があつた。例の昔の平瀧は、このすぐ向ふのところにあつた。昔の和船の港で、太平洋海岸では、名高いところであつた。町の人家は海に臨んで向ふに徒崖の上になつた。町のお宮などがあつた。いかにも昔の港といふ氣がした。大津と此處の間には、五浦といふところがあつて、そこに美術院の畫家の一村落があつた。常磐海岸では、川尻から磯原、平瀧、松川磯あたりが、一番風景のすぐれてゐるところである。

勿來關址へは、勿來驛で下りて國道に出て

湯本温泉

平町

赤井岳

久の瀧

波立薬師

調戸港

野馬追祭

中村町

左に七八町 瓜先上りに上つて行くと、やがて一帯の平地。そこに、例の義家の「吹く風を勿来の關と思ひしに道もせに散る山櫻かな」といふ歌を刻した石碑がさびしさうに立つてゐる。昔は此邊一面に山櫻の多かつたところで、今でも、少し山の中に入ると、春は人知れず爛漫とした景色を見せてゐるところがあるといふことである。櫻の化石などを賣つてゐる。海岸の風光明媚な處は、即ち松川磯で、そこに、住吉屋、櫻雲閣、笹本屋などといふ旅館があつた。

湯本温泉は、この海岸での唯一の温泉場であつた。そこは、湯本驛からすぐだ。温泉は町の中央に湧出してゐるので、海山の眺望もなく、丘陵と丘陵との間に挟まれたやうなごく狭いところで、長く逗留したいなどといふ気分は何うしても起らない。それに、この附近には、鑛山や炭山が多いので、風俗がおのづから淫靡だ。しかし、温泉の量は多く、旅館なども大きのがある。蔦屋などいふのが中でも殊に大きい。

平町は濱海道中屈指の都會だ。城下だけあつて、家並も揃つてゐるし、感じも好い。國道から町に入らうとするところに、長い長い陸橋がある。その附近から左を望むと、群山の起伏した中に、丸い獨立した山の聳えてゐるのを見る。それは七月のある夜に龍

燈の上るのを海中に見ると言ふので評判な赤井岳である。その半腹には常祥寺といふ大きな寺があつて、その夜は賽客が群集するといふ話だ。筑紫のしらぬ火などと矢張り同じものであらう。平から三里、一夜行つて泊つて見るのも好い。

四倉、久の瀧——そこがまた少しの間、海が近くつて景色が好い。久の瀧には、海水浴場もある。ことに、其處で名高いのは、その海岸にある波立の薬師で、大同年中海中から出現した瑠璃光如来を本尊としてゐる。島などがあつて海の眺望が好い。

これから先は、丘陵と平野と相交錯した中を汽車は走つてゐて、別に旅客の興味をそそるやうなところはない。しかし、浪江驛の東一里にある調戸港は、平潟と竝んで、濱街道の有名な和船の港であるから、ちよつと下りて見るのも好いだらう。小高に行くとき、例の相馬の野馬追祭の最初の神社がある。この相馬の野馬追祭は確か七月にあるのだが、到る處から野武士が馬に乗つて出て、そして、この街道を小高、原の町、中村とそろそろ列を成して歩いて行くので、一種特別な感じがする不思議な祭禮である。小高と原の町と中村とにその神社があつた。

中村は相馬の首邑だけあつて、中々賑やかな町だ。地形も感じが好い。こゝから、二



松川浦離崎

四二二

里で、松川浦に行くことが出来た。そこは松島などよりも却つて好いなどと言ふ所で、海山の勝は優に旅客の興を惹くに足りる。松島と同じく矢張入江を成してゐて、島の散點してゐる形など面白い。夕顔観音の堂から見た景は、殊にすぐれてゐた。

松川浦を見に行つた人は、其夜はその近くの原釜海水浴に一泊する方が好い。静かで、心持の好い海水浴だ。そして歸りは、新地驛か阪元驛あたりに出て来て、そして汽車を乗りつゞける。

これから岩沼まで行く間は、松が非常に多い。これほど松の多いところは、日本にも澤山はないと思はれる位である。巨理驛

から東に一里ほど行くと、阿武隈川の河口に荒濱町があつて、その近所に鳥の海水浴といふのがある。こゝも風景が好く、宿料も廉い。一夜泊つて行くのに好い。荒濱町の漁市らしい特色も一度は見えて置いて好い。

で、岩沼に行つて、東北本線に合する。こゝはもう陸前國で、そこから仙臺市はもうすぐだ。岩沼には武駒稻荷や笠島神社があるが、それは、本線の部に書くつもりだから、此處には略した。

この沿線は大抵東北地方旅行の次手に通つて見る位のところだが、沿岸、海水浴場は澤山にあるから、ゆつくり構へて、二夜三夜あちこちに泊つて見るのも興味の饒い旅だ。それに、物價が安く、風俗も粗樸で親切だ。

二十二 奥羽の旅

- ▲上野 青森間四五九哩九、三等四圓三十八錢、仙臺までは二圓六十三錢、一の關までは三圓七錢、盛岡まで三圓四十九錢。
- ▲上野 福島間一六八哩三等二圓十六錢。
- ▲福島 米澤、山形を経て秋田まで上野から三五四哩、三等三圓六十六錢。
- ▲郡山 から岩越線左にわがる。若松まで三五哩、三等五十九錢。
- ▲小牛田 鳴子間二七哩、九、三等四十六錢、鳴子鬼首の方へ行く汽車。
- ▲小牛田 石巻間一七哩三等四十三錢。
- ▲新庄 酒田間三四哩三、三等五十七錢。
- ▲米澤 長井間二一哩三等三十六錢。
- ▲秋田 羽立間二二哩三等三十八錢。男鹿半島へ遊覽するものゝ爲めに甚だ便利である。
- ▲その他 大館から小阪、十和田の方へ入つて行く軌道もある。

この旅行は東北本線で出かけて行く。上野から白河までは、後に「日光と鹽原と那須」といふ條下に書くこととして、先づ昔、奥羽の第一關であつた白河附近から始める。

白河では、城址と南湖と、それから白河關址、先づ此位見れば澤山だ。白河關址は、停車場から一里半ほどあとに戻らなければならないので、や、不便だが、旅客は是非行つて見る方が好い。勿論、そこはさびしい處で、別に他の奇はない。唯、來歴を記した石碑が一つ立つてゐるばかりだ。しかし、昔を思ふと種々なことが考へられるやうな處だ。『つてあらば都の人につけてましけふ白河の關はこえぬと』いかにも交通の不便であつた旅行の困難であつた昔の時代が想像せられずにはゐられない。

白河から棚倉へ六里、この間に人なつかしの山だの、感忠銘だの、勝があつた。棚倉から矢祭山の勝を見て、久慈川の谷を下つて常陸の太田に出て行く路があるが、この路はちよつと面白い。道興准后の一夜泊つて歌を詠んだ八槻の都々古別神社などといふ古い社もあつた。

白河から阿武隈川の上流を溯つて、甲子温泉に遊ぶのも興がある。たしか白河樂翁の其處に遊んだ紀行文があつた筈だ。

須賀川町からは、例の阿武隈川の乙字瀧に三十町ほどだ。それは阿武隈川が一ところ小ナイヤガラを成してゐるところで、南岸にある不動堂に踞して、それを見るときは形になつてゐる。ちよつと奇観だ。その他、町には岩瀬社、二本松、時雨塚、旭ヶ岡公園などといふのがあつた。須賀川町は、昔から商業地としてきこえた處だ。

郡山は立派な町になつた。これといふのも猪苗代から引いた疏水工事が成功したのであつた。今は人口三萬近くを有して、中學校もあれば、瓦斯工場もあつて、中々繁華だ。此處からは、岩越線が左にわかれて行つてゐる。開盛山公園には、春は花が咲いて、遊客が群集した。

旅客は此處で汽車を乗替へて、ちよつと會津の方へ入つて行つて見るのも好い。一夜東山あたりで泊る氣なら、樂に行つて見て來られる。先づ最初に、熱海驛に、熱海温泉がある。宿は松本屋、泉質は炭酸泉、胃腸に特效があるといふ。

山湯に行くとき、盤梯山が見え、ついで猪苗代湖が見え出す。山中の湖水とは思はれない程感じが大きい。猪苗代町には、湖水眺望地としてきこえた見福山、會津侯歴代の墓、縣社土津神社などがある。磨上原は、伊達氏と田村氏との古戰場として知られて

る。猪苗代湖は翁島驛あたりで下車して見るが好い。有栖川宮の別荘などが出來たので、近頃はあたりが大分開けて來た。



東山温泉

若松に入ると、感じが丸で違つて來る。そこには一種の氣風があつて、何處となくコチコチしてゐる。町もさう活氣を帯びてゐるといふ方ではない。しかし、維新の亂に逢つて荒敗したとは言へ、流石に大藩の城下町といふ趣はあつた。旅

客は其處では、舊城址を見物し、序に、例の白虎隊の飯盛山を見物する。そして、やはり東山へ行く。東山は若松市から一里、車で行つてもわけはない。羽前の上の山と庄内の湯の濱と共に奥羽の三樂園と言はれるだけあつて、かなり脂粉の氣に富んでゐる



柳津虚空藏

るが、隣室でさわがれて困るやうなことは度々あるが、それでも物價は割合に安い方で、人氣だつて、此方ですまつてさへるればさう大してわるいといふ方ではない。温泉は量が多くつて、内湯なども十分に出来る。旅館は古瀧、二八屋、櫻屋などが大きい。若松から北では、柳津の虚空藏堂、そこがちよつときこえてゐる。川に臨んで、大きな舞臺があつて、ちよつと眺望が好い。汽車で行けば、若松驛で下車して、それから車で里位。

この岩越線は、今では越後の新津まで連絡してゐるから、そのまゝ、越後の方へ行くにも非常に便利だ。

しかし、奥羽の旅だから、そこから引返して、再び郡山に来て、東北本線に乗つて北に向ふ。本宮あたりに来ると、左に安達太郎山が見える。日本の脊梁山脈だから、かなり高い。安達ヶ原の鬼婆の址は、二本松から東へ二十町ほど行つたところにあつた。羽二重の主産地、川俣町へは、何でも松川驛から下りて、三里ほど東に山の中に入つて行くのだつた。

福島へ来ると、俄かにあたりがひらけたやうな気がした。四面の山は、此處ではかなりの距離を保つて、冬は白雪の閃耀をあたりに見せてゐた。西から北へかけては、殊に山嶽の連亘が大きく高く見渡された。例の吾妻山などがその山の中に位置してゐた。福島は奥羽では、唯一の商業地だ。従つて市況は活潑で、感じが仙臺とか若松とかいふ城下町とは全く趣を異にしてゐた。此處で見物すべき所は、岡山村の文字摺の古蹟、信天山公園、それから少し離れて、飯坂の温泉、先づ此位だ。飯坂温泉には、軌道が通じてゐるので、行くには至極便利だ。そこは摺上川に臨んで家屋が層を成してゐるやうな形で、温泉の量も多く、旅館も大きい。十綱橋などといふ橋などもあつた。こゝと相接して、湯野村にも温泉があつた。兩方とも、宿料は割合に



飯坂温泉

廉いと思つた。従つて設備は到底東京近くの温泉場のやうには行かない。

福島からは、兩羽線が左にわかれて行つてゐた。米澤、山形、横手、秋田を経て弘前から青森へと行つて、東北本線に合してゐた。旅客は都合で、此處から兩羽線で行つて、東北本線を歸つて來てもよし、東北本線を行つて兩羽線に戻つて來ても好い。しかし、奥羽を旅行するものは、兎に角、この二大線路を通つて見る必要はある。此處では東北本線で行つて、兩羽線で歸つて來ることにしようと思ふ。

福島から先では、例の北畠顯家が南朝の爲めに義を唱へた靈山がある。その山は、桑折あたりを通る時、注意すると、車窓の右に當つて見

える。その半腹には、今、城址が残つてゐて、其處に別格官幣社靈山神社が祀られてある。其處に行くには、桑折から三里半、梁川町から一里半位ある。

白石附近には、往昔奥羽に入る第一關門のあつた址などが残つてゐた。賴朝が藤原泰衡を攻める時、國衡を敗つた柵のあとなどもあつた。白石は例の片倉小十郎の城下で、白石噺などが思出されるやうな處だ。こゝから白石川を溯ると、小原といふ温泉があつて、その少し先に、波瀾の材木岩があつた。例の柱狀節理が中々見事だ。鹽原にある材木岩などに比べると、規模がぐつと大きい。白石では、饅頭、紙布、生絲、紙、葛粉などが名物だ。

この附近の山の中には、温泉がかなり多く湧出してゐる。鎌先、岨々、遠刈田、青根などがそれである。藏王岳の下に位してゐるやうな地形で、山から山へと越えて行くやうになつてゐる。中でも青根が一番好いので、浴客が多い。青根にある大きな旅館の二階からは、複雑した丘陵を越して、太平洋の晴波を見ることが出來た。そこには、仙臺侯の浴した大きな不忘閣といふ家などがあつた。そこから藏王岳をこえて、羽前の高湯温泉に出て行くことが出来る。

越木・槻木の二驛を経て、岩沼町に着く。常磐線は其處で東北本線に合してゐる。岩沼町には、有名な日本の稻荷の元祖武駒神社があつた。停車場から七八町、町の南の外に近いところにある。承久年間に建てられた古祠で、毎年、春秋二期に、そこに馬市が立つた。門前には稻荷に供へる油揚げや玉子を婆さんが賣つてゐて、参詣するものがあると、それを籠に入れて勧める。樓門も社殿もかなり立派だ。

仙臺近くなると、いかにも地形が好いといふのに氣が附く。成ほど政宗が岩出山城から此處に出て來たのも尤だと點頭された。山と丘陵と交錯してゐる形も面白ければ、かなり近づいて行つても、仙臺の市街が丘陵にかくされてゐる形も好い。それでゐて、一方は海近く、地平線がひろく、感じが雄大だ。それに、仙臺市街の後に連亘してゐる七つ森あたりの山々も思切つて高いので好い。

仙臺は元千體の佛があつたので千體といひ、中頃千代と改め、伊達政宗が住むやうになつてから、今の字に改めたといふことだ。こゝは停車場も大きければ、市街も立派だ。芭蕉辻あたりは、殊に賑やかだ。その四辻は、仙臺侯が芭蕉の名を慕つて、四辻の角々に、鉾をつくらせたものだが、今は三つなくなつて、唯一つ残つてゐるばかりだ。



青葉城址

仙臺で見物するところは、廣瀬川、青葉山、櫻の名所榴ヶ岡、それから經ヶ峯の伊達家の廟は是非とも見なければならぬ。そこは廣瀬川の對岸にあつて、殿堂は金碧燦爛として、小日光の稱がある。その他、東照宮、八つ塚孝勝寺にある政岡の墓、南鍛冶町東頼寺の力士谷風の墓、北八番町の林子平の墓、北山町光明寺の支倉六右衛門の墓などは、旅客は行つて見る方が好い。旅店には、仙臺ホテル、芭蕉館、針久などがある。料理屋には、對橋樓がある。例の仙臺名物ハットセ節をきくのも面白からう。

その他、宮城野の跡だの、國分寺の跡だの、向山の眺望だの、細かに見れば、行つて見なければならぬところが澤山にある。

松島に行くには、此處で汽車を乗かへて鹽竈に行く方が順路だ。で、其方へ行くことにする。岩切驛に汽車が近く前に、左に當つて、田圃の中に高い小屋掛のやうなものが見える。そこは有名な例の多賀城址であつた。四面四百間ばかりの丘陵で、成ほど昔、城府があつたであらうと點頭かれた。此處は、奈良朝時代には、蝦夷を征する爲めにつくられた極北の城砦であつたので、今でも、その時分の布目瓦が田疇の間から出た。今残つてゐる多賀城碑は、其時分城門の前に建てられてあつたものださうで、丁度今の里程標のやうに、四近の遠近が示されてあつた。高さ六尺五分、廣さ二尺六寸七分、周圍九尺六寸五分、表面に天平寶字六年十二月一日と書いてあつた。

この附近に、其他、野田の玉川、壺の碑などの古蹟があつた。

で、鹽竈に着く。停車場前には、大きな旅館が澤山軒を並べてゐた。で、その中の一軒に休むなりして、そこに荷物を置いて、例の鹽竈の明神を見物に行く。その前に、松島への船の準備をして置いて貰ふが好い。勿論小蒸汽で行けば、別にさういふ必要もないけれど……。

鹽竈の町は、船着としてかなり賑かだ。それに特色にも富んでゐた。此處からは、

石の巻から金華山に行く汽船、三陸の海岸を縫つて陸中の宮古港まで行く汽船などが何日出港した。

鹽竈神社まで、停車場から七八町ある。で、長い長い石階を上る。境内は杉が一面に生えてゐる、頗る幽遠だ。で、登り切つて、樓門を入ると、中に立派な社殿があつた。東北地方では稀に見る建築であつた。此處では、蠟燭のお蠟が何かになると言ふので、その残りを買つて行く人が多い。で、參詣して、歸りは女坂を通つて、神馬のゐるところから、ずつと鹽竈へと歸つて来る。そして町の中ほどにある所謂鹽竈——昔の鹽竈などを見せて貰ふ。一人前たしか十錢だつたと覚えてゐる。一見の價値はある。

松島へわたるのは、小蒸汽で行くのも便だが、酒と折詰でも載せて、和船を一隻頼んで緩々島々の間を渡つて行くのも面白い。船賃は何でも四十錢位だと覚えてゐる。

この船の中は、島と島との間を縫つて行くのではあるけれど、一つ一つ離れんに見るから、さう澤山島があるやうに思はれない。唯の海である。唯の入江である。で、期待して来た人はや、失望する。しかし、多聞山の此方へ突出してゐる形や、大鷹森の連つてゐる向ふに、海門のやうに太平洋がひらけて、そこに遠く蒼く金華山が見えてゐる形

は何とも言はれず好い。やがて船は島々の間を縫ふやうにして進んで行く。裸島、恵比壽島、其他澤山數へ切れないほど島がある。

和船で海上二時間ほどで、松島に着く。旅店では、観月樓、松島ホテル、東洋ホテルなどが好い。で、まつそこに一夜泊ることにする。早ければ、すぐその前にある五大堂に行つて見る。

瑞巖寺は静かな好い寺だ。入口の右にある昔の天台の時分の岩窟は頗ぶる面白い。まだ寺のなかつた時分の佛教などといふことを人に考へさせる。瑞巖寺の中の建築、寶物、伊達政宗の木像、左甚五郎の彫つた栗鼠、さういふものは、皆な一見の價値がある。でそこを出て、何とかいふ尼様の歌を咏んだ名残の梅の老木を見て、政宗が桃山御殿の一部を買つて拵へたといふ觀瀾亭へ行つて見る。案内する女が士族の娘らしいのも感じが好い。觀瀾亭から見た松島の景色は、流石に名所の一つになつてゐるだけに頗る好かつた。島と海と松と、それが好い鹽梅に調和されて見られた。瑞巖寺の前の町は、大抵旅館と土産物とを賣る店であつた。土産物には埋木の盆、印材にする實竹などが好い。

旅館の二階、三階からでも、松島の景はかなりによく見られた。それを更に高く、更に大きくして見せたのが、新富山、及び富山の眺望であつた。

新富山は、旅館のすぐ上のところにあつた。しかし、矢張、松島の全景を見やうと思ふのには、富山の太仰寺の庭からでなければ駄目だ。實際、「松島の景は富山にあり」と言はれただけあつて、私なども、其處に行つて、始めて松島の天下の大景であることを知つた。

そこに行くには、里程二里、車賃往復六十錢ばかりかゝる。小蒸汽でも、富山の下までは行けるが、そこから上る路は、かなり峻しく、それに、十四五町以上もあるので、女子供には、ちよつと難かしい。それよりも少し金はかゝつても車で行く方が好い。富山の下まで車が行く。そこから、上り三四町である。で、山門を入つて、寺の庭に行くと、丸でバノラマのやうに、八百八島が一目に見渡される。私の見た時は、丁度秋の日の午後四時過で、夕日が一面にさして、海の色山の色の美しさは、實に何とも言はれなかつた。少し遠いけれども、私は是非富山にはお上んなさいと勧める。

この他、多聞山、大鷹森も松島では聞えた眺望地點である。大鷹森は中でも殊にすぐ



大鷹森よ見たり松島

四二八
れてゐるといふことだ。私は松島には、一月位見て見たいと思ふ。家でも借りて、ボートでも備へて、自由自在に、この灣内を漕ぎ廻つたり、魚釣をしたり、海水浴をしたりしたならば、夏日の興は盡るところを知りまいと思つてゐる。松島は灣がひろく景物の多いのが、他の嚴島、天橋立などに比べて勝つてゐる點であらうと思ふ。
金華山に行くのには、昔は石の巻港から陸地を通つて二日路位か、つたものであつたが、今では、汽船が鹽竈からちかに行くから至極便利だ。午前九時に鹽竈を立つと、零時半位に鮎川に着いて、それからぐるりと廻れば、すぐ金華山だから、遅くも二時

か三時頃には着くことが出来る。それに、汽船賃も八十錢位のものである。つい近年までは、鮎川にしか汽船が寄港しなかつたから、そこから山を一つ越して、向ふに下りて、山雉の渡しを渡らなければならなかつたが——それにこの渡しは潮流の烈しいのできこえたところなので、少ししけると、船が出なくつて、わざ／＼そこまで行つて空しく引返して来るやうなことが間々あつたが、今はもうそんな心配はなくなつて了つた。山には黄金山神社があつて、社殿も宏壯なれば、境内も広い。それに、山には旅館がないから、旅客は社務所について一泊を乞ふのであつた。風俗も質朴で、何處か太古の趣を存してゐた。旅客はもし暇があつたら、神社のあるところで満足せずに、山の頂上に登つて、更に裏の方の燈臺のあるあたりまで行つて見るが好い。海山の雄大な風景は、容易に他に求めることの出来ないものがあつた。
歸りには、汽船の都合で、石の巻港に上陸して、その近所を見物して、渡の波海水浴にでも泊つて見るのも、平凡でなくつて好いと思ふ。
松島から北すると、先づ普通では、一の關までは、何にも見物するやうなものもないのであるが、好事家は、ちよつと二日二日を費して、鳴子地方の温泉に行つて見るが好

い。鳴子八湯、鬼首八湯と言つて、其處には温泉が非常に多い。それに、鬼首は馬の多く出るところで、陸軍の軍馬養成所などがあつて、一寸特色に富んでゐる。それに、鬼首には日本にめづらしい間歇温泉があつて、頗る奇観だ。

昔は其處に入るのは、旅客に取つて、随分難儀だつたが、今は汽車が出来て、わけなく行ける。それに、この陸羽線が通つてゐるところは、源義経が北陸から平泉へと落ちて来た路、又は芭蕉が「蚤しらみ馬の尿する枕元」と呼んだ尿前の關のあつた路で、それは山越しに、羽前の新庄の少し手前の船形町へと出て行つてゐた。兎に角、一度は行つて見て面白いところだ。

そこに行くには、東北本線の小牛田驛から左へとわかれて行く陸羽線の汽車に乗る。この汽車は國道の古川町から、伊達政宗の以前の城のあつた岩出山町へと出て、池月、川波を通つて鳴子へと行つてゐる。

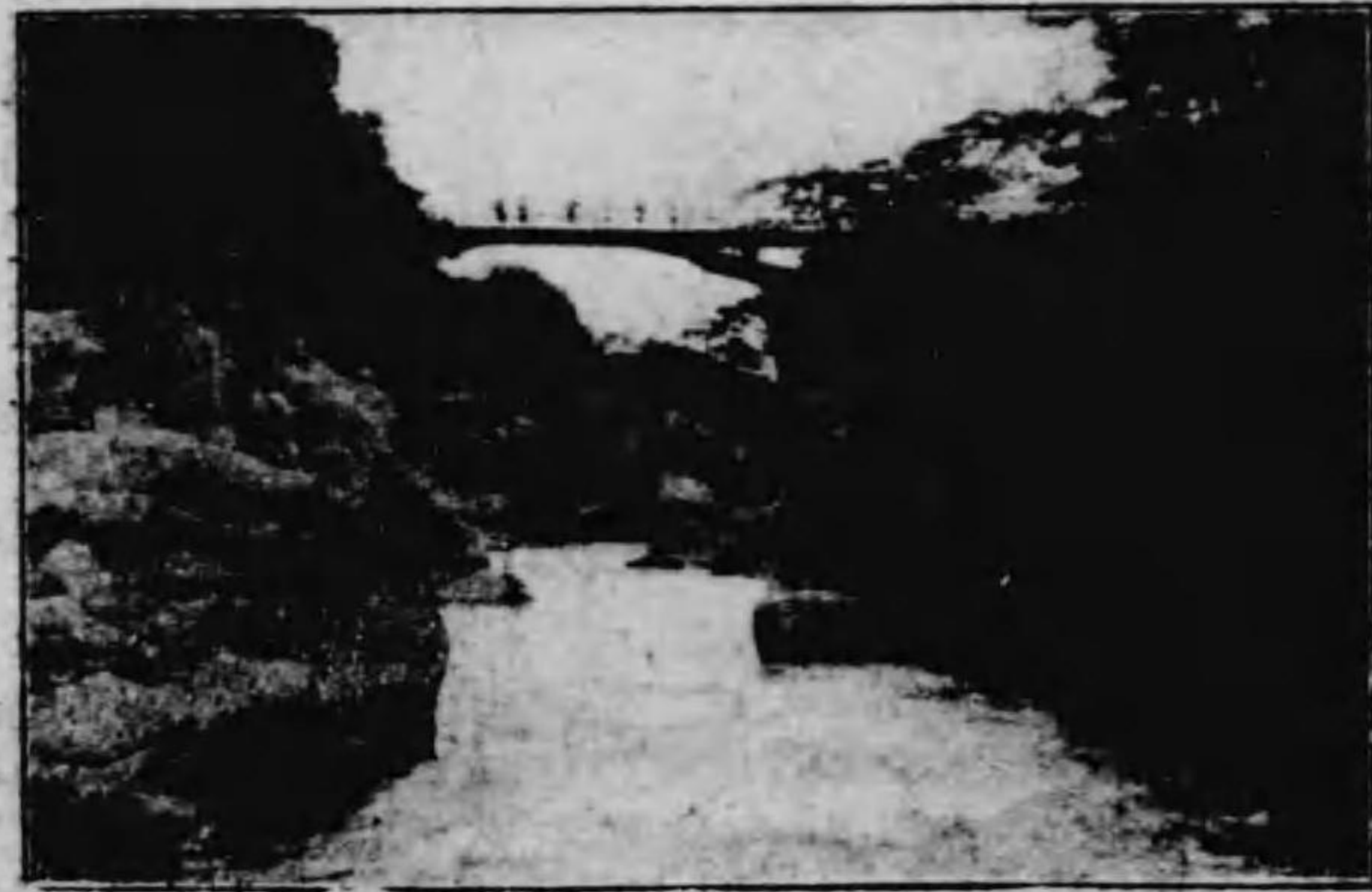
鳴子は荒雄川の谷で、温泉村八湯、鬼首八湯の稱があつた。前者は、河度、田中、寺梅、舊車、新車、鳴子、河原、中山で、後者は寒風澤神龍、轟、吹上、英雄等である。鳴子の方の川度、鬼首の方の吹上が中でも殊にきこえてゐた。

勿論、田舎の温泉だから、さう大した設備はある筈はない。しかし、さうした山の中の温泉に一夜二夜泊るのも興味があつた。鬼首の吹上は、日本では、熱海と二つしかない有名な間歇泉で、その噴出の状態は、熱海よりも餘程奇観だ。そこには、大小の穴が二つあつて、大きな方を弘法といひ、小さい方を不動と言つて、この二つの穴が晝夜七回づつ、温泉を噴出するのであつた。その間は三時間四十分位で、時間が来て、



吹上温泉

ゴオといふ音がきこえると、やがて數丈の高さの熱湯がそこから大氷柱のやうになつて出て来るので、頗る壯觀だ。しかし、惜しいことには近年大きい穴の方は出なくなつて、



嚴 美 溪

小さい方からばかり二時間おきに出るやうになつたといふことであつた。

この吹上湯泉に行くには、汽車が今の終點の鳴子驛から、また一つ山を越えなければならなかつた。この間は約二里ほどあつて、車も通じないから、旅客はその間だけは、案内者をつれて歩かなければならない。

で、その八湯の中の何處へでも一夜なり二夜なり泊つて、そして引返して来て、旅をつゞける。

これから一の關までは、殆ど見るに足りるものはない。

一の關に来ると、先づ第一に見るべきは、その西一里半のところにある嚴美溪の奇勝であつた。つまり磐井川の上流である。此間は路は平で、車

も通ずるから、女子供でも樂に行けた。溪はちよつと木曾の寢覺か、でなければ美濃の土岐川の谷に似てゐた。激湍と言ふよりも寧ろ濤潭である。水の色は思切つて碧く、奇岩怪石その間に起伏し、上に青松を點綴したさまは、人目を惹くに足りる。難を言へば、や、淺いが、それでも、東北で屈指の一勝地とすることは争はれない。それに、櫻が多

いから、春は見事であらうと思ふ。天工橋と言ふ橋が其處にあつて、その對岸に小さな堂などがあつた。松崎憐堂の書いた碑なども立つてゐた。

こゝから奥深く入つて行くと、酢川といふ温泉があつて、丁度栗駒嶽の麓になつてゐた。効能があるので、夏時は浴客が多い。それに、こゝから羽後に越える路は、路は峻

峻だが、向ふに越えてから、非常に好いコヤス川の谷の溪流があつた。知る人は稀だが、『あんなにすぐれた山水は何處にもない』とそこを越えた人は言つてゐた。

嚴美溪から山越しに中尊寺の達谷窟の方へ行く路はあるが、それは不便だから、兎に角一度一の關まで引かへす。一の關では、阪上田村磨を祀つた神社のある公園、南の郊外にある鈞山、そこにある曹洞宗の巨利願成寺、そこから見渡した北上川の眺望、蘭梅山公園の山腹にある大槻盤溪の墓などが一見すべき價値がある。それに、この町の少し



高館及北上川

東南の狐禪寺からは、北上川を上下して、登米、石の巻方面の交通の便をはかる汽船の便があつた。これに乗ると、石の巻港へ、は三四時間で行くことが出来た。

で、この次は平泉で下りる。此處に来ると、藤原氏三代の昔があり／＼と旅客の胸に集つて来る。北上川の向ふに聳えてゐる東稻山などもなつかしいやうな気がする。

此處では、旅客は二十銭か三十銭出して、案内者を頼む方が好い。と、一人でもちよつと飲めないやうな遺址があり／＼とわかる。町を離れると、清衡の初めてつくつた柳御所、秀衡の住んだ伽羅御所などの址が段々にあらはれ出して来た。西木戸太郎

のゐる址、宇治の平等院を模してつくつたといふ無量光院の址、猫間の淵、泉の酒址などといふものもその近所にあつた。

しかしあつたといふ址ばかりで、何處にも礎も何も残つてゐなかつた。平泉館址も唯址ばかりであつた。少し行くと、松並木があつて、右に、義經のゐた高館のある丘が靡いてゐた。高館は、平泉誌に由ると、昔はもつと丘の上の臺地がひろく、東西四百六十間、南北百三十間、高さ五十間と記されてあるが、北上川の浸蝕作用で、段々崩れて行つたと見えて、今でも、その丘は狭く狭くなつて了つてゐた。でも、その丘の上には、判官堂があつて、中には義經の像が安置されてあつた。

そこをもとの道に戻つて、汽車のレールを越えようと、茅葺屋根の家が五六軒あつたりしていかにも「廢都」といふ感じがした。そこから中尊寺へと路は上つて行つてゐた。路の兩側に古杉樹の深く茂つてゐるのも、何となくあたりにはふさはしい感じがした。路の左には、辨慶堂があつた。あるところからは、杉の木の間を隔て、衣川の北上川に流れ落ち、ふるさまが手に取るやうに見えた。やがて中尊寺へと着く。

中尊寺は、今では、金堂などといふものは残つてゐない。建武四年に焼けて了つてか

らは、經藏と金色堂とが残されてるばかりであつた。

金色堂は、芭蕉が『五月雨の降り残してや光堂』と詠んだもので、一に光堂と呼ばれてゐた。方三間に足りない一小堂宇ではあるが、正應年間に鎌倉將軍惟康親王が覆堂をつくつて置いたために、今猶その金装を完全に残してゐた。それは布を張つた上に漆を張り、その上に金箔をつけたものであるが、京都の金閣寺などはとてもこの一小堂に比すべくもない。内部は螺鈿珠玉を纏めて、美を盡し善を盡し、中には一時その製法の絶えた古の七寶の立派な柱などもある。壇上には佛像十一軀を置き、下には清衡、秀衡、基衡三代の棺を深く藏した。

經藏はその後にあつた。天仁元年藤原清衡の建てたもので、もとは二階であつたのを建武の火災に焼けて下だけ残つたのを修繕したものだといふ。三間四面の堂で、中に三代が納めた一切經——基衡は紺紙金泥、清衡は紺紙金銀泥、秀衡のは黄紙宋版——が藏せられ、それを入れた經函は頗る立派だ。千年前にこんなものが出来たかと驚かれます。は居られない。その他、文珠獅子、千手觀音などの國寶があつた。中尊寺と方面を別にして、毛越寺がある。今は法華、常行二堂が残つてゐるばかり

で、その附近に例の芭蕉の『夏草や兵疊もか夢のあと』の句碑がある。それから少し奥に行くと、坂上將軍が夷酋豆頭王を滅じた報賽のために山城鞍馬寺になぞらへてこしらへたといふ達谷窟があつた。

平泉は奈良についての日本の『廢都』だ。旅客は是非一日を其處に費やさなければならぬ。で、再び汽車に乗る。水澤驛には、例の有名な經緯度觀測所がある。その他此驛と金ヶ崎驛の中間に、坂上田村麿が延暦十二年に初めて此處に城を築いて東夷に當つた鎮守府の址が残つてゐた。花巻は昔、鳥谷の城と言つて、安部頼時のゐたところだ。この附近に、志戸平、大澤、鉛などといふ温泉があつた。中でも鉛温泉は山水の勝に富んでゐて、浴客が群集した。

日詰驛には、藤原秀衡の族比爪五郎秀衡のゐた比爪館舊址、頼朝東征の時、泰衡の臣河田次郎がその主の首を獻じた陣岡蜂社などといふ古蹟があつた。

盛岡では、城址にある公園、櫻山神社、裁判所の中にある石割櫻位のものだ。町もさう綺麗ではない。唯、北上川が市中を流れてゐるので、橋などが多い。盛岡の附近で

は、三十町ほど隔て、安部貞任の、厨川柵址、岩手山登山、先づその位のもので、別に心を惹くやうなところはない。

岩手山は盛岡市の山と言つて好い位、近くその翠微をあたりに見せてゐた。これに登るには、二日かゝる。馬で麓まで行つて、そこから三里、頂上に近いところは中々険しい。幸田露伴氏の『枕頭山水』中の『易心後語』に、こゝに登つたことが詳しく書いてあつた。

この岩手山の山つゞき、鎌倉森と小松倉山との間に、網張といふ温泉があつて、頗ぶる奇観ださうだが、普通の旅客にはちよつと行つて見られない。それから葛根田川にも奇勝があつた。

盛岡からは、さびしい高原で、始めて朔北の地に入つたといふやうな気がする。好摩、川口などといふところを通つて、沼宮内を経て、中山峠へと段々近いて行く。

中山峠はちよつと好いところだ。紅葉の時などに、此處を通ると、殊に美観だ。碓氷、箱根にも勝つた溪山の姿であつた。昔はこれから以北を奥の細道と言つたといふ。この中山峠にかゝる少し手前に、御堂村といふのがあつて、其處に弓弭の清水といふのがあ

つた。天喜六年源頼義が阿部頼時を征討した時、此處で炎天に水のないのに困つて、弓弭で岩を突くと、清泉が忽ち迸つた。で、頼義は喜んで、髻の間に藏して置いた自分の持佛の観音像を捧げて始めて此處に安置した。今でもそこに観音堂がある。それに、この小さな弓弭の清水が滾々七十里を流れる北上川の水源であるといふことが面白かつた。旅客はちよつと下りて見物して行つても損はない。

中山峠を流れてゐる川は、小繋川であつた。トンネル、溪流、山、トンネルといふ風だ。嵐氣もまた多い。これを出ると、一戸驛に着く。町は川の向ふにある。國道上には、波打峠所謂末の松山の勝があつて、その岩石には海産物や介石類が澤山に挟まれて入つてゐる。鳥越観音といふ石窟の観音などもあつた。

汽車は馬淵川の谷に添つて下る。福岡町はちよつと賑やかな町だ。國道の金田一といふところから左に一里ほど入ると、湯田といふ温泉がある。

汽車の沿線では、名久井嶽にある南朝の遺蹟がやゝ見るに足りる。長慶天皇の御陵墓などと言ふものがあるが、それは當てにならないとしても、南朝の落武者が南部に頼つて、此處に再擧の旗を翻へさうとしたのは事實であるらしい。有末允塚といふ古碑に寛成の

二字が刻してあつたり、近所の農家に長慶天皇の遺品を藏してゐるものがあつたりした。三戸町は、南部氏がまだ盛岡に出て行かない時分にゐたところだけあつて、町も賑やかなれば、地形も好い。こゝからは、ライマン峠を越えて秋田の毛馬内の方へ出て行く路がわかれて行つてゐた。十和田湖には、其路を行くのだ。

町の近所に、享保年間徳川綱吉が清人伊富九の獻じた斯波産の二馬を南部氏に托して、その種の繁殖を謀つたその一馬の死んだ遺址があつた。それは異國馬の碑と言ふので、碑の左側に、鹿毛二百九歳九寸五分 國春砂の字が刻されてあつた。斯波はアラビヤで、今でも南部地方の名馬には、この種に負ふところが尠くないといふことだ。

三戸町を出ると、前には平野があらはれ、その向ふに海が豫想された。劔吉驛には、南部氏が甲斐から此處に移つて来た時戸摩郡南部庄にあつたものを一緒に此處に持つて来たといふ櫛引八幡宮があつた。やがて尻内驛に来て、汽車は八戸行の一支線を右に岐つて、本線は左に曲つて、北へと指した。

八戸町は好い町だ。海近く、氣候も割に暖く、産物も多い。昔は八戸藩の城下で、人口一萬四五千もある。この地は二百年前には海岸の一荒蕪地であつたのを南部直房が開

墾して、そして今日の繁盛を來すやうになつたのであつた。古城址にある三八城神社は南部光行と南部直房との靈を祀つたものである。そこには一面に太平洋を見わたして、眺望が好い。それに、此處の八月の祭禮は、儀式が古風で、頗ぶる見るに足りるものがあるといふ。

淡港、鮫港——そこは八戸から一里位行つたところにあつた。鮫港の海上には、一面に蕪の生えた蕪島といふのがあつて、そこに辨天が祀つてあつた。春の日の船遊びなど興が饒いといふことだ。

尻内驛から野邊地驛まで行く間は、全く荒涼とした原野だ。即ち例の軍馬養成所などのある三本木原である。此間には、古間木、乙供あたりには雪除のトンネルがある位で、別に見るものがない。唯、注意すると、右に白鳥の多い小川原沼の一瞥を得る位のものである。野邊地近くにある壺の碑も、わざ／＼行つて見るほどのこともない。

野邊地の町は、地盤がいくらか高くなつて、そして海に臨んでゐた。さびしい海だ。暗澹とした海だ。いかにも蝦夷地へでも入つて来たやうな氣のするところだ。野邊地からは下北半島の大湊、田名部に行く汽船が毎日青森から來て寄港した。



浅 蟲 温 泉

野邊地驛を出てちよつと来たところは、海の景色が好かつた。国道の竝木の松の向ふに暗い陸奥灣が展けて、その向ふに、遙かに遠く恐山の噴烟の靡くのを見た。この間は、野邊地から陸路を行つて、田名部まで十里以上あつた。幸田露伴氏はこの間を馬でホク／＼歩いて行つてゐたが、「家遠しみを萩つむはみなし兒か」といふ句にさびしい旅の興を托してゐるが、其處には、矢張り、大湊行の汽船で行く方が便利だ。大湊から田名部までは二三里しかない。下北半島には、文明から離れた太古の趣があるといふことだ。

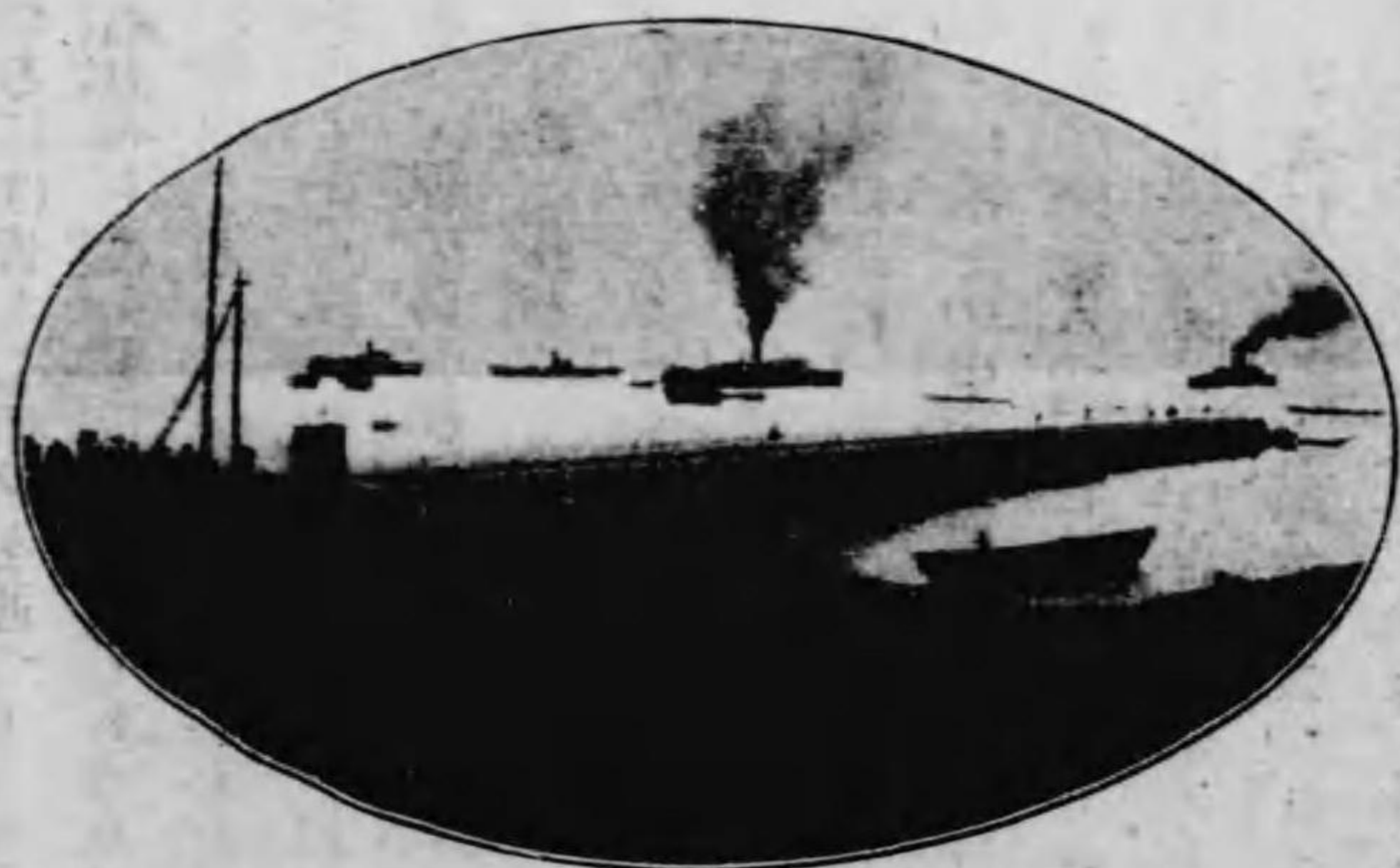
狩場驛の馬門温泉、小湊半島の楢山の少女の墓、さういふものも探つて見るのも好い。やが

て風景の好い浅蟲の海岸がその前へと展けて来た。浅蟲は好い處だ。それに、温泉もある。青森に泊る位なら、此處で泊る方が餘程感じが好い。其處は氣候も温暖だし、生魚も多いし、眺望も好い。其處からは、下北半島の恐山も手に取るやうに見えた。温泉もまた頗る豊富だ。楢の湯、大湯、大湧湯、五郎兵衛湯、裸の湯、柳の湯、日の湯などといふ別がある。旅館は陸奥館、海老屋、三國屋、小宮山、田村など、宿料もさう大して高くない。八十錢位で一夜とまれる。浅蟲と言ふ字は、元、里人が温泉に麻を蒸したので、麻蒸しと言つたのを今の字にいつとなく變つて行つたといふことだ。

唐味棧道は、ちよつと、北國の親不知のやうに、徒崖が海に突出してゐた。こゝは津輕と南部との争奪地點で、度々戦争があつたが、地形が險なので、南部は何うしてもこの海岸路を入つて行くことが出来なかつた。

此處等に来ると、津輕の岩木山の秀麗な姿がその前に隠見した。

青森はちよつと氣分が違つてゐた。それと言ふのも、本州島の最北の港で、本邦縦貫の汽車の終點を成してゐて、東京、北海道の旅客の影響を受けたからだ。旅館の設備も



青函連絡船

四四四

整つてゐる代りに、宿料なども他に比べて廉でない。北海道に渡る連絡船の出る棧橋は、停車場と二三町しか離れてゐないから、交通は至極便だ。北海道に行く旅客は、時間をしらべて行くと、停車場から、飯を食ふひまもなく、すぐそれに乗移ることが出来た。連絡船は田村丸、比羅夫丸の二隻で、半日で、津軽海峡を横ぎつて、函館に着くことが出来た。

青森では、善知鳥神社と、合浦公園と、先づその位のものだ。夏、佞武多の祭に出會すと、かなり異つた風俗を見ることが出来るが、平生では別に變つたところがない。

青森から西の海岸を縫つて、外ヶ濱の三厩に行く路は、昔からある古い路だ。昔は松前にわ

たるには皆なこの路を通つて、三厩まで行つて、其處で順風を待合せて、そして松前の福山へと渡つて行つたのであつた。この路は青森から三厩まで十五六里あつた。ちよつと行つて見たいやうな氣のする處だ。橋南溪の『東遊記』にある母衣月の瑠璃石なども拾つて見たいやうな氣がする。それに、そこに行く途中は、林相の美できこえたところ

で、扁柏などの見事な林が澤山にあつた。

汽車は青森から大釋迦の嶮にトンネルを穿つて、やがて津輕の平野へと出て行つた。左は八甲田山の脈は高く聳え、右は、平野の中に秀麗な岩木山を仰ぐといふやうな風景の好いところであつた。浪岡驛には、南朝の義舉の遺址があつて、長慶天皇の御陵墓考地などがあつた。北畠顯季の城址などもあつた。

これから弘前に行く間、旅客は飽まで岩木山の秀姿にあくがれることが出来た。實際名山だ。盛岡の岩手山よりも、此方の方がぐつと感じがすぐれてゐた。縣社黒石神社と、仁徳天皇の朝にその靈天蛇に化して蝦夷の酋を噉殺したといふ上毛野田道將軍の靈を祀つた猿賀神社とを持つた黒石町は、汽車の左の窓に繪か何ぞのやうに見えてゐた。

弘前市は何うしても北國の市街だ。町家の庇なども出てゐるし、感じにも特色があつ



岩木山

た。第八師團所在地だけに、何處か兵舎町らしい気分も見えた。旅館では、石場、齊吉などといふのが大きい。こゝで見物すべきものは、舊城址、そこから見えた岩木山、大圓寺の五重塔、松森町の賑はひ、先づその位のものだ。名物には、津輕塗が第一、林檎、干饅頭、鮭などがあつた。津輕少女の色白の姿も好かつた。

岩木山には、岳の湯あたりから登つて行く。矢張かなりに険しい。しかし、頂上の眺望は、三方に海を見渡すので、他に類がないといふほど好いといふことだ。それから、岩木川の上流に、暗門龍と言ふのがある。頗る大きい瀑ださうだが、途中が中々険しいので、減多に行つて見る人がない。

弘前から五所河原を経て十三湯、乃至深浦鯉ヶ澤



大鰐温泉萩桂

の方に行つて見るのも面白い。この間は汽車がないから、馬車が車かに頼らなければならぬ。十三湯から、龍飛岬の方まで行くと、世に知らない好風景の地が澤山にあつた。龍飛岬の勝は宇内第一だと碧梧桐氏なども言はれた。汽車は弘前からぐるりと廻つて、引返すやうな形になつた。大鰐には、温泉があるから、そこに一夜泊つて見るのも好い。そこは弘前の紳士達の遊びに行くやうなところで、湯の分量も多し、費用もさうかゝらない。それに、そこには、昔三千の僧舎のあつたといふ古刹などもあれば、幹は桂で萩に似た萩桂といふ古木などもあつた。で、また山に入つて行く。林相の美しい地方として名高い。礎ヶ關、そこにも温泉が

あつた。で、それを越えようと、矢立峠で、羽後と陸奥の境を成してゐる。
大館附近には、鑛山が澤山にあつた。尾去澤、阿仁、小阪——そしてこれ等の鑛山は設備が皆大きい。で、能代川に添つて下る。鷹の巣驛と二ツ井驛との間には、七座山神社と言ふのがあつて、山か能代川の谷に臨んで、風景が頗る好い。旅客はちよつと顔を車窓から離すことが出来ないやうなところであつた。

鐵橋をわたつて、濁々とした方へ出て行く。やがて能代驛だ。停車場から、海岸に近い町まで一里近くあるが、確か其處には軌道が出来てゐた。能代は古い和船の港だ、従つて衰退の感じが好い。女にも特色がある。方言で出来た唄などもある。それに、此處で有名なのは、能代挽材會社の大規模な工場であつた。秋田の國有林から伐り出す扁柏は、後に編んで、米代川を下して、そして此處で、木材にした。その工場の大きいのと、機械の新式なのは、眞に眼を驚かすに足りるものがある。

能代の町では、般若山といふ公園があつて、其處に料理屋などがあつた。一夜泊つて、古い港の空気に浸つて、三味線の音でもきいて見るのも興味が饒い。此處で出来る春慶塗は、餘り安くはないが、日本の春慶塗の一番すぐれたもので、昔は工傳を他人に知ら



男鹿半島龍ヶ島

奥羽の旅

れるのを恐れて、工人は船で海中に乗出してそして漆を施したといふ話だ。

森岳驛、機織驛、やがて八郎瀧の水光は美しく汽車の左の窓に反射して來た。低く長く對岸になびいてゐる山は、寒風山である。此處は景色としては、や、平凡に過ぎるが、それでも明治天皇の蹕を止められた南面岡あたりは流石に好い。

五城目、鹿渡、この二つの停車場がこの灣に面してゐた。

男鹿半島は東北での屈指の勝地として名高かつた。しかし、地が僻陬に偏在してゐるので、滅多に行つた人はない。普通の旅客には、ちよつと入つて行きにくい。それと言ふのも交通の

便がわるいからだ。其處に行くには、大久保か追分の停車場を下りて、車に乗つて、二
 三里で、八龍橋、この橋の上は景色が好い。それから船越、脇本、船川、この船川は日
 本海の港として著名で、冬、風浪の高い時は、汽船はいつでも此處に来て避難するのを
 例としてゐた。こゝまで車を通すが、これから先は、是非歩かなければならない。女
 川、鶴の岬、椿村にある妙見堂、能登山、双六灣の鰐淵岩、辨天島、く、り岩、段々奇
 勝があらはれて来た。門前は依然たる漁村だが、男鹿の勝を完全に見やうとする人は、
 此處で船を傭ふ。ところが、大洋だから、この船が中々文句つきだ。少しでも海がしけ
 てるては、船は出ない。それに、押して出て行つて見たところで、波が荒いので、大抵
 の人は参つて了ふ。だから、何うしても、舊の五月時分の、風のない極く静かな風の
 時でなければ、ゆつくり船で見物が出来ない。そして、船でなければ、仔細に、男鹿の
 勝を極めることが出来ない。

帆掛岩、五郎投石、エクリ島、扉島、垢取島、俎岩、油石、阿字が島、大瀧、それ
 から例の名高い高雀の窟、かういふものは、船でなければ見ることが出来ない。
 しかし、陸路でも、本山、眞山、寒風山、この三つに登れば、中々奇景がある。本山

の山頂の眺望などは、中でも殊にすぐれてゐるといふ話だ。頼三樹の『男子一搜男鹿島、
 松洲始覺近妖嬈』と言ふ詩は、その本山の山頂で作つたのだといふことだ。

門前から加茂、戸賀、かういふ風にくるりと廻つて、畑、黒澤、湯本には、温泉があ
 るから、誰でも其處で一夜泊る。それから翌日は本山かち、寒風山へ登つて、北浦の方
 へと出て来るのである。寒風山の頂からは、八郎瀨が實によく眺められた。

で、普通の旅客は、男鹿には入らずに、眞直に秋田市へと行く。この前に土崎港があ
 るから、其處もちよつと下りて見ても好い。土崎と秋田との間には、確か馬車か電車か
 あつたと覚えてゐる。

秋田は明るい感じのする町だ。停車場を下りると、城址と屋敷町で、城址にある公園
 がすぐその右の方の丘陵の上にある。據には夏は蓮の花などが亂發した。で、公園へと
 先づ上つて行く。あたりが綺麗になつてゐる。圖書館だの、神社だのがある。瀟洒な茶亭
 などもある。其處からは東北に太平山、竝に森吉連山の起伏を指すことが出来る。それ
 に、一方は、秋田市の瓦葺を隔て、日本海の怒濤の崩る、やうなのを聞いた。
 藩祖を祀つた秋田神社は、瀟洒な構造で、その傍に小さい招魂社があつた。

町で旅館は小林などが好い。見物すべきものは、東根小屋町にある八幡と、寺町にある誓願寺光明寺、前者には春日作の阿彌陀如来、後者には北條時頼の寄附した辨財天像、唐風の袈裟などがある。それから少し離れて、町の東北手形山には、平田篤胤の墓がある。東方旭川には、佐竹氏歴代の墓堂がある。先づその位のものだ。

名物は畝織、秋田八丈、落の模様の出たハンケチなどである。

秋田で、汽車は国道の方に行くが、海岸路を傳つて、羽前の酒田へ出て行くのも、面白い旅だ。この間には、本庄の町があり、鳥海山があり、例の松島と比べて「象潟の雨に西施がねむの花」と芭蕉の咏んだ象潟があり、吹浦の羅漢岩があり、鳥海の裾の眺望があり、見るところが頗る多い。飛鳥を海中に望んだ形も忘れ難い。この海岸路は秋田から酒田まで三十五六里で、車で走らせると、中を象潟で一泊つて、その次ぎの日には、早く酒田に着くことが出来た。秋田から本庄までは、路は頗る好いが、それから象潟で、車が快く走れない。しかし鳥海の裾を越えようと、また路がよくなつて、酒田まで一走りだ。

本庄町あたりで見た鳥海山の雄姿は今も私の眼の前にある。象潟も忘れられない。昔、

非常に勝景であつたところが、文化の地震のために、すっかり水が引いて、海が田になり、今日猶昔の海中の島を田の中に發見する形は、頗る奇だ。蚶満寺といふ寺も好い。一體、其處は鳥海山があるから好かつたので、成ほど入江であつた時分には、さぞ美しい風景であつたらうと思はれる。其處で私の一夜泊つた。宿の窓は、丁度、鳥海の晴色と相面してゐて、何とも言はれなかつたのを今でも覚えてゐる。それから小砂川から女鹿に至る間の鳥海山の裾の峠が好い。其處から見た海は、日本にもたんとはあるまい。吹浦の羅漢岩のある處も好い。何でも其の近所に、湯田といふ温泉場があつて、酒田から馬車を通つてゐた。吹浦から酒田に來る間の五六里は、橘南溪が「吹浦の砂蹟」と言つて、砂に巻れて困つたところで、今では防風林が完全に出來てゐるのでさうした難義はないが、それでも五六里の間、村もないといふやうなさびしい處だ。

秋田から汽車で、国道筋を來ると、さう大して見たいと思ふやうなものもない。刈和野、神宮寺、大曲、そこから入つて角館の奥に田澤湖の勝があるけれども、これは普通の旅客には、遠すぎる。見れば、金澤附近にある後三年役の金澤柵址だが、これとて、わざわざ下りて行つて見るほどのこともない。横手、千文字、湯澤——こゝからコヤス

小安川

院内町

新庄町

月山



最上川

川谷に入つて行つて見れば、それは好い溪山の勝が見られるが、これも四五里も入つて行かなければならないから、ちよつと臆却だ。そこには、川連、稻庭、小安といふ順で、例の陸中の酢川から一の關へと越えて行く路であつた。横堀附近では、小野小町の跡が少しばかり残つてゐるから、ちよつと一汽車おくらせて下りて見るのも好からう。院内銀山、それから院内峠の及位といふさびしい停車場、いつか汽車は羽後から羽前に入つて、やがて新庄町へと着く。此處等に來ると、羽前三山の一つである月山の秀姿が仰がれた。

酒田に行かうとする旅客は、此處で汽車を乗替へなければならぬ。この線路はつい近年完成し

最上川

酒田町

たものだが、これが出來たが爲めに、最上川の川船はすつかり荷物船となつて了つたであらうと思はれた。それから、船形、本合海、古口、清川間の風情ある交通路は、すつかり行人を絶つて了つたであらうと思はれた。あの最上川に添つた路、あそこを歩くことが出來なくなつたかと思ふと、何となくさびしいやうな氣がする。しかし、汽車は矢張あの川の岸を清川の方へと出て行つてゐるのであつた。古口驛からは、全く川に添つてゐた。此間に、清川に近く、草薙といふ處に白糸瀑といふ瀧が向ふの高い岩壁の上にかつてゐた。

新庄から酒田まで哩數三四、三鎖、三等賃金五十七錢である。時間は二時間半位で行ける。旅客は一夜泊るつもりで、そつちへ行つて見ても好い。

酒田は古い和船の港だ。今は衰退して了つたが、昔は兩羽の米穀は、皆な此處から積み出して、大阪へと上つた。西鶴の『一代男』などを見ても、其時分のことが想像される。で、其處に行つて見物すべきところは、日和山にある日枝神社「長き日を海に入れたり最上川」の碑の立つてゐる公園、そこから入つて行く遊廓、先づその位のものだ。それから、昔「本間様には及びもないが、せめてなりたや殿様に」と唱はれた土地の豪

家本間氏の邸宅などがあつた。酒田町で見た鳥海山は、瀟洒な好い感じを人々に起させた。

酒田よりすぐ引返すよりも、其處まで行つた次手に、旅客は鶴岡の方へ行つて見る方が好い。鶴岡町はそこから四五里、坦途車を行るのに適してゐる。それに、庄内平野は女の肌の白いのと、氣分の和らかなのとできこえてゐる。城址は今公園になつてゐて、庄内神社がそこに祀られてゐる。城濠の蓮花は見事だ。こゝから奥羽三樂園の一つである湯の濱に行つて見るもよし、加茂から念珠ヶ關の方まで行つて、北海の風景を探ぐるのも好い。大山町は大山酒の出来るので著名だ。

金峯山には、楠正成の縁故のある人の住んだ跡がある。正成の遺髪塔などがある。鶴岡から引返して、夏ならば、行者に交つて、羽黒山神社にお参りして、月山まで登つて行つて見るのも、面白い旅の一つだ。月山は昔、修験道の榮えた處で、今でも靈顯あらたかなお山である。

で、新庄まで引返す。やがて船形驛。そこは陸前の鬼首から尿前關を越えて、此方へと出て来る處だ。ちよつとした町だ。汽車は、西してすぐに大石田に行つてゐるが、

國道は尾花澤を通つて、猿羽根新道を下つて、楯岡町に行つてゐる。大石田は最上川水運の河港として重要な港であつた。汽車の出来ない前は、旅客は船でこゝから酒田へと下つて行くのが例だつた。

楯岡、東根、天童——天童には、織田信長を祀つた建勳神社があつた。何うして、尾張の英雄がかういふ處に祀られたかと言ふと、それは子孫が此處に小大名として住んでゐたからであつた。天童から東に入ると、二里ほどで、山寺の勝がある。

そこは岩石の奇はや、好いが、規模は妙義などに比べると、餘程小さい。寺の俗了されてゐる形もあまり面白くない。しかし、その山の奥には、瀧だの溪流だのがあつて、中々好い處があるといふことだ。

山形市は好い市街だ。四面をめぐつた山の距離が遠からず近からず、高爽な氣が到處に漲つてゐた。旅館では柴田屋などが好い。最上義光のゐた處で、歴史上から見ても面白い。それから、町が塗師町、桶町、旅籠町などといふ風にわかれてゐて、其處にその名の商賈が集つてゐるさまなども古風で好い。此處では、一番に馬見崎川の畔にある藥師堂、今は公園になつてゐるが、その彫刻は古いのできこえてゐる。其他最

上の初祖斯波兼頼の墓のある七日町の光明寺、最上義光の墓のある三日町の光禪寺、欄間の猿の彫刻で名高い専稱寺、磯礮町にある六権八幡、先づ町で見物すべきものはその位のものである。それから少し離れて、千歳山公園が行つて見る価値がある。其處に、阿古屋姫の古蹟などがあつた。熊野神社のあるところからは、山形平野が一面に展開されて見えた。今は何うだか知らないが、以前は、そこは松茸が澤山に出た。

山形の名産では、のし梅、甘露梅、それからやたら漬などがある。ナメコの雑話は、酒の肴として氣の利いたものだ。

山形に来て思ひ出すのは、大沼の浮島のことだ。しかし、普通の旅客には、ちよつと行きにくい。そこに行くには、左澤まで車、これが五里、それから大沼のあるところまで三里ほど歩かなければならない。沼は東西二百間、南北三百間の極めて狭い小さいものだが、そこにある松の生えた大きな島が風の具合で彼方へ行つたり此方へ來たりする。それを島遊びと言つて、昔は神業だと思つてゐた。そこには成島神社といふ一小祠があつた。

此處まで來れば、次手に、最上川の明神禿といふ奇景も探ぐる方が好い。それから左



上の山温泉

澤の近所に、百目杭と言つて、川魚料理で名高いところがある。

で、山形から上の山に來る。そこには温泉がある。會津の東山と庄内の湯の濱と併せて奥羽の三樂園と言はれるところだけあつて、感じが何處か艶めかしい。しかし温泉場としては、街道筋に當つてゐるので、あまり落附いた感じはしない。旅館には、龜屋、瀧澤屋などといふのが大きい。設備や座敷などはさう大してよくない。温泉は鶴脛の湯と言ふ。鹽類泉で、初め鶴が脛を浸して傷を癒してゐたのから發見されたので、その名を得たのであつた。丁度城址の下のところから滾々として流れ出してゐた。城址は公園になつてゐて



赤湯温泉泉

月岡神社といふ小さな祠が其處にあつた。山の眺望はすぐれてゐた。

この東の山の連亘は、背梁山脈で、かなり高峻である。そこには蔵王火山群などもある。ある。そしてその麓には、酢川の谷を溯つて、東北の草津と言はれる高湯温泉がある。羽前では上の山などよりは、ぐつときこえた好い温泉である。それに、宿料なども安く、五六十銭から七八十銭で、一日ゐることが出来た。

米澤平野の赤湯驛にも温泉がある。こゝもかなり賑はつてゐる。港屋、堺屋、大和屋など。糠の目驛には、一里東に有名な龜岡の文珠堂がある。春日作の文珠菩薩を本尊としてゐる。それに、本堂の傍にある櫻の幹に、文珠菩薩の形



佐氏泉公園圖

のはつきり現はれてゐるので著名だ。こゝは附近の流行佛で、縁日には、賓客が遠くから集つて来る。又糠の目の停車場から五里、伊佐澤村字蜂屋敷に、坂上田村麿、侍妾玉といふものが將軍を思ふの餘り、病死したのを、將軍が歸つて来て、憐んでその墓畔に櫻を植ゑた久保の櫻といふものがある。幹の周圍三丈五尺、高さ四丈五尺、枝の張ること十六間に及ぶといふ。めづらしい古櫻樹だ。で、米澤市に着く。市は山形などに比べて、餘程質素だ。町の大通にも茅茨瓦葺相半ばすといつた風である。これと言ふのも、上杉鷹山公の勤儉士に臨んだ風が残つてゐるのかと思ふとなつかしい。市では、先づ舊城址を見物する。そこは今松ヶ岬公園となつてゐる。舞鶴松を渡つて、舊大

手門は公園の入口、中央に上杉謙信と上杉治憲とを祀つた上杉神社がある。瀟洒な清らかな社殿である。一拜して今度は林泉寺町の林泉寺へと行く。其處は市内第一の巨利で、例の戦國英雄直江山城守の墓がある。それから、市の東二十五町を隔て、佐藤繼信、忠信の父正信の宅址があつて、今は佐氏泉公園になつてゐる。園内に三人の靈を祀つた小祠がある。米澤では、旅館は、遠藤、梅津、渡邊の三つの中で選ぶが好い。又、市の西北一里廣幡村字成島に成島八幡がある。そこはもとは坂上將軍の築いた城の址だといふ。

で、米澤から關根、大澤を経て、峠に至ると、例の板谷の嶮で、山も高く、溪も深く、感じが丸で違つて了ふ。この附近には、温泉がかなり多い。中で、峠から十五六町の五色温泉が特色がある。そこは一軒しか旅店がないが、五六百人の浴客をも容易に收容することが出来る大きな家で、夏は非常に賑やかだといふことだ。で、板谷のトンネルをこえて、福島へ出て、急行の汽車で、眞直に上野へと戻つて来る。

二十三 日光と鹽原と那須

二十三 日光と鹽原と那須

- ▲上野 日光間九〇哩三等一圓三十六錢。時間五時間
- ▲日光 から神橋を経て、馬返まで電車。
- ▲鹽原 へは西那須野驛まで九二哩、一圓三十九錢、それより鹽原軌道に由る。
- ▲白羽まで並等三十四錢。
- ▲那須 は黒磯驛にて下車、上野より黒磯まで一圓四十錢、それから五里乗合馬車、自働車。

日光と鹽原と那須とは、東京に住む人々のよく遊びに出かけて行く處だ。日光と鹽原

とは、ことに團體旅行などもかなりに盛になつて、春よし、夏よし、秋よし、いつでも行つて見て面白い。それに、野州の山水は、火山岩であるから、水と石との趣致が頗る綺麗である。日本でもたんとはない山水郷である。それに、春は八汐の躑躅、秋は紅葉で、山が皆な彩られるので、行樂には殊に好い。

那須は、これに引かへて、温泉がある。そしてその温泉の数が非常に多い。それにあんまり開けないので、設備は鹽原のやうには行かないけれど、宿料も物價も廉い。一日一圓あれば、樂に長く滞在してゐられる。日光、鹽原、那須、皆な一區劃をなして地形が連続はしてゐないけれど、一緒に探訪しても、さう大して不便をも感じない。日光に二日、鹽原に二日、那須に二日位で一週りして來るには、丁度好いところである。

上野から宇都宮までは、東北線、そこで乗替へて、日光に行く。一汽車おくらせて、宇都宮で下りて、一町を一廻りして來るのも興味がある。停車場から眞直に大通を行くと、七八町で、二荒神社のあるところに達する。華表があつて、上につて行くやうになつてゐる。日光の二荒山神社とは丸で別物で、崇神天皇の皇子豐城入彦尊を祀つてゐる古い祠である。

町の中央の丘の上にある宇都宮公園はちよつと眺望の好いところである。筑波、富士、それに、町の瓦葺が一目に眼下に見わたされる。春は花の名所で、人が大勢出る。大字北川原には、宇都宮貞綱の建立した興禪寺といふ寺がある。啓書記の得度したところだ。その他、淨瑠璃阪仇討の發端とも言はれる奥平内藏允の墓がある。

また此處から大谷石の出る大谷の岩窟に軌道がある筈だ。其處は奇岩の多いのできこえたところで、不動が何か祀つてある。妙義山を小さくしたやうな處だ。宇都宮には、藝者も大勢ゐるし、遊廓もある。遊廓はもと全町にあつたのだが、今は別廓を成してゐて、汽車が停車場に入らうとするところの左の方に、その廓の大きな建物が見えてゐる。

で、こゝで日光線の汽車に乗替へる。天氣が好いと、日光の男體女峯がはつきりとそこから指さされる筈である。で、すぐあたりが、今までは違つて、高爽な感じをつけて來る。左に見えるのが尾整、石裂、太平の連峰で、右に面白い形をしてあらはれて來るのが多氣大谷の翠微である。この高原の中に鶴田の一驛があつて、其處に中學校などがある。この附近は、日本での麻の主産地で、鹿沼には日本製麻會社の分工場がある位

だから、麻畑の連つてゐるのが旅客の眼にもそれと指さされる。

高原火山が右に當つて見えてゐる。

やがて鹿沼驛、停車場から町までちよつと二十町ほどある。鹿沼町は、昔京都から日光へ来る例幣使街道の杉並木の始つてゐるところで、それに、麻が出来るので町は頗る賑やかである。それに、感じが好い。こゝから金ヶ崎合戦場などといふところを通つて、栃木の方へ行く路があるが、この路は五里位で、ちよつと面白い。この路から少しそれて、昔の奥州街道の一驛であつた室の八島などといふ古跡がある。

停車場の北に聳えた多氣山不動へは、此處で下りて行く。

鹿沼からは、汽車は爪先上りで、煤烟の颯る音が喘ぐやうにきこえた。林と、藪と高原との中を、左に例幣使街道の杉並木を見て行くといふ形である。多氣山の嶙峋が一步一歩後になつて、今まで見えなかつた大谷の連峯がそれに連つて環を成してあらはれて来るやうなところに、文挾驛がある。さびしい停車場だ。こゝからは、この地方での流行佛小峯ヶ原へ行く路が山を越えて左にわけて行つてゐる。里程四里ほど。文挾の停車場の前は、ひろくとした高原で、氣持が好い、正面に、高原火山群が見

鹿沼驛

多氣山不動

杉並木

文挾驛

えて、や、左に日光火山群の北の端の赤嶺山が見える。小學校の広い庭などが汽車の中から見える。こゝを出て、少し行くと、日光火山群の主峯男體山が大眞名子小眞名子の二峯を抱いて女峯と相並んでゐるさまが、汽車の車窓の右になつたり左になつたりして見える。嵐氣が湧くやうに旅客の衣を襲ふ。

宇都宮を起點とした日光本街道の杉並木と、例幣使街道の杉並木とが、兩方から来て一緒になるところに、今市の停車場がある。此處に來ると、鹿沼、文挾あたりの高原的氣象はなくなつて、鼻先が山につかえるやうな心持のする地形になる。今市は交通上重要な地點で、市街もかなり賑かだ。こゝには、鬼怒川水力電氣の大きな工場がある。

栗山の奥から鬼怒川の水力を利用した電氣は、此處を経て、栃木の野を横断して、そして東京に行つてゐるのである。また、此處から中岩、川治を経て會津の方へ行く道がある。その路はかなり深い山の中で、半ば鬼怒川に添ひ、半ば五十里川に添つて、山王峠を越えて、塔の崎などいふ奇勝を経て、彌五島から會津の若松へと行つてゐる。維新の亂の時に、佐幕軍は此處から會津へと落ちて行つた。

今市から、例の杉並木は右になつて見える。で、暫くして、汽車は日光の停車場へ着

今市町

水力電氣

日光停車場

く。山は益々深く、谷はいよ／＼大きい。停車場の前には、俣が澤山待つてゐる他に、中禪寺手前の馬返しまで行く電車が其處に待つてゐるのは、至極便利だ。旅客はそれに乗れば、煩さい宿引などの手にかゝらずに、勝手に自分の好きところに行くことが出来る。しかし、旅館について晝飯でも食はうといふ人は、そこで旅館を選ばなければならぬ。日光は物價は高い。従つて宿料も廉でない。しかし、さうかと言つて世間で思つてゐるほど、高い家ばかりではない。小西あたりに行けば、それに越したことはないが、二流三流を選んでも、さう感じはわるくない。神山、紙屋、油屋などが好い。神橋館などといふのも、さうわるくない。宿料は小西あたりで、一圓五十錢乃至二圓、晝食料七十錢乃至一圓である。茶代は先づ一人一圓は奮發しなければなるまい。

しかし、お宮でも拜觀しやうといふなら、此處に泊るのも止むを得ないが、山水でも見やうといふ人は、こんな町などにぐづ／＼してゐる必要はない。電車で、馬返しまで行つて、中禪寺の明媚な湖畔で、其處で獲れる鱒のてり焼を肴に、一杯酌む方が餘程氣がきいてゐる。それに、泊るのには、そこから船で湖水を渡つて、戰場ヶ原を越えて、奥の湯元に行つて、靜に温泉にでも、入る方が好い。そしてお宮は歸りに見ることにする。

午後四時までは拜觀を許すから、湯元から来て、樂にそれを見て、汽車に乗れる。しかし此處では、普通の案内をしやう。町には、名物の羊羹、湯波、挽物細工、繪はがきなどを並べた家が旅館屋と軒を並べてゐる。何處となく感じがごた／＼してゐる。やがて町は盡きて、溪があらはれる。即ち大谷川で、例の朱塗の神橋が繪や寫眞で見たと同じやうに、美しくそこにかかけられてゐる。澤も見事なれば、溪を擁した山の形も面白。山内の杉の古木のこんもりと繁つてゐるさまも好い。

やがて杉並木の中の長阪にかゝる。その前に、右に小高く小さな社がある。深砂大王の社で、勝道上人が始めて山に入らうとする時、この溪流が渡れないで困つてゐると、この深砂大王が蛇を使つて、難なくこれを渡らせたので、橋は一に山菅の蛇橋と言ひ、それで、今でも此處に深砂大王を祀つてゐるのである。で、長阪を登り盡すと、角に保光會があつて、その向ふに、輪王寺の裏門がある。それを入つて行く。と、拜觀券を賣るところが、すぐその向ふにある。

拜觀券を買へば、屹度案内者がついて、詳しく説明して呉れるから、お宮の中は、別にこゝに詳しく書く必要はない。しかし、一通り言つて見ると、先づ輪王寺の金堂とも

いふべき三佛堂がそのすぐ近くにある。大きな建物である。中に大きな三尊佛がある。この建物の前に大きな糸垂櫻がある。そこから裏に廻つて、大師堂にお詣りして、相輪塔の傍を通つて、東照宮の入口の前の大通へと出て行く。

杉の木が非常に大きい。一番先に、黒田長政が筑前の國からわざわざ運んで来て建てた大きな石の鳥居が眼に附く。柱の直径が三尺五寸、額は後水尾天皇の宸筆である。西には、五重塔が立つてゐる。酒井忠勝の献上したものである。で、最初の門の前で、下駄を草履にはきかへる。三神庫の中では、猿の彫刻が著名である。つゞいてお水屋、唐銅の華居、南蠻鐵の燈籠、それから石段を登ると、陰に、時の奉行秋元但馬守の獻じた飛越の獅子がある。三代將軍が非常にお褒めになつたと言ふので、一に飛越悲悅の獅子と呼ばれてゐる。

例の陽明門、一名日暮し門は、すぐその前に立て、ゐる。成ほど評判ほどあつて、見事な立派な、善を盡し美を盡したものだ。柱が十二本、その中で、一本は逆柱と言つて、あまりに完全すぎたは魔がさすと言つて、わざとさうしたのだといふ。注意して見ると、木目の渦流が皆な下を向いてゐる。天井にある狩野探幽の昇龍、降龍の畫は、旅

客は注意して見落してはならない。それから、唐門、入ると、拜殿、成ほど立派だ。確かに目を驚かすに足りる。こゝに堆朱の卷柱は、今でも容易にその真似は出来ないものだといふ。陽明門の東に、例の猫門、猫は思つたより小さい。世間では左甚五郎の作たと言ふがさうではない。こゝから、長い石段を登ると、奥に家康の墳墓がある。しかし、行つて見るほどのこともない。

東照宮を出て西に行くと、二荒山神社がある。日光で一番古い社で、勝道上人の勸建したものである。裏に化燈籠などといふものがある。この傍から、瀧の尾の方へ行く路がわかれて行つてゐる。

で、一拜して下に下ると、常行、法華の兩堂、右を見ると、三代廟の入口の門が見える。この二堂の間を左に入つて二三町行くと、慈眼堂があつて、そこに北白川宮の銅像がある。

三代廟はあとで出来ただけに、東照宮よりも却つて建築がすぐれてゐると言はれてゐる。二天門、寶庫、御手洗水盤、すべて東照宮と同じである。夜叉門は丁度東照宮の陽

明門といふ形で、左右にある四夜叉の彫刻は、世にきこえたものであつた。唐門から、拜殿、そこには家光の木像が安置されてあつた。

皇嘉門はちよつと變つてゐた。支那風の建築である。それを入ると、奥の院、そこに家光の墳墓があつた。

もつと詳しいことを知り度いと思ふ人は、『日光山志』を見ると好い。それから、近頃研究した『日光宮殿の研究』などといふ本もある。兎に角、日光の建築は、時代も新しく、規模も小さいが、その金碧の燦爛とした形は、實に海内無比で、外國人などの驚嘆するものも無理ではない。

二荒神社の傍から、十三四町行くと、奥に瀧尾権現があつて白糸瀧といふ小さな瀑がある。千種石、泪の泉、三本杉などといふのがあるが、今は滅多に人は行つて見ない。

山内には、昔は院と坊とが非常に多くあつたものだが——高野山のやうに、一面講中の宿泊に宛てたものだが、維新後、その制度がなくなつて、今は院が七つ八つ残つてゐるばかりである。護光院、照尊院、安養院、法門院、化藏院、櫻本院、日増院、禪智院

醫王院などといふ寺々である。そしてこれ等の寺々を統一して、中央に輪王寺門跡がある。

山内の向ふに、入町がある。日光の町としては鉢石通りよりも、此方の方が古く且つ趣致に富んでゐる。羊羹の元祖の綿半、蕎麥の高井屋、料理の木村屋。さういふ古い家は、皆な此方にある。日光ホテルは、昔、日光奉行所があつたところである。

こゝで蕎麥好きの旅客に御勧めしたいのは、入町にある高井屋の蕎麥で、栗山蕎麥と言つて昔から有名だが、かういふ蕎麥の發達したのは、日光の山内の寺々の需要から起つたので、こゝで、三四十分待つて、山内流に打つて貰ふと、何處に行つて食つた蕎麥よりも旨い。東京で名物の蕎麥は無論のこと、信州更科でも、野尻でも、戸隠でも、何處の蕎麥でも此處には及ばない。しかし、此頃では、わろく開けて、東京の客と見ると、東京流に蕎麥を打つて食はせるから、それは豫めさう言つて避けなければいけない。それに、此處の蕎麥は、夏でなければ、折詰めにして、東京に土産に持つて來ても大丈夫だ。

その他、鉢石に、湯澤屋の饅頭がある。これがまた旨い。生中に東京風を模さずに、

田舎風にやつてあるところに、一種の親しみとなつかし味とがある。少し重いが、羊羹などよりも、此方の方が東京の土産に好い。



淵 滿 含

洪水ですつかり此路が駄目になつて、別に今の電車の駛る路が出来た爲めに、入つて行くのにもちよつと臆切になつた。それに、水力電氣が動力をこの水に借りたがために、元

湯波にも好いのである。卷湯波、松川湯波など殊に旨い。

名物は先づ此位にして、また案内に移る。近い處では、含滿ヶ淵だ。元は此處は中禪寺の街道に添つてゐたので、誰も遊覽者は皆な見て通つたところだが、明治四十一年の

のやうな凄しい激湍は見ることは出来なくなつたが、しかし、一訪の價値は十分にある。岸に無數に竝んだ地藏尊、弘法大師の投筆の「撼滿」の二字、皆見るに足りる。こゝに行くには、電車の花石停車場で下りて、左に叢林の中を掠めて行くのだ。

田母澤の御用邸の傍から、殉死墓のある釋迦堂に添つて、溪に溯つて行くと、一里にして、昔の寂光、今の若子の七瀧に行くことが出来る。七段になつて落ちる瀧で、かなり奇觀だ。それに、この奥に、一つ瀧、羽黒瀧などいふ瀧があつた。

裏見瀧は、同じ名の電車の停車場から右に入つて、一里位、始めは草藪、それから、荒澤の谷、つゞいて裏見の一の瀧、そこに休茶店があつて、それから、いくらか山路にか、つて行く。昔は、この溪は幽深を極めたもので、感じが頗るよかつたが、洪水の爲めに、瀑畔の岩も缺け、樹木も少くなつて、元の趣は半分以上なくなつて了つた。瀑畔には瀑見茶屋があつて、そこから見た瀧は、ちよつと好い。水も齒に沁みるほど冷たい。この奥に、初音、慈觀の二瀑があつた。路は始め少し登るだけで、あとは高原の草藪の中だが、女子供にはちよつと難かしい。しかし、此處は、春は八汐、秋は紅葉の名所で、日光の人達は、行厨などをつくつて、一日がけで、よくそこに遊びに出かけた。慈

觀の瀑は、瀑そのものが既に行樂に適してゐるやうな瀧だ。巖探には殊に妙だ。
裏見の一つ瀧のところから、川を向ふに渡つて、阪を下りて、舊道の峠を越して、馬返に出て行く捷路がある。この路は車は通はないが、歩いて見てちよつと興味のある路だ。舊道の峠もさう大して険しくない。馬返に近く、大谷の谷を見渡したあたりは、何となく感じが好い。

電車で行くと、裏見の停車場から、荒澤の谷を渡つて、白崖から、清瀧へと行く。途中右に清瀧と清瀧の觀音堂とを見ることが出来る。やがて足尾の精鋼所の一區劃があらはれて来る。ちよつとした町を形成してゐる。それから、岩の鼻に来て、大谷川に添つて、次第に、馬返へと近づいて行く。

馬返は昔は此處から先は馬は行かなかつたので其名があつた。そこにある葛屋は、ちよつと感じが好い。林を隔て、大谷の水壁をきく形も捨て難い。こゝで力餅といふのを賣る。午飯も割合に旨く廉く食へる。そこを通り越すと、日光山水の第一の勝なる深澤の谷が始まる。
谷が狭く、水が凄しく吼えて、巨岩が高く頭上に落ちかゝるやうな氣がする。そこに

に風の神の穴だと言ふ巨岩が仰ぐばかりのところ指點される。水の碎けた色は、丸で水色縮緬か何かのやうに見える。對岸には朝日瀑といふ瀑がかつてゐて、それに朝日が美しくかゝやく。やがて溪橋を二つ渡ると、谷は更に新に開けて、右から方等般若の谷の水が落ちて来る。紅葉の時や、八汐の時などは何とも言はれない。

深澤の茶屋、つゞいて、女人堂、昔は此處から上へは女は登れなかつた。やがて一登り登ると、右に深い谷がひらけて、方等般若の二瀑が鏡然として澤に落ちてゐる。大きいのが方等で、細いのが般若である。こゝの瀑見茶屋は、多い瀑見茶屋の中では、最もすぐれたもの、一つだ。紅葉も八汐も好い。

こゝから舊道を登る。中の茶屋まで八町、かなりに峻しい。新道を行くと、十五六町ある。

中の茶屋は、馬返から添つて通つて來た谷を、更に一日に集めて見たといふ形だ。四面を取巻いた山も凡でない。右の遠い絶望に阿巖瀧の細くかゝつてゐるのも、一奇とするに足りる。こゝから向ふの山の八汐を見たまは、何とも言はれない。
こゝからは、全く深澤に離れて、阪と、山と、林と、唯そればかり。この間に、不動阪

といふ峻しい七八町の登りがある。これを通り越すと、休茶屋がある。そこでは、何も見るものはないけれど。是非一度休まなければならぬ。それほど不動阪が峻しい。それから二つ阪を登ると、それでお仕舞で、太平のしんとした平地に着く。
此處に來ると、樹木が丸で變つて了ふ。樺、山毛樺、白樺、すつかり寒帯林で、北海道あたりの氣候になる。遠くで水の音がする。男體の丸い肩が、すぐ近く白樺の林の間に見える。

そこに、華嚴の瀑底に行く標札が立つてゐる。こゝから瀑底の五郎兵衛茶屋まで、絶崖に添つたやうな危険な路について十町ほどある。かなり峻しい。女子供にも行けないことはないが、ちよつと臆却だ。この中ほどに白雲の瀧といふのがあつて、その瀧下してゐる中段を鵠の橋で渡つて行くやうになつてゐる。其處を通る時には、瀧のしぶきで、衣袂、悉く濡ふといふ次第だ。

瀑底の瀧見茶屋は、其處から一二町だ。成ほど星野五郎平翁が一生の心願として路をきり開いただけあつて、その眺望の雄大なことは何とも言はれない。これから先へまた行かれることは行かれるが、それには、着物がすつかりぬれて了ふことを覺悟しなければ

ばならない。

しかし、この瀑底まで來なくても、華嚴の瀧は、上から見ても十分だ。太平の瀧見茶屋、それから二町ほど下つたところに、昔の華嚴の眺望所があるが、そこから下瞰した形もわるくない。周囲から落下する瀧や、岩燕の飛翔するさまや、綿のやうになつて瀧下する瀧や、そこでも、魂戦ぎ膽震ふといふ感じがした。

瀧の落口に大きな岩があつて、そこに十疊敷位の平地があるが、ある年、私は國木田君と一緒に、其處に行つて、瓢の酒を汲んで、最初の詩集『抒情詩』を一巻瀑神に獻じたことがあつた。そこから、例の藤村操以後の人達はいつも飛込むのであつた。今は、そこには行かれないやうに、柵が取廻してある。

それから少し行くと、明媚な中禪寺湖があらはれて來る。私は其處が好きだ。南岸橋あたりから見た景色は、何とも言はれないと思つてゐる。ペンキ塗のボート、外國人の夫婦連、湖上の競漕の決勝點を示した赤い白い青い三角旗、いかにも明るい。

中禪寺の旅館は、大正三年に焼けて、今では、欄干からぢかに湖水を眺望するといふ趣を恣にすることが出來なくなつた。それがいかにも残念だ。旅館では、私はいつ

も葦屋に行くが、その他、米屋、いづみ屋、皆好い。そこで朝、早く起きた感じは殊に好い。

中宮祠のある處に、昔は中禪寺があつた。しかし、今は、それは移されて、有名な勝道上人の時刻の立木観音は、對岸の歌ヶ濱まで行かなければ、拜することが出来なくなつた。中宮祠の裏には、八月に男體山に登る登拜路の門があつた。

旅館に相談すると、湖水をわたる船が到る處にあつた。歌ヶ濱までは殊にわけがない。で、旅客は其處に渡つて立木観音を見るのもよし、上野島に渡つて勝道上人の墓を見らるのもよし、合瀉、五大尊、千手と湖上禪頂をやるのも好い。そればかりではない。湯元に行く人にとつても、この湖上の船は便利であつた。湖の岸をつたつて行くと何うしても一里少し上ある菖蒲ヶ濱まで、船賃が三四十錢で、悠々湖水の風景を眺めながら行くことが出来る。湖上から見上げた男體山の秀姿は、また格別だ。

で、菖蒲ヶ濱に着く。そこを少し行くと、中禪寺湖に放つための鱒の飼養所がある。これは、旅客は通りすがりに是非見て行かなければいけない。淨化するために其處に備へつけられた機械は、頗る奇觀だ。

地獄茶屋、地獄谷、龍頭瀑はやがてその前にあらはれて来た。この瀧は、瀧といふよりは寧ろ瀨といふべきものであつた。このあたりは、紅葉の名所で、一に紅葉瀧と言つ



中 禪 寺 湖

てゐた。昔は上流は榛莽の中に現はれてゐて、深く入つて行くことが出来なかつたが、西澤金山の運送業者が此處に居を占めてから、境はや、淺露になり、牛の糞の多くなつたのは遺憾である。この瀧を雄れると、戰場ヶ原、男體、太郎、湯

岳、白根などがその四面を取巻いて、方二里にあまるひろい高原、昔は沼で、一名赤沼ヶ原、又、昔赤城と日光の神が戦争をしたといふので戰場ヶ原と呼ばれてゐるといふこととであるが、町から山、山から谷、谷から湖水、湖水からかうしたひろい高原といふ風

に見て来ると、流石は日光は山水郷だ。この位變化に富んでゐるところはないと誰も思はずにはゐられなくなる。

この原の横断は直径二里、その人口からは、白根の裾に湯瀧の白くか、つてゐるのが見わたされる。そしてその中ほどに、大きな落葉松が二本あつて、俗に三本松と言はれてゐるが、そこから西澤の金山に行く路が、遙かに右に原の中を縫つて通つてゐるのが見える。西澤の金山は十年前の隊行にか、つたもので、まださう大して年を経ゐないけれど、産額が多いので、深山窮谷、忽ちにして一村落を現出し、今ではそこに寺までも出来たといふことであつた。三本松から金山まで、山王峠を越えて三里ほどある。

湯元へ行く路は、原を越えて、古賀谷といふところを通つて、段々林の中へと入つて行く。路傍に、一口水といふ箇の泌みるやうな冷めたい水が湧き出してゐる。湯瀧は路からも見えるが、その瀑底に行くには、左に藪林の中を二三町入らなければならぬ。瀑は高さ四十五丈、岩石に添うて滴下してゐるが、多い日光の瀑布の中では、華嚴、霧降に次ぐべきものである。で、これを見て、瀑に添つて上つて、本道に出ると、やがてさびしい湯の湖があらはれて来る。

中禪寺湖に比べて、此處はまたいかにも山奥のさびしい湖水である。しんとしてゐる。一木動かす一波立たずといふ風である。水の色も思ひ切つて錆びてゐる。

この湖畔を四五町たどると、奥の奥に、蕭然とした湯元の温泉宿が雪國のならひの鹿の長いつくりをして連つてゐるのが見え出して来る。この温泉宿の人々は舊の四月八日時分に上つて、十一月一杯に引上げて来る例で、冬は湯も温く、人もゐず、獵師の留守番が一人か二人残つてゐるばかりである。そしてこの温泉宿を經營してゐるのは、大抵は日光の人達である。旅館では、板屋、釜屋、釜屋、渡邊、南間など、宿料はさう高くない。唯一晩泊るのには一圓乃至一圓五十錢取られるが、長くゐるつもりなら、もつと安くゐるので、秋、行くと、風呂ふきが旨い。

温泉の質もいろ／＼あるし、量も多い。湯の元は奥の方にあるが、それから、沸々と煮上つて温泉が湧き出してゐる。長い滞在客は、退屈すると、前に聳えた白根などに登つて見るといふことだ。白根の奥には、五色沼、魔湖などと言ふのがあつて、世にめづらしい植物なども多くある。また、白根の傍の金精峠をこえて、上州の小川から沼田

に出て行く路がある。案内者をつれて行けば、東小川まで一日で樂に行ける。

湯元の紅葉は、深澤あたりから比べると、餘ほど早い。十月の初めには、湖畔が逸早く美しく彩られる。神橋あたりの紅葉の盛な頃に行くと、もうそこいらは全く冬で、落葉疎々、朝夕は氷を結ぶといふ寒さである。兎に角深山だ。

先づこれで日光は一通りは見たが、もう一つ東にかけ離れて、旅客の是非行つて見なければならぬところがある。それは霧降瀧である。

こゝに行くには、中禪寺の方へ行くのとは正反對に、神橋を渡つて、すぐ右に折れて、稻荷川を渡つて、萩垣面から赤澤の方へ出て行くのである。この途中、萩垣面の近所に興雲律院がある。また梅屋敷といふ瀟洒な茶亭がある。外山へは、律院の手前から左に入つて、草藪の中を十二三町で麓に達し、それからまた十町ほどで、その頂に達する。頂には堂がある。そこから見た眺望は、すこぶる雄大だ。

霧降の方へ行く路は、梅屋敷から赤澤の谷に出て、小倉山へとか、つて行く。京の嵯峨あたりに似てゐると言はれてゐるだけに、あたりが何處となく、のんびりしてゐて、日光の荒山の中には、ちよつとめづらしい親しきとなつかしさを覺えさせる。で、それ

から、山を一つ上つては下り、下つては上りして、段々奥深く進んで行く。茶屋が到る處にある。それに、路の兩側にはめづらしい草花が多い。十五六町行くと、やがて、右の方の山が盡きて、前には霧降の瀑のか、つてゐる大きな谷があらはれて来る。

こゝの瀑見茶屋は、眺望の好いのできこえてゐる。此處からは瀑ばかりではなく、鬼怒川一面の風景が手に取るやうに見える。それに、瀧の姿がしとやかで、二段になつて落ちてゐる形がいかに好い。華嚴の男性的なのに比して、飽までこれは女性的だ。それに、瀧の落ちる谷が深く凹んでゐるので、紅葉は最後まで残つてゐるのが例だ。茶屋で酒でも飲んで半日遊んで来るのも興味がある。

瀑底までは、五町ほどある。茶屋で下駄を草履にはきかへて下りる。華嚴の瀑底に行くよりは餘ほど樂だ。それに、瀑そのものが遊ぶのに適してゐる。清淺掬ふに堪へたる趣がある。

この奥に、眞黒瀧があるが、そこは、人は滅多には行つて見ない。日光の奥の栗山郷の方に出て行く路は、其處を眞直に北に志して行くのである。小休戸といふ處が途中にあつて、そこには旅宿屋などがある。上栗山まで日光から七八里あ

るといふ。鹽原へ行くには、宇都宮まで引返す。そして、東北線の汽車で北に向ふ。上野から西那須野驛まで、そこで下りて、今度は鹽原軌道で、關谷を経て鹽原へ行く。この間が三等賃金五十五錢である。

しかし關谷と鹽原との間は、箆川の勝がかなりに好いから、汽車で行くのは惜しいやうな氣がする。その間には、寫眞でよく見る見返り橋、見返り瀧などといふ勝景があるのである。

鹽原の入口の温泉場は、大網温泉、宿屋は佐藤、これから十八町、洞門を通つたり、寒凌橋をわたつたりして、やがて福渡戸に着く。

こゝでは、満壽屋、松屋、玉屋、丸屋、叶屋などが好い。温泉は箆川の河畔に湧き出して、不動の湯、冷の湯、薬研の湯などがある。鹽原泉で婦人に好い。

福渡戸かも二町ほどで、右に天狗岩を見る。左には、蒲生氏郷の乗つたことがあるといふ野立石がある。それから先は萬治高尾の碑がある。

やがて畑下戸の温泉に来る。そこで、旅館は、佐野屋、紙屋、大和屋、伊勢屋、井桁屋などが好い。宿料も大抵似たり寄つたりで、一圓乃至一圓五十錢である。これから人家つゞき、町つゞきになつて、門前がある。そこには温泉宿が一杯に並んでゐる。宮田屋、た、み屋、松本屋などがある。

こゝから橋を渡ると、向ふは古町だ。鹽原では先づ一番此處が静かだ。旅館には、上の會津屋、中の會津屋、米屋、萬屋などといふのが大きな浴樓をあたりにつらねてゐる。

會津道の方へ行くと、源三位頼政の



鹽原

かくれたといふ源三の穴、そこに八幡の社があつて、鹽原七不思議の一つの逆杉といふのがある。周圍西丈餘、中々古木だ。で、そこから戻つて、鹽湧橋を渡ると、今度は鹽の湯である。旅館には噴賀屋、玉屋、柏屋などがある。前には石黒山が聳えて、下には鹿股川が流れてゐる。川に沿つて登ると、いろ／＼な瀑がある。長逗留の人々は、よくそこまで見物に出かける。

須卷温泉は、門前から細い路を山に七八町登つたところにある。そこには湯瀧のあるので名高い。

古町から、もつと奥に入つて行くと、二里で新湯がある。旅館も澤山ある。これから西北へ三十町、古湯本は、鹽原での古い温泉で、源頼朝が那須に來た時、梶原景時が入浴したと言傳へられてある。今でも梶原の湯といふ名が残つてゐる。この邊にも、瀧がかなり多い。又、此處から高原山に登ることも出来れば、山越しに、鬼怒川縁の川治温泉に行くことも出来る。

この他、散歩の次手に見るべきところはかなり多い。箒川の向ふに、伊豆冠者有綱を祀つた祠がある。又、普門瀧、妙雲寺などもある。



日光と鹽原と那須

那 須 温 泉

兎に角、鹽原は、春に夏に秋に遊びに行くに好いところだ。もとは西那須野から五六里も山の中に入らなければならなかつたのが臆却だつたが、今は軌道が出来て、行くのにわけがない。新緑の頃、紅葉の頃、中でもその時分に行くのが一番好い。

那須は七湯とも言ひ、九湯とも言ふ。非常に温泉の豊富なところである。それと言ふのも、那須火山群がその附近に連亘してゐるからで、温泉といふ意味から言ふと、鹽原などよりもぐつと特色に富んでゐる。それに、交通がや、不便なので、人氣もまたさうわるくなつてゐない。宿料なども安い。一日八十錢位で樂に過ごされる。

那須では、東京の人の行くところは、先づ湯本

だ。そこに行くには、東北線の黒磯驛で下りて、それから五里ほどガタ馬車か自動車に乗つて行かなければならない。しかし、地形が高爽な上に、右に那須野を見渡してゐるので、感じが好い。宿屋は松川屋あたりが好い。小松屋も大きい。唯、此處の温泉は、すべて酸性泉で、質が烈しいから、鹽原や箱根や伊香保のやうに、遊山に行く婦人には、あまり向かない。胎毒、瘡毒、リウマチス、脚氣などに好いと言ふのも、その温泉のさまは分らう。そこには、例の玉藻前の化して成つた殺生石といふのがある。石の大き五六尺、柵が廻してある。昔は、鳥だの獸などが其處に来て死んださうだが、今はそんなことはない、そこにある温泉神社は、那須宗高の扇の的に向つて祈念した神様で、豊田別命を祀つてゐる。宗高が奉納した鏑矢が一筋あるのなどはめづらしい。

湯元に本陣をきめて置いて、退屈したら、彼方此方の湯をぐるぐると廻つて見るのも興味が饒い。高雄股温泉へ湯元から十六町、辨天温泉は北へ三十町、そこに辨天の窟がある。この温泉から東へ十八町の北温泉は、四面山に取巻かれて、朝の九時から午後の三時までしか日が當らないといふ谷の底である。溪流などもちよつと好い。これから大丸までは路がや、峻しい。その間が丁度十八九町ある。それから、新道を山に登ること一

里三十町、茶臼山の噴火を仰ぎながら、三斗小屋温泉に行く。旅館には、大黒屋、三春屋、生島屋などがある。こゝは、會津の方に行く裏路に當つてゐて、維新の時にも、官軍の一隊は此處から會津へと入つて行つた。

一番最後の温泉は、板室だ。そこは三斗小屋から四里ほどあつて、茶臼岳の後になつてゐる。此處までは旅客は滅多にはやつて來ない。それに、那須岳に上つて、噴火口を見るのも亦興味がある。しかし、それには、かなりの骨折を覺悟しなければならぬ。都の人にはちよつと難かしい。

しかし、那須には、日光、鹽原以上に、まだかくれた美があり、奇勝がある。温泉なども餘りわるく俗化してゐない。それに、紅葉は非常に盛で、鹽原あたりの紅葉から見ると、色彩もぐつとすぐれてゐるといふことであつた。十日ほど滞在して、靜かに秋を味ふのに適してゐる。

二十四 秩父の諸勝

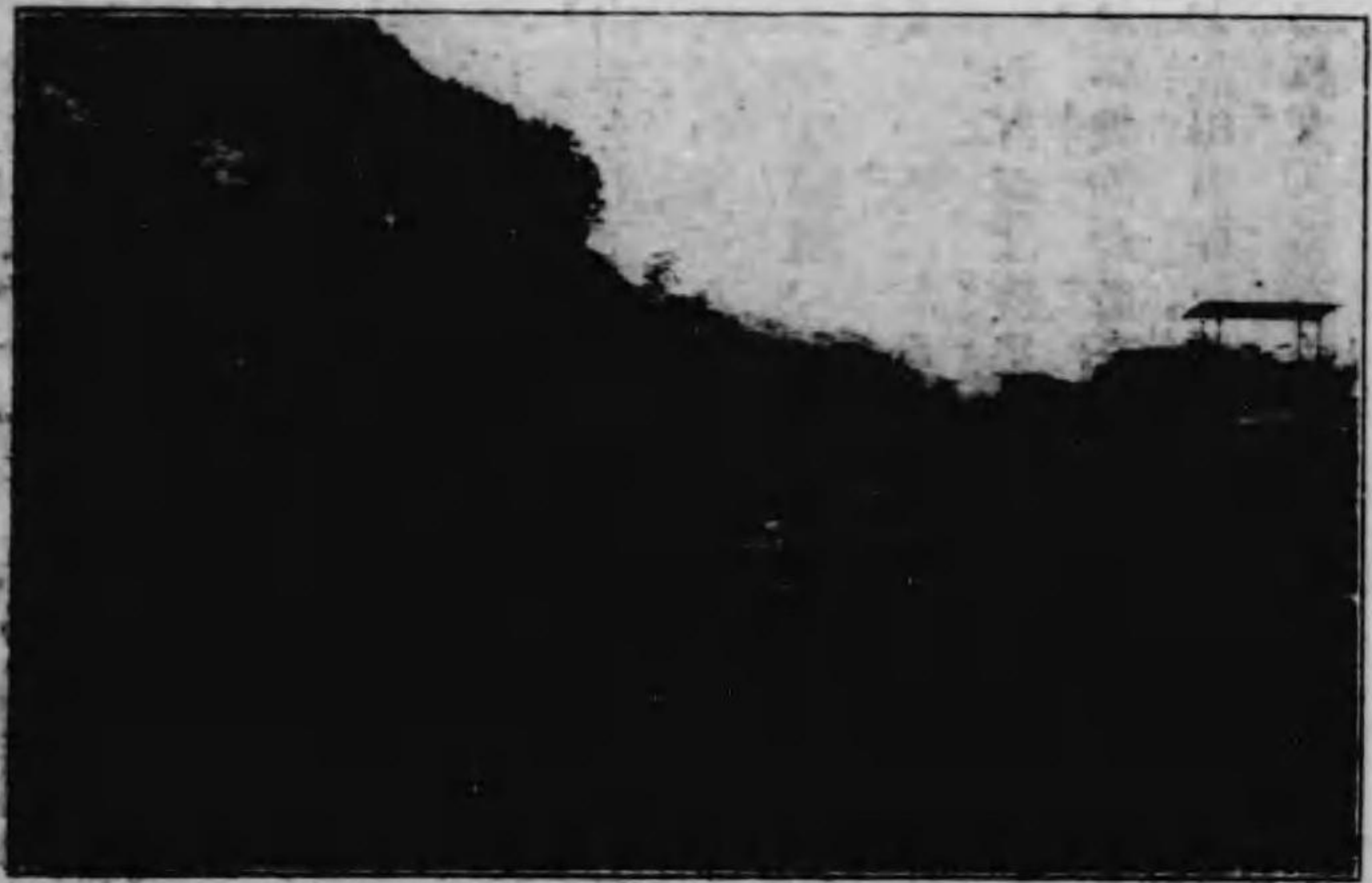
- ▲熊谷 秩父間、二七、哩四、三等六十六錢。
- ▲熊谷 寶登山間一九哩七、三等四十八錢。
- ▲三峯山 へは大宮から乗合馬車。

秩父

秩父は東京近くで最も山の深いところだ。その辯、今まで交通の便がわるかつたので、人は餘りに行かなかつた。しかし、今では汽車が大宮まで出来たから、其處に行くのはわけはない。

秩父では、長瀬の勝が此の頃大分人口に膾炙されて来た。そこに行くには、信越線の

寄居町
鉢形城址



秩父の諸勝

秩父赤壁

熊谷驛で上武線に乗替へる。先づ熊谷を出る。武川驛あたりでは、荒川の鮎が取れる。段々關東平野から、秩父の山の中に入つて行くやうな地形で、兩神山などが高く前に仰がれて氣持が好い。寄居町もちよつと變つてゐて面白い。川の向ふには、歴史で有名な鉢形城址がある。一汽車おくらせて、それを探つて見るのも好い。波久禮驛あたりから、荒川の谷が段々見え出して来る。

秩父の岩石は古生層なので、色はいやに薄暗く、錆びてゐて、日光あたりのやうな明るい溪流の感じは見ることが出来ない。しかし岩は奇姿に富んでゐる。溪流も處々急瀬を成してゐる。

寶登山驛を下ると、もう此處等は山の中だ。驛から寶登山神社のある處まで四五町、これは盜難除の流行神で、賽者が多く、講中などもある。長瀬は、それとは反對に、驛から左に川に向つて下りると、其處に長瀬館といふ瀟洒な旅館があつて、その前が一面の岩石の絶壁になつてゐて、瀧などが落ちてゐる。水は瀧潭を成して流れてゐる。即ち秩父赤壁である。

丁度、紀州の瀬八町を小さくしたやうな、また浅くしたやうなところで、東京近くの山水としてはちよつとめづらしい。長瀬館の座敷で、これを望むと、ことに奇だ、水には船を浮べることが出来た。

春は躑躅、山吹などが岸に咲いて綺麗である。川では、鮎、クキなどが捕れる。夏は人で一杯になるといふことである。

大宮町は秩父の都會だけあつて、賑やかな好いところだ。それに、この附近では、秩父の織物が出来るので、きまつて市などが立つた。三峯山に行くには、こゝから五里ほど荒川の谷を溯つて、強石といふところで、川を渡つて、それから一里位で、三峯の宮のあるところに着く。強石までは、馬車があつてさう不便でない。

三峯山は秩父の名所だけあつて、幽邃で、夏などは好い。旅館もあるが、大抵は神社で泊めて呉れる。宿料も確か思召で好い筈だ。昔は狼がぞろ／＼賽者の傍に歩いて来たと言ふけれど、今はそれは見ることは出来ない。この近所の白久といふ處には、鱧泉がある。

これから大瀧へ出て、甲州の方へ行く路は所謂雁阪峠で、一日で行けるには行けるが、その間七八里一軒も人家のないやうな處で、至極さびしい。それから中津川の谷深く入ると、東京近所にも、こんなところがあるかと思はれるやうな深山だ。こゝから上州の甘樂の谷に出る路がある。

大宮から正丸峠を経て、名栗（入間川）の谷に出て、子の權現から、武蔵野の飯能に出て来る路もちよつと面白い、それから、大宮の奥に、有名な鐘乳洞がある。詳しく探れば、見るところはいくらでもある。

二十五 上州の諸勝

- ▲上野 高崎間六三哩三等一圓、前橋までは一圓八錢。
- ▲高崎 前橋兩地點より、澁川まで電車、澁川より伊香保まで同じく電車。
- ▲高崎 下仁田間九哩一七、三等四十九錢。
- ▲鬼石 三波溪へは兒玉軌道。
- ▲伊勢崎 から東武線分岐、伊勢崎淺草間百七〇哩、三等一圓十八錢。
- ▲相老 太田間一〇哩五、三等二十一錢。
- ▲前橋 小山間(兩毛線)五十哩九、三等八十四錢。

上州の諸勝
百穴
鬼石の三波石

信越線で来ると、吹上驛の南二里、松山町附近に、古代の人種の棲息した有名な吉見の百穴がある。熊谷は、蓮生坊直實の故郷且終焉地で、そこには蓮生寺がある、岡部驛は、岡部六彌太の故郷で、平忠度を記つた神社があるのが面白い。兒玉軌道で、鬼石の溪流を見るのも興味が多い。例の三波石のあるところで、地質上では大變に面白いところだといふ。八鹽の鑛泉などが附近にあつた。

伊香保へ

しかし、上州では、妙義、榛名である。妙義には磯部鑛泉、榛名には伊香保温泉がある。共に都人士の一二泊の清遊を試むのに好いところだ。伊香保に行くのはわけはない。上野でそこまでの通し切符を賣るから、それを買ふと、足土を踏まずに、伊香保の温泉に行くことが出来た。

それには、高崎から行つても、前橋から行つても好い。兩方とも、停車場前から伊香保に行く電車が出る。何方かと言へば、山を見るには、前橋の方から行く方が好い。この電車は兩方とも澁川町で一緒になつて、そして、伊香保電車に連絡してゐる。

伊香保電車は屈曲した山路を折曲つて、御蔭の松の碑のある處を通つて、段々山の中に入つて行く。春は蕨、秋は初茸などがその附近に多い。やがて伊香保に着く。温泉場

伊香保温泉



伊香保全景

は山腹の傾斜地に位置してゐて、浴槽が層を成して重つてゐる。千明、木暮武太夫、同金太夫、塚越など皆同じ位の好い旅館だ。宿料は高くも安くも出来る。自炊の方法などもある。夏は蚊がゐるないほど涼しい。避暑には持つて来いといふ所だ。

伊香保神社の眺望、物間山の眺望共に好い。湯元に行く路の谷に添つてゐる形も好ければ、大瀧あたりの涼味も忘れられない。しかし山と雲との勝はあるが、溪流はあまりすぐれてゐない。それから温泉とは別の方に、船尾瀑、水澤観音などがある。

棟名に登るのには、本當は、高崎から五里で、室田に行つて、其處から上るのが本路に

なつてゐるけれども、今では大抵、伊香保から行く方が多い。其處に行くには、湯元路から真直に上る。初めは高原で、一里ほど行つて、や、峻しい處があるが、これも十二三町で、あとは又ひる／＼とした高原だ。途中で、二ツ岳の蒸湯などを探つて見るのも好い。相馬ヶ岳はその高原のすぐ左に高く聳えてゐる。やがて湖畔に達する。烏帽子、鬘、伊香保富士などの外輪山を持つた湖水の風景は、あまりに規模が大きくはないけれども、一寸人目を惹くに足りる。湖畔亭あたりで、湖水の魚を肴に一杯酌むのも妙だ。

棟名神社は、そこから少し下りたところにある。例の奇岩は、妙義に比べると、殆ど言ふに足りない。社殿もさう大きくない。昔神佛混合の時代には、中々榮えたところであるさうだが、今は賽客も少く、土地も荒れてゐる。

で、伊香保に引返す。伊香保でゆつくりして歸つて来るのも好いが、猶吾妻の諸温泉を奥深く入つて探つて見るのもわるくない。それには、澁川まで下りて、ガタ馬車か自働車の便を借りるか、でなければ、山越しに五町田に出て吾妻川を渡つて、中條町へと出る。この間が五六里、歩いて、さう大儀ではない。

中條町からは、何處へでも車が出る。澤渡温泉へ三里、四萬温泉へ五里、川原湯へ四里である。この中で、四萬が温泉としては一番効目があり且つ設備も行き届いてゐる。積善館など、いふ大きな旅館がある。しかし、風景としては、それよりも吾妻川に添つた川原湯が好い。ある人は、そこは耶馬溪などよりも好いと言つた。

それは、草津に行くには、澤渡から暮阪峠を越すよりも、川原湯から、長野原に出て行く方が、少し遠いが、路がわるくない。だから旅客は川原湯で一夜泊つて、翌日車で草津に行くやうにするのが便利だ。

草津は日本でも有名な温泉場だ。温泉の湧出量の豊富なのは、西では別府、東では此處だ。但し此處は硫黄泉で、泉質が烈しいから、病氣には好いが、遊山にはちとあくどすぎる。今では、遊川から行くのよりも、信州の沓掛から山越しに、淺間の裏の六里ヶ原を通つて行く人達が多い。それに、此方面には、早晚、軌道が起される筈だから、やがては、此方が草津の正面の交通路となるであらう。沓掛から里程約十里である。

草津は高原に位置してゐて、高爽な氣に富んでゐる。夏は蚊帳を用ゐない。旅館では、日新館、一井、望雲館、大東館などといふのが大きい。いづれも二階三階の高樓である。

しかしその割に、宿料は廉い。一日五十錢乃至八十錢でゐられる。こゝから、三里ほど奥に白根の活火山がある。長瀧在の客は、退屈してよく其處に出かけて行くといふことである。それは丁度信州の遊温泉に越えて行く八里の峠の右の方に當つてゐて、山はさう高くはないから、登るにもさう骨は折れない。噴火口は頗る壯觀だ。また、北して信州の別天地秋山郷に入つて行く路もある。

私は信州の遊を朝立つて、白根を見て、その日の午後五時頃に、草津に着いた。この峠道も一度は通つて見る方が好い。

で、再び前橋に戻つて、市中を一見して、赤城山へと登山する。この路はや、不便だ。前橋から山腹の小暮まで六里二十五町、それから絶頂まで四里、その中を二里登ると、右に硯石山、左に鍋割山、更に一里で小沼、又、二十町で大沼に達する。矢張火口原湖だが、榛名湖よりはや、幽遠だ。その近所には、鑛泉があつて、一泊するのに好い。湖の南岸には、赤城神社がある。榛名、妙義、赤城、この三山の中では、赤城が一番都人に知られてゐないが、風景としては、此處が一番幽遠で世間離れがしてゐる。山腹に、瀧澤不動がある。これから大間々の方へ下りて、桐生足利に出て歸つて來るのも面白い。

妙義に登るには、信越線の磯部驛か、その次の松井田驛からするのが順路だ。近いのは、松井田の方が近いが、便利は寧ろ磯部の方であらう。

磯部には、胃病によくきく鑛泉がある。停車場から一二町、鳳來館、對岳樓など、いふ旅館がある。此處は昔は非常に別荘の多く出来たところで、豪商紳士が競つて此處に集つて来たことがあつた。しかし、今はすっかり衰へて了つた。今日では、純平たる田舎の鑛泉場たるにすぎない。

鑛泉はしかし非常に好い。胃腸には修善寺などよりも或は効能があるかと思はれる位である。名物の磯部煎餅は、その鑛泉を用ゐてつくつたものである。その他炭酸水がそこから出た。

景色としては、平凡な碓氷川位のもので、他に見るものはない。古蹟には佐々木盛綱の築いた城址と、その墓と、赤穂の藩士大野九郎兵衛の墓とが、東南十町のところにあるばかりである。しかし、碓氷川では、鮎が取れる。

妙義はこゝから行くにしても、松井田から行くとしてもわけはない。車は片道四五十錢と思へば間違はない。妙義も昔はよく人が遊びに行つたところだが、文人墨客の間に

持て囃されたものだが、此項は流行外れになつて、旅客は餘り妙義を口にしないやうになつた。で、妙義町から妙義神社にお詣りして、有名な石門を見やうと思ふには、そこから左に折れて、一里ほど山の中に入つて行かなければならない。この間は、白雲、金洞、金鶏三山の奇岩を見るので、景色が好い。やがて、金鶏と金洞と相接したところに着く。蠟燭岩の大きいのが屹然として其前に立つてゐる。菅公硯水の石など、いふ處から、第一石門、第二石門、第三、第四と段々に登つて行く。その頂上が平らになつてゐて、關東平野を望むのに適してゐる。

それと谷を一つ別にして、妙義神社の奥社がある。鬚剃岩、觀音岩、夫婦岩などの奇岩が續々としてあらはれて来る。

それに、此處は紅葉の勝地として知られてゐる。秋はちよつと好い。高崎に戻る。そこで見物すべきは、公園の賴政神社、烏川の梅、乗附山の藤などであらう。そこから上野鐵道に乗ると、吉井驛から二十町の池村に、上毛三古碑の一つなる多胡の碑がある。天平時代の古碑で、好事者は必ず一訪しなければならぬところだ。その他、高崎附近に山の土の碑金井澤の碑がある。一の宮には貫前神社がある。この谷

は深く入り込んで、奥に下仁田町がある。石灰や、生絲や蕨などが出来る。

この他、東京の浅草驛を起點としてゐる東武鐵道の沿線にも、二三見るに足るものがある。武州では、越ヶ谷の桃、粕壁の藤、利根川を渡つて、上州に入つて、館林の鰯、いづれも、東京から日歸りの出来る散歩區域である。足利は下野だが、其處には、鑑阿寺、足利學校、足利公園がある。太田には大光院の吞龍と、金山と、新田義貞の遺髪塔とがある。桐生に近く、藪塚、長岡の二鑛泉と、高井戸の溪流とがある。しかし、大して見物すべきほどのものではない。

五〇四

二十六 善光寺詣

- ▲輕井澤 小淵間(草津輕便)六哩、三、三等十九錢。
- ▲小諸 から岩村田を経て羽黒下に至る佐久線は十三哩一、三等二十九錢。
- ▲篠井 から中央線で松本、鹽尻、木曾、名古屋の方へ出て行かれる。

信越線 輕井澤 鎌野

信越線で、碓氷のトンネルを越すと、もう其處は信州である。淺間の噴火は、確かに旅客の眼を刮せしめるに足りる。輕井澤は、外國人の好きな避暑地、水清く土地高燥で、夏は矢張蚊帳を用ゐない。其處では、夏中、間を借して呉れるところが到る處にあつて、女學生や學生が毎年澤山に出かける。停車場から舊輕井澤まで十町、停車場前には、油屋、舊輕井澤には、萬松軒など、いふ旅館がある。此處は冬は非常に寒いところで、信濃でも寒暖計が一番低く下がるといふ話だ。舊輕井澤から昔、關所のあつた峠町まで、十八町、そこには熊野神社が祀つてある。眺望の好いのは、例の吾妻はやの日本武尊の古址であるのでも想像が出来る。近年、軌道が出来て、澤山の裏にある小さな温泉場に

善光寺詣

五〇五

行くことが出来ると聞いた。

淺間には、香掛から上る。登路三里かなりに険しい。案内者を雇はずには、ちと冒險すぎる位だ。しかし、噴火口の壯観は、關東では第一だ。阿蘇に比べては、落ちるけれども、霧島などよりはすぐれてゐる。しかし、この山は兎角、鳴動したり石を降らしたりするから、麓でよく聞き糺して見てから上らなければいけない。まあ、普通の旅客には、ちと探險すぎる嫌ひがある。



布引山と關遯留山との二勝があるが、これはわざ／＼行つて見るほどのこともない。上田は賑やかな町だ。眞田父子が此處を扼して、徳川の軍を喰ひ止めた古城址が今で

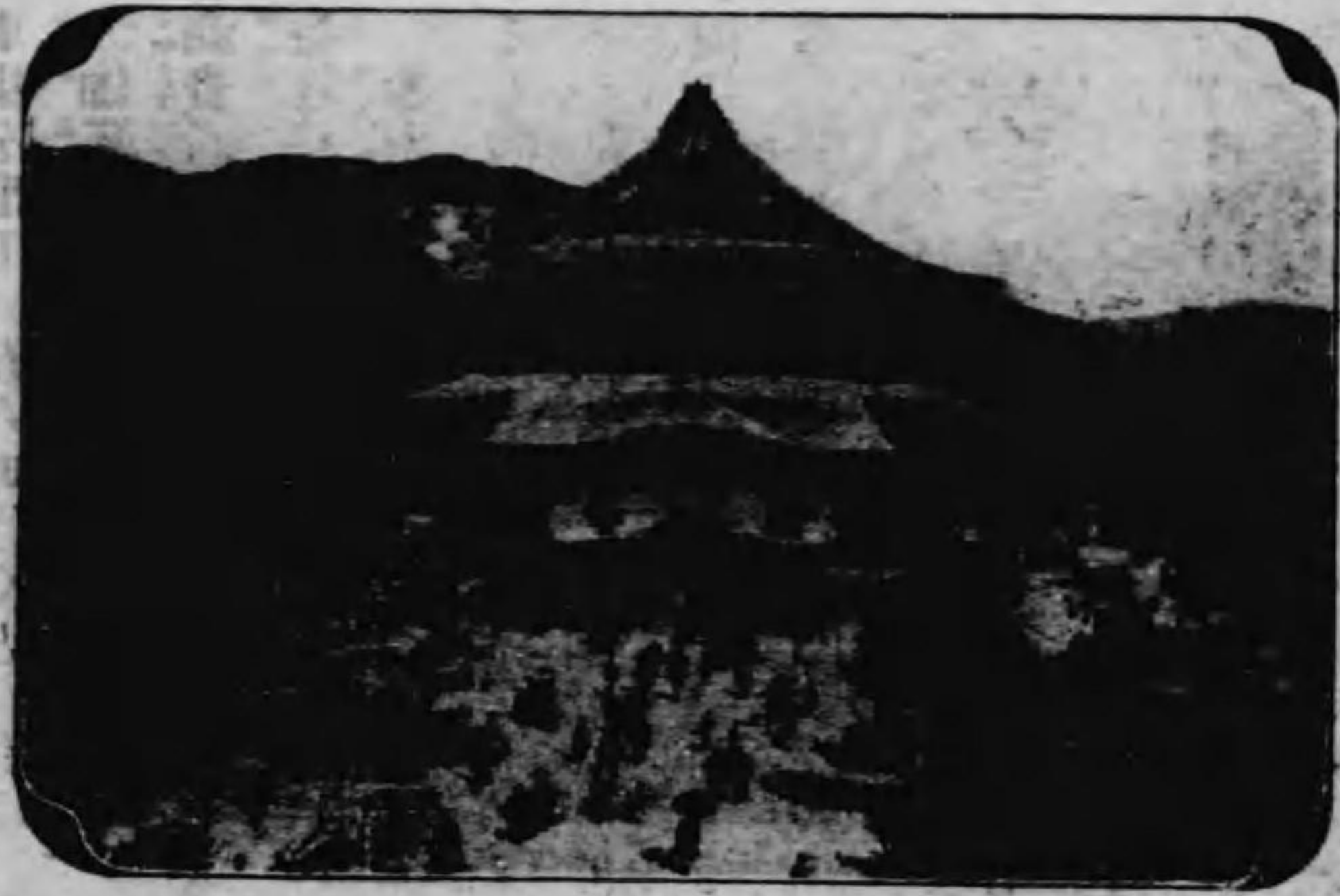
山 間 淺

岩村田、小諸あたりでは、



む薯を揚戦古島中川りよ山捨姥

残つてゐるから、一汽車おくらせて、下りて、それを見るのも好からう。ゆつくりした旅ならば、それから南に四里、別所温泉に行つて一泊するのにも興味が多い。そこは信州では古い温泉で、ヤ、俗だが、古蹟は二三ある。坂城が屋代で下りて、更科に行つて、名月を見るのも好い。このあたりは、例の川中島の兩雄相争つたところだ。右の山寄りに昔海津の城と呼ばれた松代の一邑があり、謙信の據つた西條山があり、千曲犀川の合流點がありなどして昔のことの何となく偲ばれるやうなところである。犀川が右から流れて千曲川に落ちる形も面白かつた。篠の井驛からは、中央線の汽車が左にわかれて行つてゐる。明科などを通つて、松本平へ出



善光寺本堂

て、そして鹽尻から諏訪の方へと行つてゐる線路である。こゝから、ぐるりと廻れば名古屋の方へも、東京の方へも出て行かれる。

やがて長野に着く。

善光寺の大きな伽羅が高く町の瓦葺の中に聳えてゐるのが見える。昔は、善光寺詣と言ふと、老人達はかなり臆劫にしたものだが、交通の便利で、今はわけはない。越後へでも行く旅行の途中でも、一汽車おくらせれば、お詣りして行ける位、それ位簡單になつて了つた。

長野の町は、一筋町で、他の奇がない。縣廳のある町としてよりも、矢張り、善光寺で榮えた昔の檀堂町といふやうな感じがする。停

車場を出て、五六町行くと、右に、刈萱法師の堂があつて、それから眞直に、善光寺の大伽羅へと瓜先土りの上つて行つてゐる。善光寺の前の通りは、淺草の仲店見たいで、商賣が軒を並べて、種々なものを賣つてゐる。善光寺の本尊は、例の物部守屋が難波の堀江に投込んだのを本田義光が拾ひ上げて來たといふ圓浮檀金の彌陀如來で、日本では一番先に支那から輸入された佛像だと言はれてゐる。丈が一尺五寸だが、頗る由緒のあるものである。本堂は南北六十二間、東西四十二間の大伽羅で、香烟が堂に漲るといふさまである。頼むと、例の内部の戒壇めぐりといふことをさせて呉れる。それから、此處には有名な若い尼がゐる、何でも立派な華族から來てゐるといふ話だ。參詣がすんだら、公會堂城山館は、確か十錢出すと誰にでも見せるから、行つて見る方が好い。そこからは、川中島四郡の地が一目に見えて、中々好い。

長野の名物は、菓物、アジズの罐詰、氷嚢麥など。

こゝから戸隠山に行く路は、かなりに遠い。たしか五里、もつと遠かつたかも知れない。普通の旅客は大抵行くものはないが、次手だから書いて見ると、長野から一里半位で、飯綱原、それから一の華表までまた一里以上ある。中社、寶社、それから奥社、



湯田中

かうなつてゐるが、阪路はさう大してない。奥社の
あるあたりは、古杉樹は多く、晝も猶ほ暗しといふ
さまである。平維茂の鬼女を退治した話などはい
かにも其處にふさはしいと思はれた。

奥社から裏山に登ると、奇勝が非常に多いさうだ
が、これは容易に登ることが出来ない。屋根の峯を
わたつて歩かなければならないやうな處が澤山にあ
るといふ話である。

善光寺詣をした次手に見て来やうといふやうなと
ころは、この他、中野町の奥にある湯田中、澁の温
泉にでも行つて泊るか、山田温泉に行つて見るか、
飯山の町にでも行つて見るか位のものである。別に
大した見物するやうなところはない。
湯田中、澁などの温泉に行くには、長野の一つ先

の豊野驛で下りて、そこから、ガタ馬車か自動車の便を借りるのである。この間は五里、
便が好く、自動車があると、路は平坦だから、簡単に樂に行ける。湯田中は中野町から
一里、一つ小さな峠を越せばすぐである。山中の温泉場と言ふよりは、わるく開けた田
舎の湯治場で、遊廊などもあつて、脂粉の氣で満々してゐる。これに比べると、その奥
の澁温泉は、好いが、温泉が一種の滋味を含んでゐて、あまり感心しない。附近の山
の中には、湯の湧き出す地獄だの、池だの、琵琶瀧などといふ大きな瀑がある。これは
ヤ、見るに足りるが、あたりの山が凡なのが惜しい。こゝから山越しに、草津まで十里
内外である。

山田温泉はかなり山が深い。交通もかなり便ではない。しかし、山間僻地だけに、
一種變つた野趣には富んでゐる。

飯山町は世間から隔離されてゐる形が面白い。それに、越後に近いので、何處か雪國
らしい氣分がある。道の底なども長く冬はその下を通つて行かれるやうになつてゐ
る。この先に、野澤温泉といふ静かな温泉場がある。飯山から千曲川に添つて、越後の
小千谷へ出て行く路は、面白いさうだが、私はまだ行つて見たことがない。



山姫黒るた見りゝ湖蓉芙

しかし、折角長野まで来たのだから、もう少し、何處か行くところがないかと言へば、柏原から野尻湖、それから越後に入つて、妙高山の山腹の赤倉温泉にでも行つて御覽なさいと勧めるより他仕方がない。

この赤倉温泉は、眺望では日本にはたんとない位立派な眺望を持つた温泉場だ。しかし山の上にあるのだから、十一月以後來年の四月までは、全く駄目だ。經營者は皆な下に行りて行つて了ふ。行くなら、新緑の候か、盛夏か、紅葉の頃かである。

柏原驛で下りて、俳人一茶の跡を偲ぶのも一興である。一茶は此處に生れて、江戸に行つたり、諸國を遍歴したりして、最後に此處

に歸つて死んだ。その艱難の多い歴史は、かれの日記を繕くもの、皆な知るところである。今でもその家の跡に、かれの住つた蔵が残つてゐる。墓もある。

こゝから越後境の野尻湖には、一里に少し遠い位なものだ。渺たる山中の湖水だけれども、高原の上にあるので、あたりがひらけてゐて感じが好い。雲の徂徠するさまなども面白い。島には、辨財天が祀つてあつて、上杉の家臣宇佐美某の悲劇は會つて、で行はれた。野尻蕎麥と言つて、昔街道のあつた時分には、旅客に珍重せられた蕎麥は、今でもあるが、さう大して旨くはない。

この附近は、冬は雪の非常に多く積もるところで、一月二月の頃には、汽車がよく風雪の中に立往生をした。柏原、田口あたりが中でも一番深い。

赤倉温泉に行くには、柏原のつぎの田口停車場で下りて、そこから二里ほど妙高山の裾を登つて行く。近頃、妙高温泉といふ赤倉の分湯が停車場のすぐ近くに出来たが、これは大してすぐれてゐない。で、赤倉までの二里の間は、半は村落、半は高原で、氣象が頗る雄大であつた。草花なども夏は非常に多い。

そこでは香岳樓が一番すぐれた眺望を持つてゐた。紅葉山人なども來て泊つたこと

あるところで、その室からは、越後の海を隔て、佐渡の青螺が望まれた。米山一帯の翠微は特に手に取るやうに見えた。

妙高、飯綱、戸隠の三山の聳えてゐる形も頗る雄偉であつた。夏は多く蚊帳を用ゐず、秋の草花は夏の中から咲くといふところで、避暑には極めて好い。宿料もさう大して高くはなく、食物も生魚など直江津から来るので旨い。

二十七 越後の旅路

- ▲上野 新潟間二六六哩六、三等賃金三圓一錢。
- ▲新來迎寺 小千谷間八哩一、三等二十五錢。
- ▲長岡 寺泊間一八哩八、三等四十七錢。

- ▲柏崎 白山(新潟)間五〇哩一、三等一圓。
- ▲新潟 村上間四七哩五、三等七十九錢。
- ▲新潟 若松間(岩越線)八〇哩、一三等一圓二十二錢。

信越線で直江津まで、上野から哩數一八〇八鎮、三等賃金二圓廿九錢である。夜行の新潟行で行くと、午後の九時に上野を發して、長野で朝の四時、七時十分には、もう直江津に着いて、北國の荒海を眼の前に見ることが出来る。

しかし、一汽車遅らせて、高田で下車して見るのも好い。高田は、名高い雪の町で、昔は、冬はすっかり雪の中に埋れて、この下に高田町ありと表札を立てられたほどのところだが、今では、土地が開け、住民が多く、それに兵營が出来て、雪除けなどが完全に出来たので、もう昔のやうなことはないさうだが、それでも、庇のつくりから、家の構などすべて雪國風である。旅館は郷三館、柳糸、高陽館などといふのがある。

こ、から西一里に、上杉謙信の春日山城址がある。此處は旅客は是非行つて見なければならぬ。この山は南葉山脈の中の一小山で、汽車の中から見ると、左に當つて、松が二三本ちよろちよろと生えてゐるのがそれであつた。城の址は、今は唯一堆の丘陵になつてゐるばかりであるが、



古松の中に山櫻などが交つて咲いてゐて、いかにも英雄を偲ぶにふさはしいやうな處である。春日神社がある。又その近くに、謙信時代にもあつた林泉寺があつて、其處に謙信の自畫像や、筆蹟やいろいろなものが残してある。兆

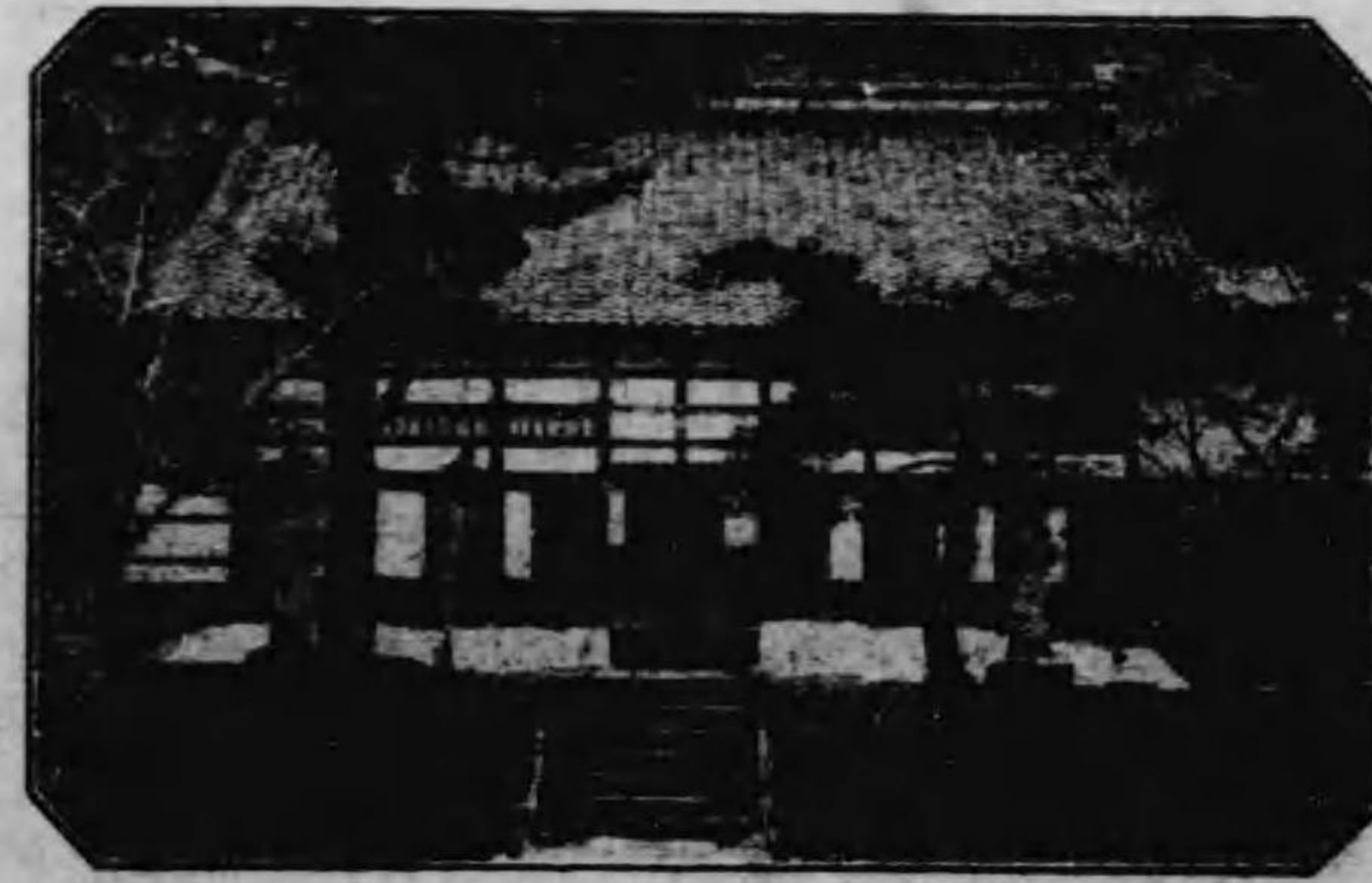
殿司の畫などもある。

直江津に來ると、いかにも北國の船着らしい感じがする。汽船の出入、貨物の運搬も



春日山城址

頻繁だ。直江津の港は、ひろく開いてゐるの
で、冬は全く駄目だが、春、夏、秋は富山伏
木の方へ通ふ汽船が沖遠くか、つて、岸から
艇に乗込んで行くやうになつてゐた。北陸線
の出來ない中は、この航路は、越後と越中、
能登の方へ行く唯一の郵便航路となつてゐた
のであつた。また此處から一日おき位に、佐
渡の小木に向けて出帆する汽船があつた。
直江津附近には、別に見るものがない。五
智如來と、郷津の海水浴と先づその位のもの
である。荒川の河口には、和船が一杯に集つ
て、汽車との連絡をつけてゐるが、その光景
にはちよつと特色があつた。またその附近に
大きな製油會社の工場などもあつた。



春 日 山 林 泉 寺

直江津から米山近くに行く間は、松原の中から海が見えたり、漁村が見えたり、白帆が見えたりして、ちよつと好い。犀潟、潟町、柿崎、すべて漁師町で、鱈などが盛んにとれる。附近に人の見に行く馬正面の桃林などがある。柿崎を経て米山近くなると、汽車は全く海の波打際を走るやうになつて、防波隄のつくられてあるのが到る處に見られる。柿崎には、親鸞上人の遺蹟などがあつた。鉢崎から愈々トンネルにかつた。つまり米山の山脈が海中に落ちてゐるところを過ぎて行くので、トンネルを出ると海、海を去るとトンネルといふ風で、風景が頗る凡でない。ことに冬の北海は、雄偉と壯大とを極めてゐた。



鯨 波 海 水 浴

海には岩石が多く起伏してゐて、波濤の掀翻せらるゝ、具合も見事であつた。陸路を行つても、青海川あたりは風景が好いさうで、旅客の休憩する茶店が處々にあるといふ。米山の半腹には、有名な米山薬師があつて、賽客が常に遠くから集つて来た。青海川には海水浴場がある。しかし、こゝらでは、鯨波が一番好い。鯨波の蒼海ホテル、そこは、停車場からすぐ真直に松の中を上つて行くやうなところに位置してゐるが、家が大きく、海の眺望も好く、理想的の好い旅館だ。唯、柏崎あたりからつれ込みがないと猶好いのだが、どうもこれは致し方がない。天氣の好い日には、此處から佐渡の青螺が見えた。

鯨波を出ると、海は見えなくなつて了ふ。やがて柏崎町に着く。北越の有名な石油生産地で、工場や、煙突や、石油を運搬する丸い貨車だのが旅客の目を惹く。町も賑やかに、停車場も大きい。宿屋は天京、岩戸屋など。町で見物すべきものは、柏崎神社と、例の行基作の關魔堂の關魔である。附近に有名な流行佛で、毎年三月十五日から三日間、關魔市といふのが立つ。關魔前なる菊屋の噂、あれを地藏へやらぬは、さりとて關魔のよいひいきぢやア」といふ土地の唄がある。

こゝから越後鐵道の支線が左にわかれて行つてゐる。海岸地方と信濃川流域との間を走つて、地藏堂、出雲崎、寺泊などといふ停車場を経て、彌彦の東面を掠めて、新潟まで行つてゐる。この汽車は信濃川の西を通つてゐるので、新潟に至るまで遂に遂に信濃川を渡らない線路である。出雲崎、寺泊などの海岸に行くにも、荒濱の國道を通つて、椎谷に出て行くよりも、此線に由る方が便利であつた。彌彦へも、此線を利用すれば、さう大した骨が折れない。柏崎から新潟まで哩數五〇、一、三等賃金一圓、時間は約四時間ほどかゝる。信濃川出水の時には、旅客は多くこの線を利用する。しかし柏崎から荒濱の國道を通つて、悪田の橋を渡つて、椎谷から出雲崎、寺泊の方

へ行つて見るのも面白い旅の一つだ。椎谷にはたしか名高い觀音堂があつた。出雲崎は、昔は佐渡へ渡る唯一の渡津で、順徳天皇も、文覺も、日蓮も皆な其處から荒海を超えて渡つて行つた。芭蕉の『奥の細道』などにも、其處に來た時のことを書いてある。昔は信濃川の流域の道よりも、此方の方は主なる道路になつてゐたと思はれる。

寺泊から佐渡に行く汽船は、赤泊を目的港としてゐる。直江津からは小木、新潟からは夷、此處からは赤泊である。佐渡を見物するには、夷に着くのが一番好いが、冬は北海が荒れて、何處も自由がきかないので、此處と赤泊との間の航路ばかりが唯一の郵便船路になるのである。

柏崎から長岡まで行く間は、北條、塚の山二驛の間に、澁海川の勝がある。溪山の形がや、面白い。それから、來迎寺驛から、小千谷の方へ行く軌道がわかれてゐる。一夜とまりのつもりで、其方の方へ入つて行つて見るのも面白い。來迎寺驛から小千谷まで一時間半ほどあれば行ける。

小千谷は、例の長唄にある『小千谷縮の何處やらが』と言ふ唄のある小千谷である。信濃川が信濃の飯山町から萬山の中を通つて此方に出て來たやうな處に位置してゐて、

嵐氣も多く、感じも好い。ことに、雪に埋れた時分は面白い。町の外れに、信濃川が流れ、そこに大きな橋がか、つてゐるが、そこから見た鬼面山、駒ヶ岳の山々の連亘が見事だ。苗場山も其處から見えた。山東京山の書いた「北越雪譜」を讀んで行くと、一層種々な興味が饒い。

町には、魚沼神社と、小千谷縮を織出した人を祀つた小さな堂などがあつた。これから鹽澤まで七里。

で、來迎寺驛へ引返す。この驛と宮内驛との間に、大きな信濃川が流れてゐる。

長岡市は越後では新潟に次ぐ大都會で、維新の役に、例の河井繼之助が屢々官軍を破つたところである。市の西に見える山の連亘は會津の方へ通する六十里越、八十里越などのある山脈で、會津兵はそこからどしどしこの信濃川の平野へ下りて來たのであつた。町では、旅館は、樹屋、野本屋、大野屋などといふのが好い。町の東一里に、悠久山といふところがある。舊藩主の墓地があつたり、櫻があつたりして、春は賑やかだ。東山には例の石油の井槽が林立してゐる。その他、町には、柳原神社、千手觀音、極樂寺などがある。宇神田の榮涼寺には、河井繼之助の墓がある。繼之助は草生津口で傷つ

いて、八月十三日、會津へ入る途中で遂に憤死して了つたのである。

三條までは別に見るものもない。三條は賑やかな處で、西本願寺の別院や日蓮宗の本山本成寺などがある。佛教の信者の多いところだ。本成寺の會式は殊に賑やかだ。

彌彦詣では、昔は此處から行つたのだが、今は越後鐵道でも行けた。越後人の大騒ぎをするだけあつて、一遊の價値はある。神社は彌彦山の麓に位して、天香語命を祀つてゐるが、老松古杉畫も小暗く繁茂し、社殿の建築も宏壯だ。山の上に奥社がある。そこは頗る眺望に富んでゐた。

彌彦に接して、角田山が連亘してゐる。そして向ふの岸に、浦瀆といふ奇勝がある。こゝらは昔は海中に突出した岬で、入江は深く信濃川の流域に入り込んでゐた。

三條から新潟に行く間には、織物の出来る青海神社のある加茂町、延命地藏尊のある羽生田町、岩越鐵道と村上へ行く鐵道との分岐點である新津町、越後角兵衛獅子の本場である巻町、五泉平の出来るので有名な五泉町、越後特産の梨の出来る龜田町、途中で見るべきものは先づ此位だ。

新潟近くなると、感じが大きくなる。信濃川の前に流れてゐるのがそれと豫想される。

大きな工場や煙突などが見え出して来る。沼垂の次は新潟驛である。しかし新潟の市街には、此處からまだ長い長い萬代橋を渡つて行かなければならない。車もあり馬車もある。この橋の上は眺望が頗る好い。いかにも大河の河口らしい感じがする。

橋を渡り終ると、新潟市。夏だと、柳が堀割に添つて屏いてゐて、何とも言へない好い印象を與へられる。商業の町と言ふよりも、美人の町、狹斜の町と言はれるだけであつて、衰へた中に何處か艶めかしいところがあつて、旅客の胸をそゝることが多い。旅館の女中なども皆な色が白くつて綺麗だ。新潟特有の地方語も、何となく可愛らしい。旅館では吉勘、篠田、室長、其他大きなホテルか何かがあるが、私は室長が好きで、行くといつでも其處に泊る。

町での名所は、日和山と白山公園、先づこの二つだ。日和山には、眺望臺があつて、そこに上ると、北海の波、佐渡の青螺、信濃川の海に注ぐさま、新潟の百萬蓼、すべて一目に見える、流石は世に知られた眺望臺だけあると思はれる。白山公園は、これとは全く反對の方に位置してゐて、其處には白山神社があつた。信

濃川はすぐその傍を溶々として流れてゐた。夏の夜は、其處には、例の有名な盆踊があつて、夜の更けるまで、砧の音があたりに賑やかにきこえた。

料理店では、鍋茶屋、行形などが名高い。一夜を其處に行つて、美しい人達を相手に旅の憂さを慰めるのも好い。料理も旨いし、魚も新しいし、藝のある妓も多し。東北では、女では新潟と言はれるが、實際それに違ひないと私も思ふ。

頼三樹の詩に、『柳橋眉月夜微茫、江入渠流曲々通、八百八樓涼似水、掀簾七十二橋風』と言ふのがあるが、いかにもよく新潟の感じを現はしてゐる、柳と堀割と酒樓との調和は、實際繪のやうなところである。

此處からは佐渡へも、羽後の酒田へも汽船が出た。佐渡へは朝と午後とに二回出た。唯、不便なのは、港がわるいので、大海を小さき艇で五町も六町も出て行かなければならぬことである。

しかし、佐渡行の汽船は、其日の浪模様で、萬代橋のすぐ下のところまで入つて來ることが出来る。佐渡の夷港まで賃金三等五六十錢、時間は五時間。しかし、私の行つた時には、汽船が萬代橋の下まで入つて來ないので、遠い長い路を、

佐渡

東港

黒木御所址

税関の前を通つたり、倉庫の傍を掠めたりして、砂山から瀆邊の方へと出て行つた。沖には、汽船が五艘も六艘も波の中に動揺してゐるのが見えた。やがて小さな舢舨に私達は乗つた。

この舢舨の本船に着くまでの困難は、日本海沿岸の諸港で、旅客が常に嘗めさせられる困難であつた。

佐渡へは是非一度渡つて見る方が好い、船さへ嫌ひでなければ、夏はわけはない。東港は好い港だ。加茂湖を後にして、蒼い海を前にし、更に金北山を帯びた形は、日本でも澤山はない勝景の地だ。それに、佐渡には、見物すべきところが非常に多い。

東港では確か野村屋といふ旅館が好かつた筈だ。そこから車で、國中平野を横つて、川原田まで六里、この間には、金澤村に明治記念堂があり、千種から右にちよつと入つたところに、順徳天皇の一時住居あらせられた黒木の御所址があつた。其處には、その址のところに入つて行く手前に、小さな寺があつて、順徳天皇御持佛の観音が祀られてあつた。今は國寶になつてゐた。御所址には、萩野由之博士の書いた石碑が立つてゐて、萩などが咲いてあつた。

御松といふ寺

妙照寺

河原田町

二見港

峠

相川町

佐渡の金山

この少し先きに、矢張り右に入つて、御松と言はれた寺があり、その奥に日蓮が三年住んでゐた妙照寺といふ巨刹があつた。前の御松といふ寺にある松は、日蓮が毎日奥の寺から来て朝日を拜したところだと言はれてゐる。

夷から河原田に行く路は、夏は暑い。東京とも氣候はいくらも違はない。で河原田から、澤根、二見港（此處には直江津小木間の汽船が寄港する）を通つて、相川へは、猶一つ峠を越さなければならぬ。

しかしこの峠はさう大して険しくない。それに、この峠の道から眞野灣を見渡したさまは、非常にすぐれてゐる。夕暮などに越えて行くと、何とも言はれない。

相川まで峠から一里、町は通の狭い、折曲つたゴタゴタした町で、一面港、一面漁市といふやうな氣のするところであつた。従つて特色には富んでゐるが、町の旅館の二階からは、海は餘りよく見えない。しかし、濱は綺麗な好い濱だ。それに、町の後をめぐつた丘陵の上に七面天が祀つてあつて、其處から見下した眺望は、かなり好い。

佐渡の金山は、今は昔のやうではないが、折角其處まで行つたら、行つて見る方が好い。

眞野陵
日蓮の坂址

赤泊港
小木港

新潟以北

村上町

相川からは、無名異焼といふ朱泥焼に似た陶器が出来る。三浦常山の名は、かなりに世にきこえてゐる。

歸りには、河原田から入つて、眞野の御陵の方へ行つて見るが好い。河原田から其處まではいくちもない。それから、新徳の方へ出て、日蓮の上陸した寺の跡を見たり、阿新丸の跡を途中にさぐつたりして、夷港の方へ歸つて来る。朝早く、相川を立てば、午の船に間に合はないことはない。

小木はかなりに遠い。河原田からまた五六里ある。赤泊は、河原田から小佐渡隆起帯の山を越して三里。のんきな旅なら、一々探つて見るに越したことはない。金北山に登つて、山の中にある小さい湖水を見るのも、旅の一興であらう。

で、同じ汽船で、新潟へ戻る。そして東京に歸るなり、また旅をつゞけるなりする。新潟から北は、新發田の町、兵營のある町、城壕に蓮の花の多い町、それから荒川の北方にある湯澤温泉、乙村にある眞言宗の巨利乙寶寺大日堂、石佛神社と往昔の磐舟柵址とを持つた岩船町、それから奥に、村上の昔の城下がある。こゝまで、新津から汽車がわかれて通じて行つてゐるから、行くのには、さう大して面倒でない。

瀬波温泉

海府浦の勝

葡萄峠



新發田城址

村上西には、瀬波港があり、瀬波温泉がある。その温泉は近年湧出したので、設備なども今ではかなりに出来てゐるといふことだ。

海府浦の勝は、此處等ではきこえたところだが、普通の旅客にはちよつと行きかねる。それから、村上の奥の山の中に、三面村といふ世に隠れた深山郷がある。五家莊、祖谷などと同じところで、平家の落武者が隠れたと言はれてゐる。

こゝから橋南谿は、葡萄峠の嶮を越して、羽前の鼠ヶ關の方へ出て行つてゐるが、この峠も、越えて行つて見たい路の一つだ。

村上の少し手前から、羽前の米澤平野の方へ出て行く路もわかれて行つてゐた。村上から新津まで戻つて来て、岩越線で津川か

最後の旅路

ら阿賀川の谷に添って、會津へ出て、東北線で戻つて來るのも面白い。

二十八 木曾への旅

- ▲飯田町 鹽尻間哩數一四三、八、三等一圓九十二錢。
- ▲鹽尻 名古屋間哩數一五六、七三等二圓〇五錢。
- ▲鹽尻 松本間一〇哩 松本より淺間温泉へ一里、馬車、車、車賃五六十錢を要する。
- ▲松本 大町間の汽車、二一哩、三等五十五錢、日本アルプス探險者に便利である。

これは飯田町から出る中央線で行く。八王寺までは別にこれと言つて見るものもない。淺川驛で下りると、高尾山、東京の人々がよく遠足に行くところだ。やがて小佛のトンネルを越えると、相模から甲州、桂川がその谷を流れてゐて、風景が好い。

與謝、上野原、此線に名物のトンネルは、段々多くなり出して來た。烏澤を過ぎて、やがて猿橋に着く。例の名高い猿橋のあるところである。

汽車は丁度橋のかつてゐるすぐ下流に鐵橋を架けてゐるので、車窓からもそれと見えるけれど、ちよつと一汽車おくらせて、下りて見るのも好い。しかし、昔ではめづらしかつたらうが、今ではさう大して興味を惹かない。これから思ふと、岩國の錦帯橋などの方がぐつと特色に富んでゐる。

桂川では鮎が取れる。やがて右に大きな岩山が見える。岩殿山である。このあたり溪山が凡でない。こゝは

大月から富士へ
笹子のトンネル
天目山へ
鹽山温泉
差出の磯

武田の臣小山田備中が反り忠をして、勝頼を天目山に陥れた城のあつたところで、今でもその城の址が残つてゐる。大月驛では、夏は吉田口を上る富士行者が澤山に下りて行く。こゝから甲斐絹の出来る郡内の谷村町まで馬車鐵道、それから吉田へ行つて、そこから富士へと上るのである。

大月から初狩、此處等は洪水で非常な水害を被つたところだ。やがて六萬三千二百呎の大きな長い笹子のトンネルが来る。

これを抜けると、初鹿野驛の近くに、武田勝頼の末路を示した天目山がある。一度行つて見る價值がある。そこには、勝頼を弔つた景德院といふ寺が依然として今日も残つてゐて、記念の石碑などが立つてゐる。昔を思ふの情に堪へないやうなところである。葡萄の名所の勝沼、諸曲鶴飼に其名を知られた石和町、この邊も往年洪水の害のひどかつたところだ。鹽山驛の近くには、鹽の山があり、鹽山の温泉があり、惠林寺がある。その温泉はわかし湯であり、綺麗ではないが、効能があるといふので浴客が多い。それから日下部驛の近くに、差出の磯がある。笛吹川が一ところ、海に近い磯のやうな趣を見せてゐるところで、昔は千鳥などがあつたといふことだ。甲州の山の中では、ちよつ

酒折の宮
甲府
城址

御岳の勝



木曾への旅

差 出 の 磯

と味はれないやうな感じのするところだ。甲府の手前に、日本武尊が「新治筑波を經て幾夜が寝つる」と言はれた酒折の宮がある。その宮は汽車の中からも見える。甲府では、旅館は米倉、佐渡幸など。公園、城址、縣廳のあるあたり、見るところと言つては、先づその位のもので、長く足をとめてゐるほどのことはない。しかし此處に行くと、御嶽には、何うしても行かすには居られなくなる。甲府から北へ五里、和田峠、そこから見た背面の富士は、旅客の思を惹くに十分だ。一里で、天神平、また一里半で、昇仙峽、成ほど名にきこえたところだけあつて、岩石の布置、溪流の屈曲

頗る奇をつくしてゐるのを見る。實際、一步に一景、路窮するがごとくにしてまた忽ち通ずといふ風である。覺園峯のあるあたりは殊に奇だ。岩にも、いろ／＼な名がついてゐる。や、俗にすぎるといふやうな感じもするが、兎に角この地方では一奇勝とするに足りる。耶馬の谷などよりも或は好いかも知れない。猿岩、富士岩、蟾岩、それから御岳新道を開いた圓右衛門の像、やがて石門に着く。雪虹の瀧が鏗然として瀉下してゐる。橋は昇仙橋と言はれてゐる。對岸にある仙娥の瀧も中々見事だ。これから金櫻神社のあるところまで半里、奥の宮まで行かうとするには、猶五里ほど山に登つて行かなければならない。

それから甲府から鵜澤に行つて、富士川を下るのも面白い。鵜澤まで四里半、馬車鐵道がある。こゝで河船に乗る。中央線の出来ない以前は、この鵜澤の河船は、甲府と東京とを連絡した唯一の交通路で、郵便も皆この線を経て行つたものであるが――従つて鵜澤は賑やかな河港の趣を呈したものであるが、今はすつかり衰へて、唯、身延參詣者のためと、地方の交通とを計つてゐるのにとゞまつて了つた。しかし、この河船は面白いから、是非一度下つて見なければいけない。夏は殊に好い。新しい鮎なども食へる。

鵜澤から東海道の岩淵まで十時間、早くつて八九時間、遅くも十二三時間か、れば行ける。屏風岩あたりは中でも風景が好い。

波木井で下りて、三十町で、身延へ參詣するの順路である。門を入ると、松立木、橋、門前町、それから長い階段の上ると、正面に祖師堂、眞骨堂、位牌堂、納骨堂、奥殿などが竝んで立つてゐる。石段を左に下に曲ると、日蓮の廟所八角堂がある。大抵旅客は、この奥の芬陀利華の奥の院までしか行かないが、猶上つて、奥の七面山に行つて一夜を宿房に明すのも興味が饒い。そして歸りは大澤あたりに出て、河船に乗る。それに、近頃身延鐵道が東海道の方から出来て来て、富士川の右岸を段々進んで来てゐるから、何方にしても交通に不便を感じるやうなことはない。

再び甲府に戻る。甲府から北すると、龍王、葦崎、例の武田勝頼が新府城の城址は、今日でも葦崎に發見することが出来る。そればかりではない、此處等に來ると、須玉川の溪谷が大きく前にひらけ、七里岩の臺地が高く聳えて、氣象がすつかり雄大になつて来る。八ツ岳の雄姿も、既にこれを車窓に指すことが出来た。

葦崎から汽車はその七里岩の臺地へとか、つて行つた。私はこゝから小淵澤、富士見

あたりまで行く高原の感じを忘る、ことが出来ない。右には須玉川の谷を隔て、金峯山の連峰、正面には八ヶ岳、左には釜無川の大きな峽谷を隔て、白峰、駒ヶ岳の連峰がつねに雲に閉ざされてゐる。そしてその臺地には、松があつたり草藪があつたり林があつたりした。日本でも、これほどすぐれた高原の感じを持つたところは澤山にあるまい。私の知つてゐるところでは、此處と、越後の赤倉から見た風景と、先づこの二つである。輕井澤などは、到底此に比すべくもない。

この高原の中で、殊に日野春の停車場のあるあたりが好い。私は夏と冬とに二度通つたが、そこから見た冬の山の雪は、何とも言はれなかつた。八ヶ岳、駒ヶ岳、自然の壮大なさまは遺憾なく其處に展げられてゐた。

小淵澤あたりも好い。そこから見た富士の夕照に彩られたさまも、忘れることの出来ないもの、一つであつた。富士見は、その高原をすつと登りつめたところに位置してゐて、八ヶ岳は、そこからは、や、右の後になつてゐるが、こゝも別荘地などとしては、日本にもたんとないほど好い處であらうと思ふ。

で、富士見を通り越すと、地形は全く變つて、一息に上諏訪まで汽車は下りて行つて



諏訪湖のスケート

了ふ。

諏訪湖はスケートで名高い湖水、天龍川の水源地で名高い湖水である。上諏訪、下諏訪の二市街が湖の東岸に繪のやうに展開されてゐる。兩方も、温泉場があるが、何方かと言へば、上諏訪の方が景色も好ければ、感じも好い。これで、湖水を繞る山が、もう少し特色に富んでゐればと思ふが、それは無理な注文かも知れない。

旅館は牡丹屋、しかし、これは湖水に臨んでゐない。湖水の見える家では、諏訪ホテルなどが先づ好い方だ。泉質は鹽類泉で、湯は玲瓏として玉の如しである。夏も好いが、冬行つて、巨燵にありながら、酒を飲む趣味は忘れられない。こゝでは、湖水でとれる旨い大きな鯉が食へる。

湖水には汽船があつて、氷で湖水が張りつめられない限り、下諏訪、岡谷の方へ毎日出て行く。



天龍峽

てゐるが、汽車の中から見たところでは、これがあの五六十里を流れるあの大きな川とは何うしても思はれない。

辰野驛は、飯田、高遠の方へ行く門戸を成してゐるので、交通が頻繁だ。辰野から飯田町まで十二三里、電車が中途まである筈だ。道路も平坦だ。

やがて小さな山の中を通つて、鹽尻驛へと行く。元は中山道は下諏訪から岡谷を通つて、鹽尻峠を越えて、そしてこの鹽尻驛へと來てゐるのであつた。この道路上には、峠から見た「諏訪湖の逆さ富士」といふ風景が昔の案内記の名物になつてゐた。

鹽尻から見た日本アルプスの連峰は見事だ。乗鞍、槍ヶ岳、常念ヶ岳、それがすべて一線に壁のやうになつて並んで見えた。槍ヶ岳の尖頭などもそれと明かに指さされた。日本の脊梁山脈の大觀をこれだけ大きく展開してゐる處は、日本には先づ無い。

鹽尻から松本、明科、篠井の方へ行く線路が右にわかれて行つた。前に見える原野は村上氏と武田氏との矛を交へた古戰場枯梗ヶ原である。

松本市では、淺間温泉がその近くにある。泉量の多い温泉で、松本の人々は女などを伴つてよく其處に遊びに行く。上地には藝者などもゐる。

鹽尻から洗馬。そこから木曾に入つて行く。洗馬驛の右を流れる川は、犀川である。木曾義仲が馬を洗つたといふので地名を得たので、今でもその井の址がある。中山道を



アブルス白馬岳

行く、その次が本山、その次が櫻澤である。ここで旅客は犀川を此方から向ふへとわたる。溪流が見でない。費川、奈良井——谷は段々深くなつて行く。水聲は佩玉のごときこえる。で奈良井に着く。國道を行くと、これから鳥居峠にかゝるのであるが、汽車はトンネルを穿つて、無造作にそこを越へて、藪原驛へと達する。だから、汽車で行つては、鳥居峠の嵐氣の深い翠微や、折れ曲つた谷に添つた道や、峠の上から見渡した御嶽の丸い姿や、さういふものを目にすることが出来ない。藪原はやご原と土地の人は發音する。お六櫛が其處で出来る。蕎麥なども名物だ。

鳥居峠の此方と向ふとは、感じが丸で違ふ。旅客はここでは犀川を離れて、木曾川へと逢つてゐる。そこでは、木曾川はごくまた小さい。で、宮の越に行く。こゝには木曾義仲の居城であつた山口城址と、義仲が元服した柏原八幡とがある。徳恩寺には義仲と樋口兼光と今井兼平の像、義仲の位牌、巴御前の墓などがある。宮の越から福島までの間は、谷がや、開けすぎてゐる。木曾川にも別に他の奇がない。それが福島に入ると、溪は再び迫つて、急湍奔瀨が多くなる。そしてこの迫つたところに福島町がある。成ほど昔、關門を置いたのも尤だと思はれるやうな處であつた。それに、町として特色があつて、感じが凡でなかつた。對岸の興福寺には、木曾義仲の墓と稱するものがあつた。

御嶽登山者は、此處で下りて、北して、御料林の中を三里ほど行つて、王瀧峠を越えて、登山口に達する。王瀧には旅舎がある。そこで登山萬般の準備をする。強力を雇ふこと、食料二日分を持つこと、は、登山者の是非しなければならぬことである。一合目より十合目、路は富士などよりも峻しいといふことだ。頂上には御嶽の本社がある。劔の峯にも小さな祠がある。下山の路は、飛驒の高山に下りる路と、木曾の福島に下り

る王瀧口、黒澤口がある。一度は登つて、御來光を仰いで見るのも面白からう。
 福島と上松の間に、王瀧川が右の谷から木曾川に流れ込んでゐるところがある。そこからは、群山の間に御嶽の雄姿を見ることが出来る。そこから少し行くと、例の榎橋の勝がある。

芭蕉が「かけはしや命とからむ葛かつら」と咏んだ處である。しかし、今は路は坦々としてゐるし、溪も露はに平凡に流れ流れてゐる。茶亭などがあつて、旅客に茶を沏めてゐる。この附近は、木曾川の谷としては、先づ一番好い處だが、日光、鹽原に比すると、溪はや、單調にすぎてる。唯、林相が美しく、檜の緑色は他に見ることの出来ないものだ。元はもつと路も峻しく、境も奇であつたのであらう。木曾の谷の道路は、何遍改築されたか知れないといふことである。

上松町は、木曾谷の一邑としてより以外、他に見るものもない。唯、此處は駒ヶ岳登口に當つてゐるので、それを祀つた神社が町の中ほどにあるを私は見た。駒ヶ岳登攀は、御嶽に比べて一層峻険を極めてゐるといふことで、兎角、間違ひなどの起ることが多いと聞いた。



木曾會寢覺の床

上松から半里、寢覺に、例の臨川寺がある。街道には、有名なたせやといふ蕎麥を賣る家があつて、そこを入ると、寺がある。浦島太郎の持つたといふ釣竿などを寺僧は見せる。こゝから下を見ると、木曾川は奇岩縦横瀾溪その間を流るといふ風で、即ち有名な寢覺床である。成ほど名高いほどあると思はれるやうな溪の眺望である。
 これから橋を渡つたり、小野の瀧といふ小さな瀧を路傍に仰いだりして、やがて須原へと着く。此處はいくらか耶馬溪の柿阪あたり嵐氣の多い雲烟の多いところである。つまらぬもので

野尻、三留野、殊に、妻籠に入らうとするあたりの木曾川は、頗る溪山の特色を發揮してゐる。しかし、汽車は三留野から阪下の方へわかれて行つてゐるから、徒歩でなければ、その勝を見ることは出来ない。

妻籠からは、路は新舊二つにわかれて、新は飽まで木曾川に添ひ、舊は峠を越えて、山の上の馬籠驛へと行つてゐる。妻籠から、峠越に行けば、飯田まで六七里位しかない。それに車も馬車も通ずる。

妻籠から落合までの木曾川に添つた新道の上には、好い激湍が到る處に見られる。奇岩なども多い。

要するに、木曾の谷は、汽車で通過しただけでは、ほんの輪廓しか見ることが出来ない。福島あたりで、汽車を捨て、そして歩いて見なければ、いけない。期節は新緑の候か、紅葉の時分が好い。

で、汽車で美濃に入る。中津町は、今は非常に開けて、立派な町になつてゐる。旅館などにも大きいのがあつた。中山道は、これから大井を通つて、御嵩から犬山の方へ出て行つてゐるが、汽車はそれとは離れて、土岐川に添つて、土岐津、多治見などといふ

ところに停車場を置いて、そして名古屋平野へと出て行つてゐる。多治見は、陶器できこえた町だ。

この間で、土岐津多治見間の土岐川の風景は頗る見事だ。倭繪にでもありさうな碧い穏かな瀬潭で、谷の具合などいかに柔らかだ。虎溪山の下を通るあたりは、何とも言はれないほどだつた。

しかし虎溪山は、眺望はあるが、さう大して好いところとも思はれなかつた。で、名古屋へ出て、東海道線で東京へと歸つて来る。山から海へと、蒲郡の海岸あたり

りに一夜を過すのも興がある。汽車を大井で下りて、中山道の方面をたどると、木曾川に、木材集中所がある。木曾から流した筏は、皆な一度そこに寄せられて、そして更に整理して下に流すといふ風になつてゐた。

太田の渡あたりも風景が好い。犬山の城壁の白いは、繪のやうだ。これから小牧山を見て、名古屋に出て好いし、川船を雇つて、拙堂がやつたやうに、岐阜の方へ下つて行つても好い。

飛騨の山の中は、普通の旅客には、交通の便がないので、手輕には行けない。しかし益田川に添った沿岸の風景は、天下の奇勝である。この谷を溯つて、高山町から越中の方へ出て行く旅は、車で三日四日かゝるが、暇があつたら是非行つて見るべきである。

二十九 北陸の旅路

▲東京 福井間、哩數三五一哩、賃金三等三圓六十五錢、途中米原にて乗替、米原より福井、金澤、富山を経て、直江津まで二二八哩、三等二圓七十一錢。

▲福井 三國間哩數一七、三、三等賃金二十九錢、新福井より永平寺を経て、更に勝山を経て大野口に至る電車、福井永平寺間十九錢、勝山まで四十九錢、大野口まで六十六錢。

▲新武生 岡本新間、滑川、五百石間の軌道がある。

▲大聖寺 より山中、山代、粟津、片山津方面の温泉に行く温泉軌道がある。至極便利である。

▲能登 に赴く津幡矢田新間は哩數三四、四、三等賃金五十七錢。

▲氷見、伏木、高岡城端間の中越線は、伏木城端間三等四十七錢、氷見伏木間十二錢。

北陸に遊ぶには、直江津から行つてもよし、米原から行つても好い。東京を起點とすれば、或は直江津の方が好いかも知れないが、此處では米原から行くことにする。米原を出て、琵琶湖の湖畔を傳つて、汽車は北へ北へと進む。長濱は豊臣秀吉のゐたところ、その近所に、例の織田と淺井朝倉の姉川合戦の古戦場がある。それから虎嶽、高月などといふ驛を通つて、木の本あたりに來ると、越前境の山嶺が



敦賀港

嵐氣をあたり漲して来る。やがて有名な
賤ヶ岳の古戦場のある柳ヶ瀬が来る。福井
(北の庄)にその勢力を持った柴田が此處
まで出て来たのを、秀吉が袂と投じて邀へ
撃つた當時のさまなどが思ひ出される。
附近に余吾湖がある。

やがて、トンネル、これは椽木峠を越え
て行つてゐるトンネルである。その数が三
つ四つある。刀根、正田の二驛を過ぎると、
もうやがて敦賀港だ。

敦賀港は昔から對外航路の要地であつた
が、今はウラジホストツクとの連絡が完全
に出来たために、一層重要な繁華な港とな
つた。北陸地方では、港としては、今は此

處が第一であらう。

それに港が好い。小ぢんまりとしてゐて、そして、海水が深く灣入して、水深が大きい。いかなる大船も安全に風波を其處に避けることが出来る。それに、此處には見物するものが多い。先づ第一に、停車場近くに、氣比神宮がある。北陸では有名な古祠で、延喜式にも氣比神社七大座と書いてあり、神功皇后時代から靈顯の著しかつた宮である。大きな華表、芝生、松、ついで、弘法大師土用松、菅公梅、龍虎泉石、蛙蟬橋などがある。朱塗の大華表は、正保年間佐渡から漂着した一本の榕の木で造つたもので、今、特別保護建造物になつてゐる。拜殿、正殿も宏壯で感じが好い。

此處から町の大通に出る。東西に長く連つた街路で、東すれば、金ヶ崎宮、西すれば松原公園、倉庫や運漕店が軒を並べてゐて、いかにも北國の港らしい。先づ金ヶ崎宮に行つて見る。途中から港の碧い海と帆檣と汽船とが見えて繪のやうだ。對岸の繁華ヶ岳の連亘も美しい。

金ヶ崎は例の新田義貞と南朝三玉子の賊軍に圍まれたところである。皇太子恒良親王の自刃は殊に人に悲憤の涙に咽ぼしめすには置かない。當時、義貞は後醍醐帝の勅を奉

じて皇太子と共に、此處にやつて来た。しかし時既に冬、越前近江の山を越えるにも、一方ならぬ苦難を覺えた。そして此處に來ると間もなく、待受けてゐた敵の爲めにすっかり圍れて了つたのであつた。今、神社のある後のところが、その昔の城の址だといふ。神社は恒良成良兩皇子を祀つたもので、社殿は海に臨んで、いかにも懐古の情に堪へないやうなところだ。

この近所に、朝倉義景のゐた古城址がある。

町を真直に西に行くと、氣比の松原がある。中に、松原神社がある。水戸の浪士武田耕雲齋以下三百名の自盡したところだ。今、石碑が立つてゐる。

この他、永建寺、西福寺などといふ寺がある。松原村には、齋藤實盛の生れた家だといふものが残つてゐる。

對岸の常宮にも渡つて見る方が好い。海上二里、便船がある。ちよつと嚴島を小さくしたやうな氣のする處だ。常宮神社の社殿の海光と映發してゐる形は繪に似てゐる。そこには秀吉が朝鮮から持つて來た古鐘などがあつた。

教賀から旅客は若狭に入つて見るのも面白い。車で行けば、三方湖を見て、小濱に行

て、其處で一夜泊つて、翌日は歸つて來られる。若狭は人の滅多に行かないところだけに、感じが未だ俗了されてゐない。小濱町のあるところなどは、海山の美をつくした頗る明媚な風景である。天氣都合がよければ、船を續して、外面に大門小門の勝を探ぐるのも好い。それに、此處は人氣がよく、女が美しく言葉が雅馴である。狭斜にも、一種の柔かい氣分が漂つてゐる。

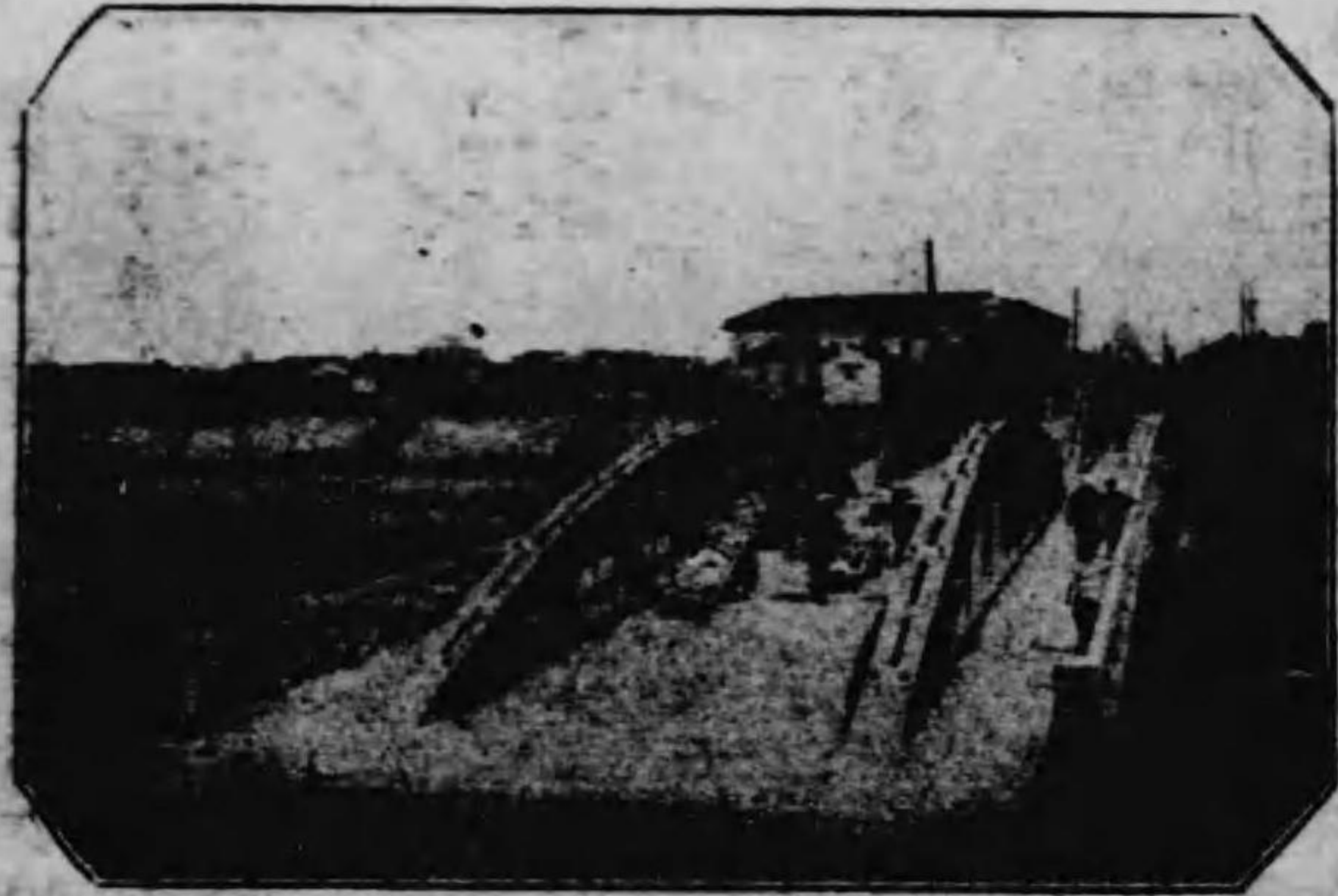
旅行の都合で、其處から行返さずに、北川の谷を溯つて、琵琶湖畔の今津町に出て行く路もある。里程八里、車が通ずる。また、更に先に進んで、丹後に入つて、舞鶴の方へ出て行つても好い。此間には、高濱などといふ好い景色のところがある。

で、教賀に戻る。汽車はまたトンネルへと入つて行く。今度は木目峠である。トンネルとトンネルとの間にある杉津の海岸は、北陸にはたんとはない位風景のすぐれたところだ。海の色と對岸の山の色と相映發した上に、白帆が靜かに搖いで行く。そこにはたしか海水浴場があつた筈だ。

最後にある大きなトンネルを一つ越すと、今度は山と山との間のやうな地形になる。今庄驛では、日野川が近いので、鮎が取れる。鮎鮎などを賣つてゐる。そこにある白鬚

神社には、瓜生保の奉納した太刀が寶物になつてゐる。
 鯖波驛の近所にある一小獨立山は、瓜生保が據つて以て新田義貞を援けた柚山で、ここに昔の城があつたのである。停車場から丁度東に當つて見えてゐる。また、この附近に日蓮宗の巨利妙本寺や、蓮如上人が他宗の僧に逐はれて隠れた芋平岩窟などといふのがある。

日野川の谷は次第に開けて行く。武生は、一萬六千の人口を有した賑やかな町である。總社大神といふ縣社、國分寺にある藥師如來などは見るべきものだ。大蟲神社、味眞野宮址、日野山、眞宗出雲寺派の毫檜寺などもその附近にある。日野山は、俗に越前富士と言つて、その頂上からは、一目に北海を見渡した。
 鯖江、其處には兵營、絹絲紡績會社などがあつて、賑やかな町だ。蚊帳、網代、羽二重、それから五箇村の紙などが名産だ。僧泰澄の生誕せる泰澄寺は、そこから二十町ほど隔て、麻生津村字三十八社にある。
 福井は、北陸の大都會、縣廳もあれば、裁判所もある。ことに羽二重の主産地なので殊に商業が活潑である。旅館は、五岳樓、繩屋、風月樓、菓子屋、烟草屋など。こゝで



福井九十九橋

見物すべきものは、市の西南に連つてゐる足羽山、その橋で市街を橋南橋北に分つてゐる九十九橋、足羽山公園の上にある足羽神社、繼體天皇の石像、もと市の西部藤島村にあつたのを近年此處に移した新田義貞の藤島神社などである。その他、足羽上町の善慶寺に、橋本左内の墓がある筈だ。
 新田義貞の戦死した藤島は、市の西部二十町ほどのところにあつて、今でもその址が残つてゐる。旅客は是非行つて見なければならぬ。
 福井は元、北の庄と言つて、柴田勝家のゐたところで、賤ヶ岳敗後、勝家は此處に自盡した。
 曹洞宗の本山永平寺は、市から西南四里、志比谷村にある。電車の便がある。寺域六千餘坪、永平寺山の麓に位置し、輪奐の美、人目を驚かすに

菅原温泉

三國港

東尋坊



三國東尋坊

五五四
足るものがある。境内は幽邃で、老杉樹多く、寺院處々に點綴せられて、いかにも一宗の本山らしい趣がある。

福井からは、今津驛の一里にある蘆原温泉に行つて一泊するのも好いし、それから猶進んで、九頭龍川の河口三國港に行つて、昔の北國の港のカラアの中に浸るのも好い。縣社三國神社の境内は、日本海を展望するのに好い箇所である。

此處まで來たら、旅客は次手に、九頭龍川の河口の銚子口から、海岸に添つて、北に行つて、雄島附近にある東尋坊の勝を見るが好い。その附近は、一面に柱狀節理を呈した輝石富士岩で、波に蝕せられた形と、波濤の掀

大聖寺町

山中温泉



山中温泉(黒谷橋上流)

五五五
翻する形とが、頗る奇觀だ。

福井から汽車で北すると、大聖寺までは別に見るものもない。大聖寺町は、もう加賀國である。此處では、旅客は是非汽車を下りなければならぬ。何故なれば、その近所には山中、山代、片山津、粟津などといふ温泉が散在してをり、柴山瀉、今津瀉、木場瀉などといふ三瀉湖があり、那谷寺などといふ名勝があるからである。で、其處で下りて、山中行の馬車鐵道に乗る。山中まで、二時間と少しあれば行ける。

山中温泉は、地形としては、山の中の薄暗いやうなところだが、温泉にしては、頗る特色のある温泉場だ。旅館は吉野屋、三谷屋、

北陸の旅路

五五五

山代温泉

扇屋、龜屋など。私は吉野屋に泊つた。
この温泉も矢張内湯がなくつて、大湯へと出かけて行くのだ。湯女などにも面白い特色があつた。こゝから五六町で、蟋蟀橋といふ一奇勝がある。橋あり、亭あり、鮎を肴にして一酌するに可なりである。
山中から山代温泉へ一里、山中よりは此處の方が設備は好い。しかし、や、淫蕩な風が多すぎるやうな氣がする。ちよつとした公園がある。九谷焼の本場で、陶器を賣る店が軒を並べてゐる。

片山津温泉

片山津温泉は、汽車で行けば、動橋驛で下りるのだが、山代からは寧ろ車で行く方が便利だ。山代から里程二里に近い。柴山瀨の水中から湧出す温泉だけに、湖光山色相映發すといふ形で、山中、山代に比べて、感じが明媚だ。宿は森本、湯出、辻など、宿料も前の温泉に比べて、や、手輕だ。こゝから瀨を隔て、向ふに松林があるが、その向ふは怒濤澎湃とした太平洋で、その松原の中に、齋藤實盛の戦死した址がある。小さな墓が松原の中に残つてゐる。
栗津温泉も好い。その近くに、那谷寺がある。花山法皇が紀州の那智と美濃の谷汲と

小松町

を兼ねたやうだと言はれたので、其名を得た。山には、櫻と紅葉が多く、幽邃な好い處だ。動橋驛から一里。

三湖臺

小松驛には、多太神社、そこには齋藤實盛の冑、鐘のきれなどの寶物を藏してゐる。芭蕉は『奥の細道』でこゝに來て、『無残やな冑の下のきりくす』といふ句を咏んでゐる。こゝから一里ほど行くと、三湖臺といふ柴山、今江、木場の三湖を展開するところがあつて、ちよつと眺望が好い。臺の上には、たしか大きな松が一本立つてゐた。

小舞子

小松の先には、小舞子といふところがある。舞子に似てゐる處から、さういふ名を得たので、松のなびいてゐる形など面白い。そこには海水浴場があつて、夏は客が澤山に集つて來た。

安宅町

汽車はやがて手取川を渡る。これは白山から流れて落ちて來る大きな川で、鶴來町まで、六里、それから奥、白山の頂まで、猶五六里ある。白山は北陸の名山、それは汽車の中からもあちこちから見えるが、私は柴山瀨の向の松原の外れから、それを見て、美しいと思つた。

安宅の關、義経達の通つた安宅關の址は、今は海中一二里のところに没して、跡方も

ないといふことである。このあたりは、年々陸地が陥没して行くといふことだ。安宅は今は漁村の大きい位の町だ。

美川、松任、松任では饅頭が名物だ。それから町の聖興寺の内に、俳人千代尼の墓があつた。白山登拜者は、此處から出發して行くのを順路としてゐた。鶴來町まで二里二十四町馬車鐵道がある。

金澤は昔は百萬石の城下、今では北陸第一の都會、是非下りて、ゆつくり見物しなければならぬ。町はかなりに広く、停車場から、大通まで行くにも、車賃十二三錢は取られると覺悟しなければならぬ。大通は家並も揃ひ、人通も多く、賑かである。旅館では、淺田、毛利、住吉、大浦谷、雨谷、白山屋など、宿料は先づ普通一圓内外。

こゝで見るべきものは、昔の城址だ。しかし、明治十四年に焼けたので、今で残つてゐるのは石川門だけである。尾山神社は前田家三代の藩祖を祀つたもので、社殿も立派だし、庭も好い。ことに、樓門は三階で、不思議な建築をしてゐて、それに上ると、金澤の市街は一目に見える。附近に縣廳だの、議事堂だの、高等學校などがある。これから城址の方に入つて行くと、左に、例の名高い兼六公園がある。岡山の後樂園の野の庭



兼六公園福壽山

園であるのに對して、此處は山の庭園といふ感じがする。丘陵の上にあつて、樹木が深く繁つてゐるからであらう。兼六とは、宏大、幽邃、人力、蒼古、水泉、眺望の六を兼ねると言ふので、白河樂翁公の命名されたものだが、流石に、泉石の布置や、飛泉の位置や、亭榭樓臺の配合や、苦心のあとが歴々と指されるのは、この庭園である。面積二萬三千坪。日本武尊の像は、しかし俗だ。

淺野川大橋附近は、夏の夜は賑やかだ。その向ふに連つた卯辰山は、天正五年に上杉謙信が壘を築いたことのあるところだが、そこは眺望に富んでゐて、河北潟を見るの

に好い。其處には卯辰神社がある。東の新地は、大橋をわたつて、少し行つたところを右に入つたところで、いかにも、靡らしい好い気分がある。北國の色の白い女が多い。灯の影に袖の翻るのも美しい。

金澤の次驛は津幡、こゝで、登能に行く汽車が左にわかれて行く。

能登は七尾港と和倉温泉と、普通に見るところは先づ其の位のものだ。津幡を出て河内、北潟がちよつと旅客の目を惹く。それに、潟の外縁を縁取つた砂山を越して、日本海の怒濤の音を聴きこえて来るのも心持が好い。宇野氣あたりは、春は桃の花が多い。高松あたりから、段々あらはれて来る赤い砂山の上に松の靡いてるさまは、印象派の畫を見るやうだ。

寶達驛あたりに行くと、右に不動山脈の一名山寶達山が見え出して来た。敷浪附近は、昔は海であつた。七尾街道は、子浦といふ一邑を経て山に添つてついでるたらしい、邑智潟などは全く入江であつたのであつた。萬葉集に「之乎路からこゝ、越え来れば羽咋の海あさなきしたりふなかなかな」といふ歌があるが、つまりこの附近から海を見て咏んだ歌で、その當時のさまが思ひやられる。

羽咋には羽咋神社、それから西海岸路を三里ほど行つて、瀧岬の鼻の附近に、北國で著名の大社氣多神社がある。

能登の西海岸をたどるには、此處から入つて行くのだ。高濱、福浦あたりには、風景の好いところが非常に多いさうだ。富來あたりの海も見事だ。しかし普通の旅客には、一寸入つて行きにくい。

邑智潟の岸を汽車は縫ふやうにして通つて行く。眉丈山が右に、左に石動山脈を展開して風景が見えない。潟の水は淀んで静かに、蘆荻などが到る處に生えてゐる。

千路、金丸、能登部、——石動山には、能登部から上つて行く。東方二里、頂に式内伊須流岐比古神社がある。僧泰澄の時代には、山中に天平寺が設立されて、僧坊三百以上もあつて、香煙一山に遍ねかつたといふ。

七尾港に入つて行く感じは好い。碧い海、大きな島、汽船、帆船、岸には市街の瓦葺がくつついたやうになつて見渡されてゐる。いかにも海山が明媚だ。

七尾は北陸では、敦賀に次いで良港である。潟が深く入り込んでゐて、いかなる風をも支障することが出来た。従つて、日本海を航行する汽船は、皆な此處に集つて来た。

航路は、外國航路では、ウラジホストックと朝鮮各港とを連絡した定期航路がある。内國航路では、能登の東岸宇津港を基點として、東南、伏木、直江津に至る線と、飯田七尾間を航行する線との二つがある。

七尾では、古城址と、生國玉比古神社と、妙觀院と、國分寺址と、先づその位のもの。それから町を一廻りして、汽船なり車なりで、和倉温泉に行く。

和倉温泉は、北陸では著名な温泉場だ。山中よりもつとすぐれてゐる。湯の分量も多い。それに、共同浴場などは大きなものだ。それに、美しい海や、辨天島を前景に

してゐるので、旅の憂さも忘られるやうな心持がする。海中から温泉が湧出したので湧浦と言つたのを、後に、今の字に改めた。旅館は和歌崎、小泉、多田など。いづれの旅館からも、大抵は海と、辨天島と、能登島を見ることが出来るやうになつてゐた。

それに、この他に、島が多い。衝立島、机島、猿島などがある。

能登に來る旅客は、大抵、此處で引返すのが常だが、少し餘裕があつたら、東海岸を汽船で航行して見ると好い。和倉に荷物を置いて、そして一日二日行つて來てもわけがない。午過ぎに、和倉を出ると、夕方には宇津、小木、飯田、何處にでも行ける。中

でも小木港は好い。この旅館の二階から越中の立山を見た風景は、私に取つては忘れられないもの、一つだ。それに、此處まで來ると、七尾あたりではまだ見ることの出来ない漁市のさまが、一々面白く眼に映る。小木港の近くにある九十九灣も靜かな入江で、感じは好かつた。

飯田までは、汽船は行くが、それから珠洲岬まではまだ三四里ある。これは歩かなければならない。そこには温泉などもあつて、風景も好い。

能登に來た旅客は、再び津幡まで後戻りするのには厄介だから、七尾から汽船で、ぢかに伏木に渡る方が好い。この間の時間、三時間、石動山を前に、越中立山の山脈を左に、風景は何とも言はれない。甲板の上から見ると、氷見などといふ町は、丸で繪か何そのやうである。

伏木からは、高岡に行く汽車がある。

金澤から津幡を経て、高岡に來る間には、例の平家と義仲との古戰場である俱利伽羅の嶮がある。

其處にはトンネルが穿たれてある。

俱利伽羅といふ停車場から、峠の上まで十町、そこに手向神社があつて、それから猶上ると、三角測量點のあるところがあつて、眺望が非常に好い。加能越三州悉く一眸の下に集るといふ形だ。

山を越えりと越中だ。石動町の傍には、小矢部川が流れてゐて、そこから高岡、伏木の方へ行く舟楫の便がある。そこにある前田利家が佐々成政を防ぐために拵へた城塞の跡はや、見るに足りる。

高岡も矢張、小矢部川の河港を成してゐる。これから越中五十萬石の平野が開けて、やがて高岡市。

こゝで中越線の汽車が伏木から来て、北陸線の幹線と交叉して、北に向つて、戸出、出町、福光などといふところを通つて、織物の出来る城端町へと行つてゐた。

高岡市は銅器、漆器などを産した。それに富豪の多いのできこえてゐた。停車場の右には、櫻馬場といふ春は花で賑ふところがある。舊城址は公園になつて、樹木が茂つて、影が多い。射水神社は國幣中社、町は停車場から真直に行つたところを東西にひらけてゐるやうなところで、人家の大きいのが多い割合に、あたりは静かで、ひっそりしてゐる。

る。これも富豪が多いためであらうと思はれる。この大道を突當つて曲ると、やがて小矢部川の橋のところへと出て行つた。

停車場の西には、前田氏の菩提寺瑞龍寺の巨刹がある。

こゝから伏木港までは三十分位で行けるが、射水川の河口の泥砂のために、港は年々埋つて、港としての價値を次第に失ひつゝ、あるのは遺憾だ。しかし七尾、伏木、直江津間の汽船は今でも常に寄港した。

新湊町の向ふには、放生津潟といふ大きな潟湖がある。大伴家持の歌に見える名古屋の浦と言ふのは此處を指したのだといふ。

富山市も、今では北陸で金澤、福井に劣らないほどの繁華と發達とを見せて来た。商業市としては、金澤などよりも、或は此の方が勝つてゐるかも知れない。停車場は少し離れてゐるので、旅客は市街に入るには、電車で行くにしても、車で行くにしても、神通川の大きな橋を渡つて行かなければならない。この川は飛騨の山の中から流れて来る荒川で、年々洪水が出て橋を架けることが出来ない。昔は舟橋であつたので、有名な市街には電車が通じて、市外の共進會式場であつたところまで通じてゐるから、旅

客には至極便利だ。

神通川では、鮭、鱒、鮎が取れる。鱒の押船など土地での名物だ。

此處は佐々成政のゐるところで、徳川時代には、加賀の前田の分家がこれを領した。城址には、縣廳や議事堂などがある。旅館は富士ホテル、高松屋、富山館など。料理店は水月樓、島屋など。藝者もかなり多い。

此處で見えるものは、柳町の於保多神社、舊城内の日枝神社、五番町の光嚴寺、梅澤町の大法寺、それに、常盤町には、東西本願寺の別院が並んで立つてゐる。その他、こゝで有名なのは、富山の反魂丹、つまり賣藥の行商であるが、これが今では製藥會社などといふ株式組織の大きなものになつて、藥を製するものと、藥を賣るものと分業になつてゐる。俗に、これは藩祖が、殖産の道を講ずる傍、之を行商させて、全國の様子を探らせたものだと言ふが、それが今も猶かうして榮えてゐるのは面白いことだ。

この他、市の西に吳羽山、そこには梅や桃があつて、春は市民の行樂の地とされてゐる。秀吉が佐々成政を攻めた時、此處に本營を置いたといふことである。山の北側には、長岡御廟といふ前田氏の墓塋がある。また市の南二里ほどの處に、式内社鵜阪神社があ

る。近江の筑摩の鍋冠祭などのやうに、尻打祭と言ふのできこえた社だ。しかし、今ではその儀式はすたれてない。

市の北二里にある東岩瀬港は、伏木直江津間の汽船の寄港地で、丁度市の前港を成したやうな形になつてゐた。

立山に登るには、富山市から、太田月岡を経て、上瀧に行く。そこに行くと、立山一帯の翠嵐は衣袂を掠めて迫つて来る。それから常法寺川をわたつて、岩峰寺に一の華表、猶三人行つて籠の宮、それから三里、彌陀ヶ原、一里半、追分、それで室堂に行く路と立山温泉に行く路とが右と左にわかれる。信濃の大河から針木峠を越えて、黒部川の谷に下りて、それから立山に登つて来る路は、案内者がなくつては、とても通れない路であるが、さら／＼越と言つて、昔からあつた間道ではある。日本アルプス登山者は、よくこの道を通つて行く。

富山から、汽車は水橋、滑川、魚津といふ順である。魚津は賑やかな特色ある漁市で、先年富山縣共進會の時に水族館がそこに置かれた。例の登氣樓の本場で、五月頃、それがよく見えるといふことである。橋南溪の『東遊記』にそのことが詳しく書いてある。

この間の海岸平野は、数條の川の流れて海に注ぐところで、いつも洪水の憂が絶えない。ことに、黒部川は激流で、その流域は四十八瀬と言つて、水の出る時には、昔はこれを拒ぐ手段もなく、唯、手を束ねて、水の流る、を見てゐたものであるといふ。今でもそこに愛本橋といふ奇橋がかつてゐる。黒部の奥には、鐘釣温泉がある。又、小川といふ川の谷の奥には小川温泉がある。

泊驛あたりに来ると、山の姿の非常に大きくなつて来るのを誰も見落すものはあるまい。つまり日本アルプスの末梢がこゝに来て日本海に落ちてゐるのである。越中と越後の境である。

昔はこの徒崖に道路をつけることは出来なかつた。波打際を通つて行くより他仕方がなかつた。で、道路は市振から二三里、所謂親不知、駒返の嶮を過ぎて、波打際つたひに、青海川へ行つてゐた。加賀の百萬石の力を以てしても、この道路を何うすること出来なかつたほどそれほど嶮しいところであつたのだ。親不知の嶮は古來人口に膾炙してゐた。

今では、しかし、この間に坦々とした大道が出来たばかりではなく、汽車はトンネルを

所々に穿つて、平氣でそれを通つてゐる。親不知の嶮も今では、全く古蹟になつて了つたわけである。

そこに行くには、市振驛から行つても好いし、その先の親不知驛から行つても好い。市振の方が路は樂だが、親不知から行く方が景色が好い。親不知驛は、昔、駒返と言つた難場のぢき近くにあつて、地は歌村に屬してゐた。停車場は全く海に面してゐて、そこから少し戻ると、海水浴場らしい小さな旅館が一つ二つあつた。海上には島などが浮んでゐた。

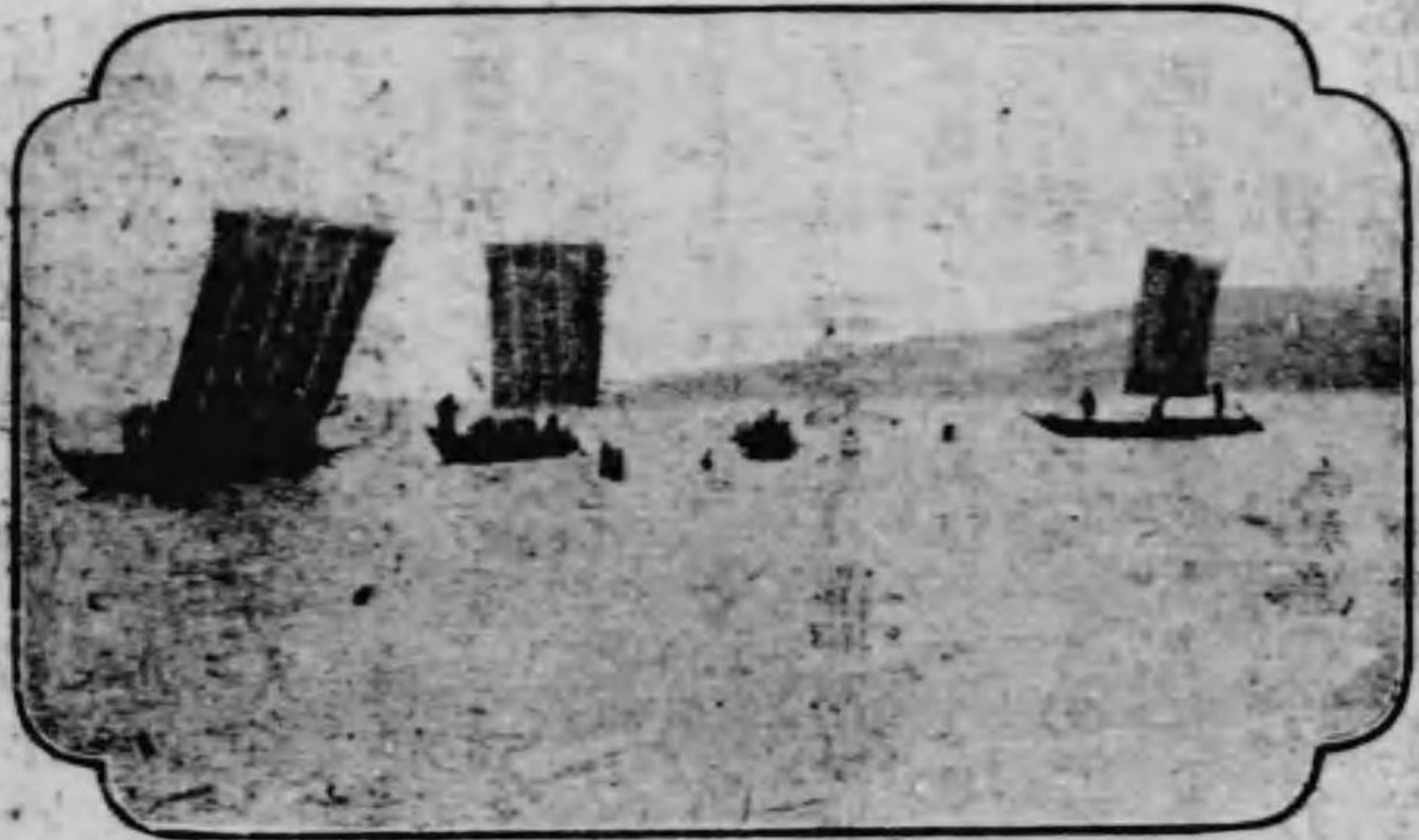
そこから外波まで一里、それから國道を半里ほど行くと、向ふに親不知の徒崖の高く海を壓して聳えてゐるのが見えた。成ほどえらい處を通つたものだと思はれるやうなところだ。で、徒崖をぐるりと巡つて、トンネルの傍から下りて、滑に出る。そこに昔の道路はあつたのである。難場での難場は、その間五六町であるけれども、成ほど、冬などは波が高く絶壁の上を洗ふやうだから、容易には越えては行かれないかつたらう。この間に、岩窟が三つほどある。それは皆な昔の人達が波の具合を見ては、走り、走つてはまたかくれた窟である。一個の握飯が金一兩に代へられたといふ窟である。

五七〇
 で、三四町通り越すと、あとは平滑な沙渚で、市振まで行つてゐる。
 行つて見れば、他の奇もないが、このあたりは流石に風景が雄大で、波が高い。越後の鯨波の海岸などは、此處に比べると、丸で波もない位に思はれる。北海の海岸では、私は一番此處が好きだ。

これから青海、それから糸魚川町へと着く。此處は信州安曇郡から出て来る姫川街道の衝に當つてゐるので、人口も多く、町も賑やかだ。こゝから信州の池田まで、日本アルプスの側面を掠めて、十二三里、先年、水害があつて、路はすつかりこはれて了つたさうであるけれども、それでも、馬位は通ずるといふことだ。

町には、伏木直江津間の汽船は毎日寄港して行く。
 一の宮といふ社は、かなり古い社で、毎年三月の祭禮には、兒の舞といふ舞を奏する。古樂として名高いものだといふ。

能生驛では、一度下車して、町の東にある権現山と言ふのを見物すべきである。海もよし、岩もよし、芭蕉の吟じた『あけほのや汐にうづまく鐘の聲』の汐路の鐘も面白い。焼山火山群へは、此處から登つて行く。



名立の景

名立町は、橋南溪の『東遊記』の「名立崩」の中にあるやうに、昔はもつと海中に出てゐたのであつた。鳥首岬し平行する位に位置してゐた。それが寶暦年間地震にすつかり海に沈没して、そのあとに、今の町が出来たのであつた。町で見るべきものに、岩井觀音堂式内江野神社などがあつた。
 谷渚、郷津、——その郷津には、小さな海水浴場があつた。松などの靡いてゐる具合が趣致に富んでゐた。

概してこの海岸の汽車は、他の線に見ることの出来ないほどそれほど海近い波打際を走つてゐる。絶壁と徒崖と沙渚の間を辛うじて通つて行つてゐるやうな汽車である。従つて、徒崖、漁村、漁村の屋根の貝殻、碧い碧い海、さういふものが常に旅客の眼

を離れない。それに、海は荒い北海の海で、風景は飽まで雄大である。旅客の是非一度は通つて見なければならぬところだ。
郷津から見た直江津港は、頗る印象的である。沖に添つた汽船、煙突から漲り出した煤煙、船、岸の人家、その向ふには、米山の翠微が美しく靡きわたつて見えた。トンネルを出ると、直江津である。

三十 北海道と樺太

- ▲函館 小樽間一五九哩、三等二圓七錢、時間、急行で九時間。
- ▲函館 釧路間は毎日午前一回急行、午後十時函館發、翌日の午後九時着、賃金

▲三等四圓十五錢。

▲函館 旭川間 二六五哩 時間一七時間 三等賃金三圓。

▲函館 上磯間軌道、十三錢。

▲小樽 岩内間哩數九、三、賃金三等十二錢。

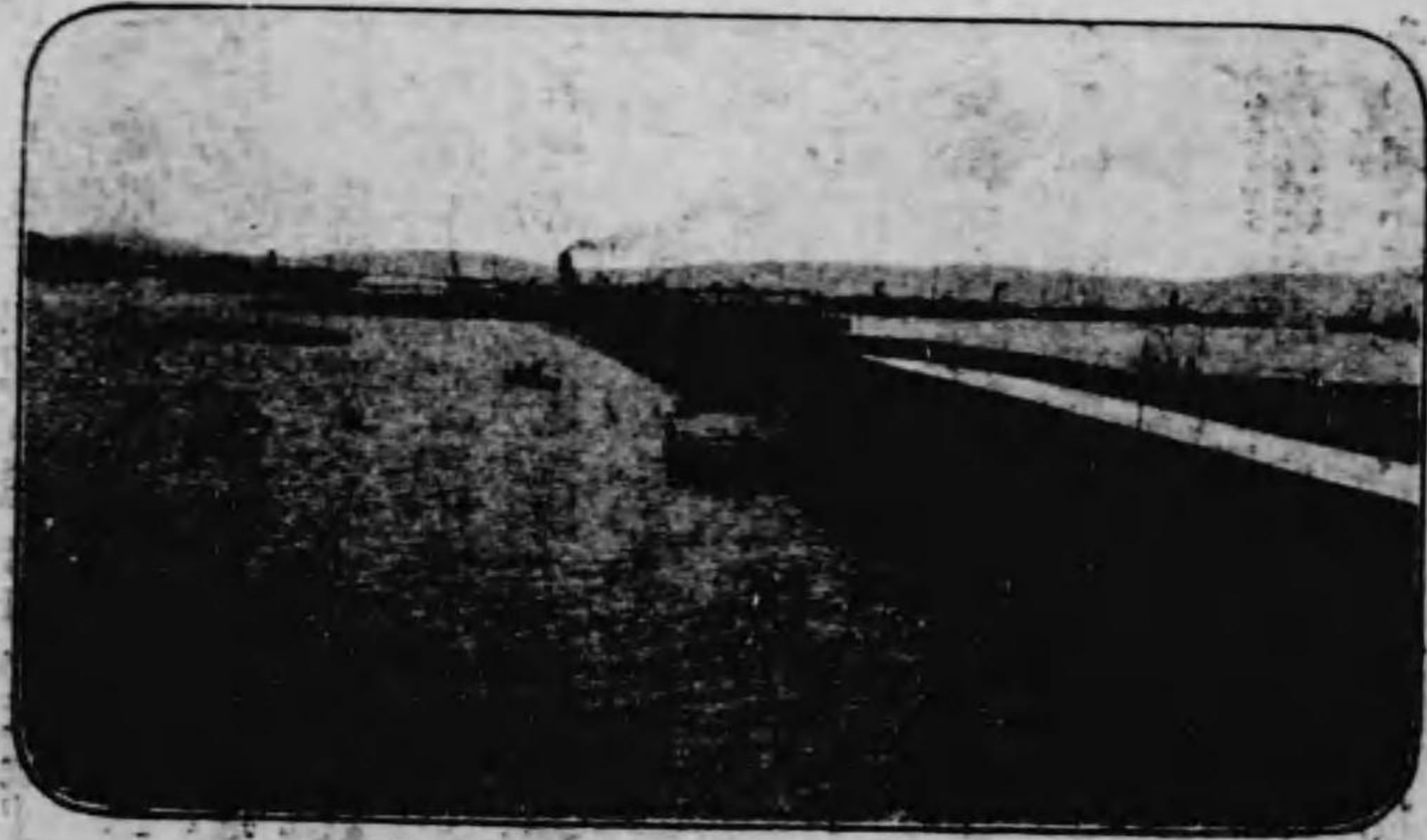
▲岩見澤 萬字間、哩數一七、三、三等二十九錢。

▲深川 留萌間、哩數三一、一、時間二時間と少し、三等賃金五十二錢。

▲岩見澤 室蘭間、哩數八三、七、一圓三十一錢、追分から夕張線がわかれて行つてゐる。

▲池田 網走間、哩數一二〇、三等賃金一圓六十八錢。

青森港を出た連絡船が津軽海峡をわたり終ると、函館の港は、登氣樓か何かのやうにその向ふに見え出して來てゐた。



函館港

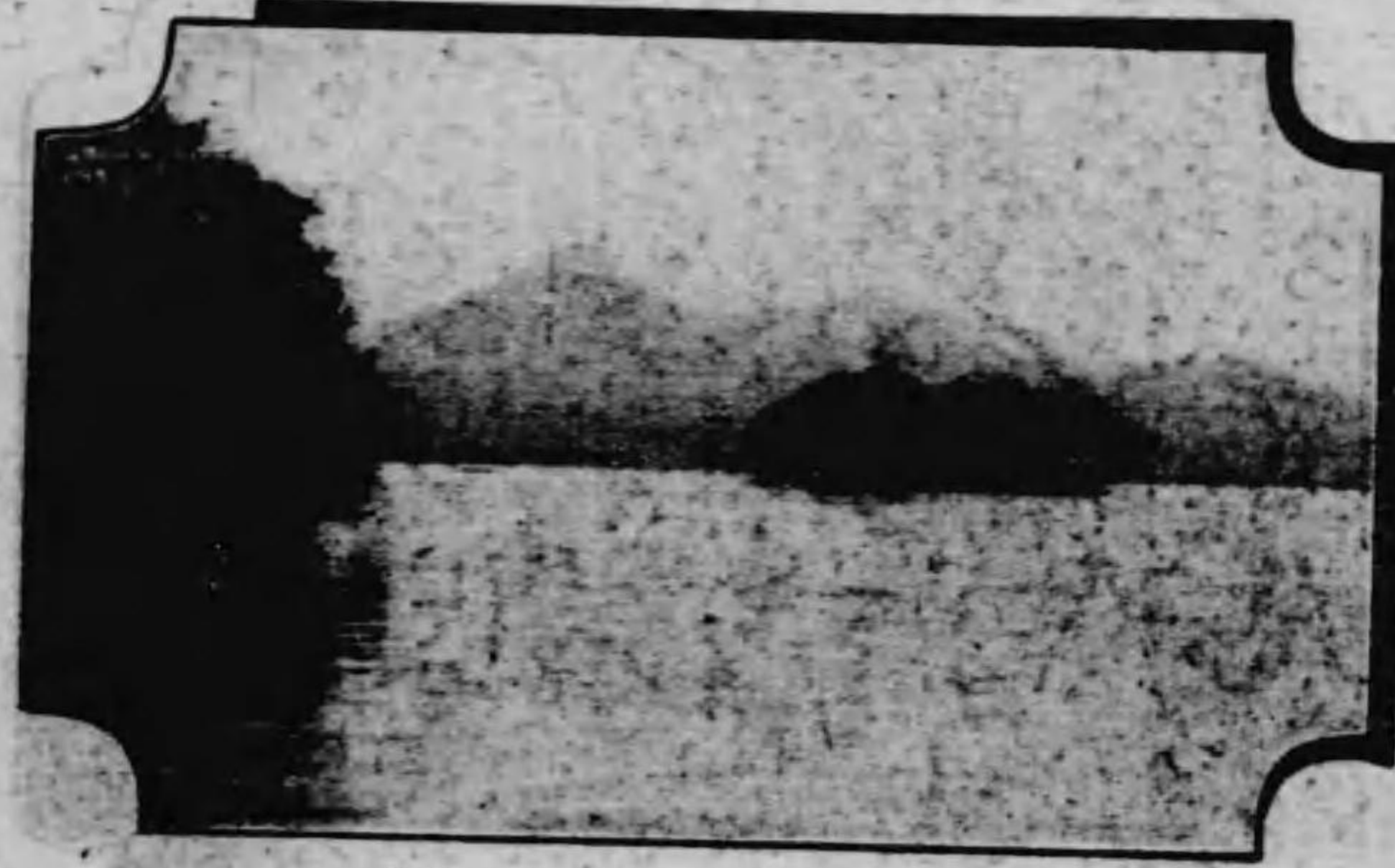
本州島から此處に來ると、丸で感じが違ふ。陰氣なところから急に明るいところに来たやうな気がする。港には船舶が輻湊してゐる。棧橋には汽船がかつてゐる。それに、町そのものが既に明るい。

埠頭と北海道縦断の幹線鐵路の停車場とは略々相接してゐる。町には電車が走つてゐる。

で、先づ其處で市中を見物することになると、船附から三十町ほどで、公園に行くことが出来る。摺鉢山に登ると、立待潮首の兩岬に包まれた美しい灣内の風景を唯一目に見わたすことが出来る。好い眺望だ。公園には、水産陳列所などがある。公園に近いところに谷地頭の温泉がある。元町附近には、イギリス領事館、商業學校、函館支廳などがある。

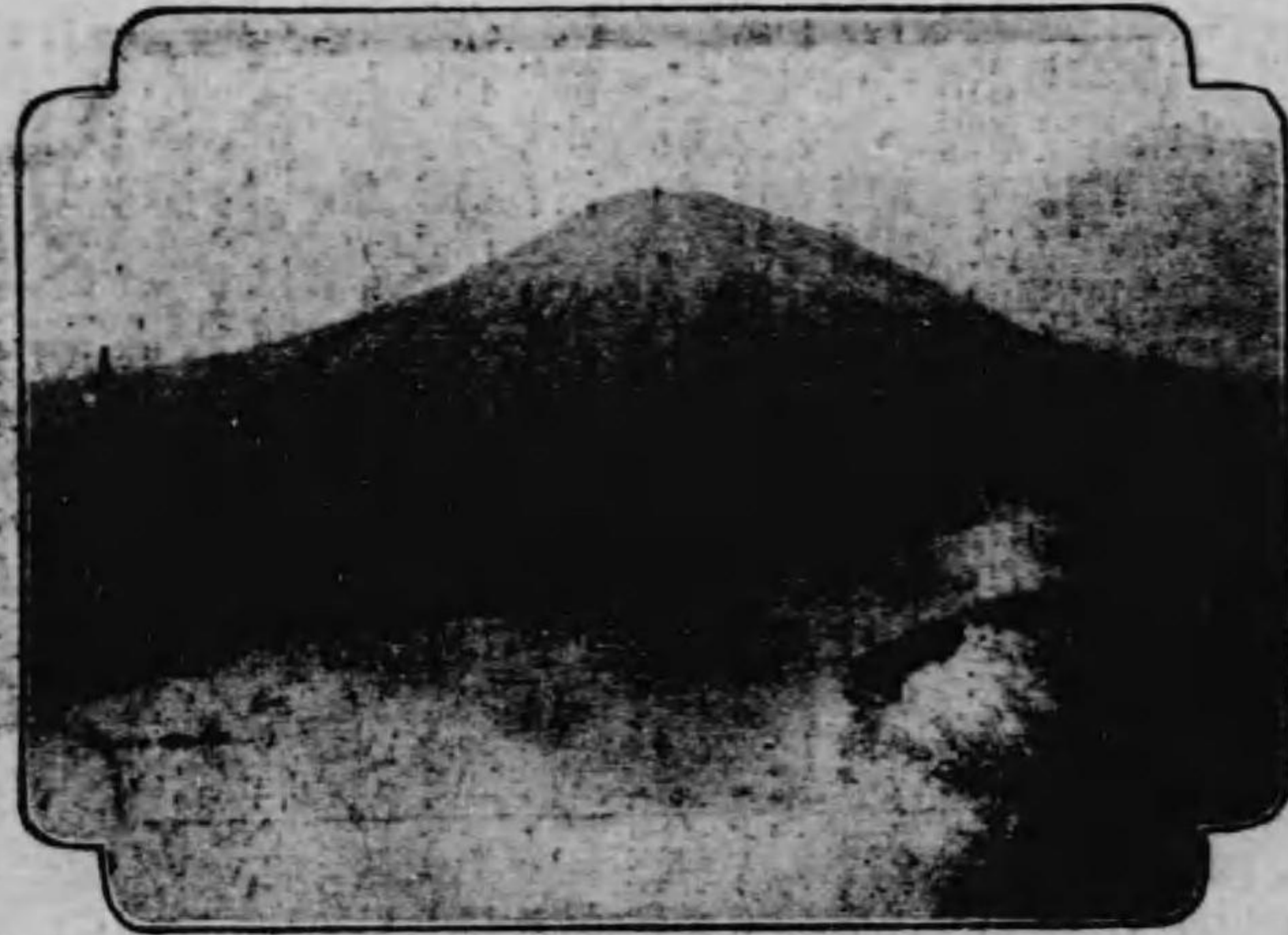
どがある。函館八幡へもちよつと参詣するが好い。海岸の大森濱には、海水浴場があつて、風景もよければ、感じも好い。しかし、函館で泊るなら、市の郊外一里半ばかりの處にある湯の川温泉に行くに限る。それへは馬車鐵道の便があるから、行くにもわけはない。旅館の設備もかなりに整つてゐる。その他、臥牛山の中腹の七面山は、日蓮の弟子日持上人が北に向つて結縁のために題目を石に彫つたところで、眺望に富んでゐる。五稜廓——榎本武揚等が幕府の爲めに最後まで戦つた五稜廓は、郊外一里のところにあつて、依然として五稜形の外濠を残してゐる。この他、好事者は、二三里隔つた海岸のトラビストの修道院を訪問して見るのも好い。日本では唯一のトラビスト修道院である。

函館から大沼の畔まで行く間は、原野と村落と、牧場と、杜とがあるばかりで他の奇がない。唯、漠として、いかにも北海道に來たといふ感じがされるばかりである。長いトンネルに入る前に、振返つて見た函館灣は美しい。で、大沼小沼の風光明媚な山水郷の中に入つて行く。大沼と小沼と接したところが狭くくびれてゐるので、一名瓢箪沼と言はれてゐる。湖上には駒ヶ嶽火山が巍然として聳えてゐて、風光は宛然一幅の畫圖で



大沼

ある。成ほど新三景の候補者に入れられるのも無理はないと思はれる。島の點々として湖上に浮んでゐる形も好い。この多くの島は、駒ヶ嶽の爆裂に歸因する所謂『流れ山』から出来たものだといふことである。大沼驛の近所は、近來公園として經營されてゐて、大山元帥だの東郷大將だの、銅像が立つてゐる。族亭などもあつて、酔を買うに足りる。こゝから駒ヶ嶽へ登路三里十二町。で、駒ヶ嶽驛を通りすぎると、汽車は次第に下つて、向ふに美しい噴火湖の風景を展開する。こゝから汽車は膽振國に入つて、八雲、山崎などといふところを通る。黒岩驛附近には、海岸に奇岩が多い。それから牧馬の盛んな長萬部を経て、後志國に入る、黒松内驛に着く。こゝから壽都へ四



北海道と福太

望遠の山蹄羊方後

里十四町、熱乳を過ぎて、再び膽振國に入り、狩太驛に行くと、マツカリヌブリの雄大な姿がその前にあらはれて来る。この山は一に蝦夷富士と呼ばれて、昔から内地人に知られた山である。洞爺湖はこの山の中にある。やがて俱知安の原野、しかし今では開けて、牧場、村落互に相交错すといふ形である。大豆、小豆、小麦、大麦などが盛に出来、こゝに亞麻が最も盛である。帝國製麻會社の亞麻製線所が此處にある。これから後志膽振の境の山脈を過ぎて、汽車は後志國に入つて行く。小澤驛から日本海沿岸の岩内港へ四里。この間に軌道の

便がある。岩内港は昔から開けたところで、農業水産共に盛で、ことに、鱈と鱈肝油が著名である。鱈の産地としても、かなり世に名高い。

小澤驛から、難工事の一つとしてきこえた大きなトンネルを越えて、余市川の谷に添つて、汽車は次第に海に近いて行く。左には積丹半島がやがて見え出して来る。余市に行くくと、もう其處は、小樽港をその西に持った海岸で、今までは感じが總で變つて来る。余市の海岸は、左にシリツハ岬、右にカゲト岬を望み、遠浅で、風光が頗る明媚だ。夏は海水浴に人が多く出る。鱈、鮭、鮪なども澤山に取れる。苹果も名物だ。

これから、小樽に行く間は、大抵海岸で、眺望も好く、感じが好い。それに到る處に海水浴場が開けてゐる。忍路は昔運上所のあつたので知られたところである。これからや、海岸を離れて、丘陵の中を行く。苹果園などが多い。

小樽では、水天宮山の上が眺望が好い。そこから見ると、港は一目に見わたされる。北は茅柴岬、西は平磯岬、その間を劃つて、東北及び西南から防波堤が出てゐて、灣形をなしたその港の中に汽船が一杯に碇泊してゐる。烟突が林立して煤煙を吐いてゐる。そしてその岸に並んで、矢張、灣形に市街の連つてゐるのを見る。成ほど良港だ。明治の



小樽

始めには一流村であつたものがかうした立派な市街を形づくりに至つたのも尤もだと點頭かれる。こゝで見るべきものは、花園町の公園、手宮の遊園地、住の江町の住吉神社、色内町の繁華、北濱町の運漕店、倉庫などである。手宮公園から見た石狩、天鹽の山々の翠微も美しい。

それに、狭斜街もかなり賑やかだ。藝者は、北海道では此處が一番だと言はれる位である。旅館は越中屋、キト、角キなど。宿料はあまり廉でない。一圓五十錢乃至二圓位取られる。概して、北海道は旅籠料が廉くない。小樽と札幌の間では、張碓驛附近に、神居古潭の奇岩が先づ第一に来る。奇岩と絶壁



札幌中島の公園

五八〇
 それに怒濤の掀翻する形が面白い。海山の眺望もすぐれてゐる。次に、銭園に明媚な海水浴がある。北海道では屈指の海水浴場として昔から知られてゐる。それから石狩國に入つて輕川驛に温泉がある。右に見える手稻山の半腹にある温泉場で、浴舎の二階から札幌平野を見渡し、石狩川の銀線のやうに折れ曲つて流れて来るのを見ることが出来る。好い温泉場だ。琴似には、本道で最も古い兵村として知られた琴似屯田がある。
 札幌は立派な市街だ。一寸内地では見ることの出来ない。始めて行くと、何だか外國にでも来たのでないかと思はれる。それと言ふのも、新開地で、理想的に市街がつくられて

るからであらう。形式はアメリカ式ださうだが、丁度碁盤の目のやうに、廣い街道が縦横に通じて、アカシヤや其他の行樹がその街道の兩側を飾つてゐる。
 停車場を下りて、先づ北海道廳のあるところに行つて見る。道廳の建物は中々宏壯だ。その近所に帝室林野管理局支廳だの、地方裁判所だのがある。博物館は、本道産出の天然物人類學の標本を完全にあつめてゐるのできこえてゐる。殊に、ブラツキストン氏採集の鳥類標本は、世界でもめづらしいものであるといふことだ。それに、この附近は幽邃閑雅で、小公園の趣を成してゐる。植物園にも見るものが多い。農科大學の建物も立派だ。樓上の時計臺は、遠くから見える。
 大通の西三丁目には、屯田兵時代から長く本道の司令官であつた永山中將の銅像がある。西七丁目には、開拓使長官として功勞のあつた黒田清隆伯の銅像がある。
 圓山は市街の西の方にある。こゝには旅客は是非行つて見なければならぬ。そこにある官幣大社札幌神社は、開拓守護神として大國魂尊、大日貴尊、少彦名尊の三座を祀つたもので、本道の總鎮守である。境内はひろく、杉の古樹の間に櫻の花などが咲いて、春は賽者が多い。圓山の中腹には温泉がある。浴舎は山に凭つてつくられてある

ので、眺望がよく、札幌市街を一目に見わたすことが出来る。

中島遊園地も行つて見なければならぬ。そこに行くには、大通から本願寺別院、新善光寺、中央寺などの大きな寺院のあるところや、劇場のあるところなどを通つて行く。停車場から南へ二十町ほどで、豊平川と創成川との間に挟まれてゐる。木が多く、丘もあり池もあり、花なども咲いて、遊びに行くのに適してゐる。物産陳列所に入つて、本道の物産を研究して見るのも好い。遊園地の隣に岡田花園がある。

町で大きな會社は、北七條東一丁目にある赤煉瓦造の製麻會社と、北二條二丁目にある大日本麥酒株式會社とこの二つである。

月寒には、第七師團第二十五聯隊の兵營がある。

札幌に來た人は、次手に、豊平川の上流にある定山溪に行つて見る必要がある。温泉のあるところまで、札幌から七里あるが、この途中、御料橋あたりからの山水が頗る人目を刮せしめる。溪流としては、北海道では屈指のものであらう。温泉もまた閑靜で好い。設備も整つてゐる。交通には、馬車がある筈である。

で、札幌にわかれて北に向ふとする。江別驛に行くと、旅客は石狩川の溶々として流

れ落ちて來るのを見ることが出来る。千歳川の鐵橋あたりの眺望は殊に好い。石狩川は舟楫の便に富んでゐる。ことに、道廳では、毎年四月から十一月まで、汽船二隻、淀川船十隻、小廻船三隻を備へて、補助金を與へて、上は札の内、下は石狩までの定期航路を開かせてゐるので、樺戸、浦臼地方に行く人は、皆なこの舟路に由ることになつてゐる。

岩見澤も明治になつてから開けた。開拓使時代には、全くの原野で、幌内炭坑の人工が水流に就いて草庵を結び、水浴を以て湯浴に代へ、湯浴澤と言つたのが、今の名になつたのであるといふことだ。今では、人口三萬を有する大きな市街になつて、ことに、右に室蘭本線を岐つてゐるので、交通上非常に重要なところとなつた。しかし、町には、さう大して見るものはない。但し、夕張鑛山に行くには、こゝで汽車を乗替へる。

樺戸監獄署のある樺戸は、こゝから西北四里、石狩川の西岸に位してゐる。

で、本線は愈北に向つて行く。瀧川驛では空知川が右から石狩川に流れ落ちてゐるのを見る。深川驛は、雨龍地方と空知地方の交通の衝に當つてゐて、かなり賑やかだ。こゝから日本海岸の留萌へ汽車はわかれて行つてゐるが、時間で四時間半で其處に達す